

## 水谷悌二郎日記抄録

広開土王碑研究を中心に

The Abstract of *MIZUTANI Teijiro* Diary: Mainly Study about  
Stone Monument of the King *Koukaido-ou*

TAKEDA Yukio;  
INADA Natsuko and MIKAMI Yoshitaka, eds.

武田幸男 翻刻・解説  
稲田奈津子・三上喜孝 編集

### 序文

高句麗の広開土王碑は、よく知られているように、日本列島を含む東アジア古代史研究に不可欠の同時代史料である。

しかし、その広開土王碑の学術的な研究方法論を確立し、当時の研究水準を一気に引き上げた水谷悌二郎氏かれ自身に関しては、まだ、よく知られているとは言えないのではなかろうか。本稿は広開土王碑研究に心血を注いだ在野の研究者、水谷悌二郎氏のリアルな人と学問について、広開土王碑を中心に集成著録したものである。

水谷悌二郎氏は1930年代に、故郷の三重県桑名市多度ゆかりの「多度神宮寺伽藍縁起并資財帳考」、中国漢代の楽浪郡粘蟬県碑に関する論文「粘蟬碑考」を発表していたが、ほぼ半世紀にわたった研究生活を通じて最も高く評価されるのは、末松保和先生が従来の広開土王碑の「研究の流れを一変せしめた」と評した論文、水谷氏入魂の「好太王碑考」（『書品』100、1959年6月）といっても過言ではないであろう。

論文「好太王碑考」は、その発表から18年ほど経過したころに、ようやく著書『好太王碑考』付「水谷拓本（縮尺写真）」（開明書院、1977年9月）として、末松先生の「解説」を収めて刊行された。この水谷氏の研究構想『好太王碑考』の研究史上における特徴は、私見によれば、第一に、広開土王碑墨本の基本的三類型、即ち今にいう原石拓本、墨水廓填本（雙鈎廓填本）、石灰拓本の三類型を各々峻別し、また説得力のある論拠に基づいて碑石の原状に最も近く、最も信用できる墨本類型は原石拓本であると指摘したことである。

第二に、原石拓本の実態とその性質を追求し、その特質を具備した拓本を東京文京区本郷の江田文雅堂で発見し、戦禍の激しい戦争末期においてその拓本、いわゆる「水谷拓本」を入手したことである。そして、第三に、その水谷拓本を熟覧精査して、その当時としては断然精度の高い釈文、いわゆる「水谷釈文」を作成して提示公開したことである。

以上の特徴に関連して、筆者の印象に残るのは、真実追及に向かって突き進む学問的探究心である。その水谷氏の不屈の探求心は、戦時下体制の厳しい時代を背景に、原稿用紙すらまな

ぬ戦中・戦後の不自由な時期において、既存の学界とほぼ無縁な孤高の研究環境において、未曾有の困難な時期においてこそ発揮された。そのことが、いま改めて思い出されてくるのである。

水谷氏がかつて情熱を傾けて追及し、ついに入手愛蔵した水谷拓本は、その後、水谷家のご厚意によって国立歴史民俗博物館に寄贈された。その過程において、筆者は当時の館長・石井進氏の意をうけて、種々お手伝いをするうちに、水谷家の方々と親しくしていただくようになった。水谷氏の書き残した数々の学問的遺品、即ち広開土王碑に関する何冊かの稿本や、多数の日記帳等の貴重な遺品の存在を知ったのは、ちょうどそのころであった。

筆者は水谷氏の広開土王碑に対する斬新かつ精緻な研究成果と、その研究成果の形成過程に強い関心を寄せていたので、稿本・日記帳等の借用を願い出たところ快諾していただいた。また、その後にも、別の稿本の追加借用が許された。

最初に借用したのは、『(昭和)二三年稿本』(稿本A, 2冊), 『二四年稿本』(稿本B, 3冊)と大正7年度～昭和46年度の「日記帳」42冊(計7年度欠如)であった。各稿本のメモや日記帳によって整理してみると、稿本Aは水谷氏が章節を立てて書き続けてきたものであり、それを学術雑誌に発表するために急遽要約し、減量したのが稿本Bであって、後に『書品』100号の論文「好太王碑考」として発表された。

また、追加借用した稿本は、『(昭和)二〇年稿本』(「碑辞稿本」1冊, 他に欠如あり), 『四分冊稿本』附1冊(「好太王碑文研究」4冊, 1冊欠如)と『碑辞證例写真臨模』(「證例稿本」1冊, あとで稿本Aに分散・転用された)であった。

以上の稿本五部と既刊の論文・著書を相互に対照考察することによって、水谷氏の体系的な研究構想《好太王碑考》が形成される過程とその系統観、即ちいわば本流としての『二〇年稿本』→稿本A→稿本B→論文「好太王碑考」→著書『好太王碑考』の系統と、それとは異なる傍流の『四分冊稿本』の系統という二系列の系統観が明らかになった。『四分冊稿本』は論文「好太王碑考」を発表した後も、手元に置いて終始添削し続けた水谷氏の手沢本であった。

それらの稿本とともに重視したのは、水谷氏が大正7年から日々克明に記入した「日記帳」であった。ただし、日記帳を手にとって少々困惑したのは、42冊に達する冊数の多さもさることながら、手帳用の小さな鉛筆でギッシリ詰めて書かれた小さな字、当日欄のスペースに収まり切れずに長く続く文章、時には後に続く文章を見失うような文章構成であった。それに加えて、当時の日記帳の紙の粗悪さが拍車をかけた。いま振り返ってみると、日記帳の大半は二倍か四倍に拡大コピーして、東大退職後に勤務した大学に往来する新幹線で、数年ほどかけて判読し、思い感じたままに注記した車中での記憶がおぼろげながら蘇ってくるのである。

日記帳の判読は必ずしも容易ではなかったが、存外、楽しい作業でもあった。水谷氏の日記帳の率直で生き生きとした文章は、筆者の戦中・戦後時の生活体験や様々な回想と一部重複する部分もあって、あるいはそれに共鳴し、感動を呼びおこし、時にはその後の筆者

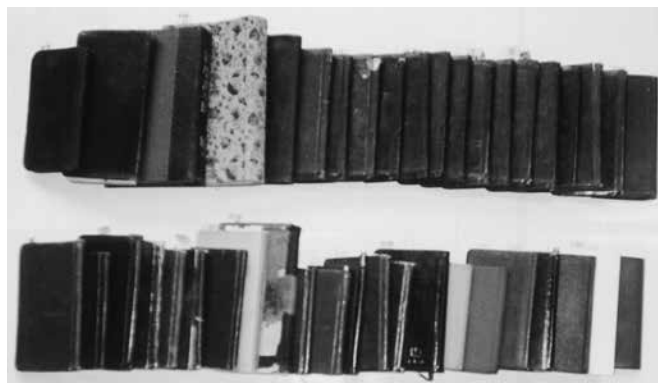


図1 日記帳42冊

の研究に示唆するところの多いものであった。だが、なによりも注目したいのは、予めそかに期待していたように、水谷氏の広開土王碑研究の形成過程のほぼ全容が、各種拓本の性格判定から拓字一字の釈文を新たに得るに至るまで、水谷氏のその時々の驚きや喜びとともに確認されたことである。

水谷日記の抄録は、広開土王碑に関する記事に限定したつもりでとりかかったが、やがて抄録対象を大幅に拡大することになった。一見して、広開土王碑と関係がなさそうな奈良・京都の寺社巡り、東京多摩川辺りの貝塚・土器探し、多読・乱読の性癖等々は、水谷氏の研究方法の形成と全く無縁であったのだろうか。東京を焦土と化した戦争・空襲・爆撃・戦災等は、水谷氏の研究に影響を及ぼさなかったのだろうか。このように考え始めると、抄録しなかった日記の分量は自ずと減少していった。

そうとはいっても、判読・翻刻した「日記抄録」は相当膨大な分量になった。その日記抄録に関する問題は□記号で示した文字、即ち釈読できなかった文字がかなり多いことである。このたびは、この機会に改めて判読・翻刻する試みも考えられないではなかったが、誠に残念ながら、その願いは叶えられなかった。さきごろ水谷家に連絡し、水谷悌二郎氏の稿本と日記帳の所在をお尋ねしたところ、いま同家には見当たらず、親戚一同の方々もご存じないとのことであった。

日記抄録のもう一つの問題は、筆者が日記の各条に注記した「解説」である。じつは、解説とは名ばかりで、日記に見える用語・文献・稿本等の説明のほか、日記各条の内容の特徴、各条記事間の相互関係、水谷氏の書き癖やかれのその当時の動向等について、その時々を感じ、気づいたままに書き記したものである。それは筆者の私的な備忘録に過ぎず、読者などは全く想定していなかった。

従って、このたびは、この備忘録を省略削除することも考えられた。しかし、結局、そうしなかったのは、この機会に水谷氏の人と学問について広く知っていただきたいからであり、またこの備忘録が所在不明になった日記帳の文章を多数引用しているからである。換言すれば、この日記抄録は、甚だ不完全ながらも、水谷日記の原文を書き留めた唯一の文献ということになるのである。

水谷氏の日記抄録が公開されて、国立歴史民俗博物館所蔵の「水谷悌二郎氏旧蔵原石拓本」が東アジア古代史研究において占めた史的意義を認識し、あるいは水谷氏の愛すべき人となりと不屈の学問的探究心に注目し、関心をもっていただくならば、翻刻・解説者としての筆者の喜びは、それに勝るものはないであろう。

序文を結ぶにあたり、水谷氏の日記抄録や水谷家の系図等の本誌掲載を了承し、種々助言していただいた水谷信子様（悌二郎氏の次男・吉夫氏の妻）に厚く謝意を表するものである。また本稿の企画、各種の原稿の補充・整理、手数のかかる困難な編集を進んで担当された稲田奈津子・三上喜孝の両氏に感謝する。

2021年2月7日識  
武田幸男

#### 参考文献

武田幸男 『広開土王碑との対話』（白帝社、2007年）第七章「水谷悌二郎の広開土王碑研究」、『広開土王碑墨本の研究』（吉川弘文館、2009年）各論一第一章「水谷悌二郎の「原石拓本」研究」

## 編集にあたって

水谷悌二郎氏の日記を公開することにした経緯について説明しておきたい。

序文にあるように、武田幸男先生が東京大学退職後に勤務した大学に往来する新幹線の中で、膨大な水谷悌二郎の日記を数年ほどかけて判読し、そこに注記を加える作業を続けていたという話を、稲田と三上はいくどとなく武田先生からうかがっていた。水谷悌二郎氏の日記の記述は、武田先生の2冊の著書（『広開土王碑との対話』〔白帝社、2007年〕『広開土王碑墨本の研究』〔吉川弘文館、2009年〕）で紹介されているが、それはほんの一部であり、その背後には、膨大な量の日記の翻刻があることが、その話から容易に想像できたのだが、それがどのようなものであるのかは長らくわからなかった。

2017年に、水谷悌二郎氏の日記のコピーと、それを翻刻した武田先生の手稿を拝見することができ、大変驚いた。その日記の膨大な分量もさることながら、武田先生による文字通り心血を注いだ翻刻と、水谷氏の研究を追体験するような数々の注記に、圧倒されたのである。これを未公表のままにしておくのはじつに忍びなく、なにより、広開土王碑研究にとって学史上においても欠かすことのできない水谷悌二郎氏の研究の背景、さらにいえば在野の研究者の学問的形成的過程を知る上で、またとない史料なのである。

序文にも述べられているように、広開土王碑研究の最重要史料である水谷悌二郎旧蔵の広開土王碑原石拓本は、現在国立歴史民俗博物館が所蔵しており、この拓本を入手した水谷悌二郎氏の学問的形成的過程を明らかにすることは、所蔵館の責務ではないかと考え、武田先生による日記の翻刻と注記の公開を構想した。

水谷悌二郎氏が遺したものは、日記帳だけではなく、日記帳とは別の手帳も存在している。また、「稿本」と呼ばれるものもある。本稿ではこれらについても一部掲載しているが、これらの点を含め、本稿の構成について若干整理しておきたい。

水谷氏の日記帳を翻刻・注記したものが「4. 日記抄録（日記帳）」だが、日記帳とは別の手帳に記されているもののなかに、日記帳を補う内容を持つものもみられる。このうち、とくに広開土王碑研究に関連する箇所を翻刻・注記したものが「5. 日記抄録（看聞抄録）」である。

また、序文にもあるように、論文・著書にいたるまでの水谷氏の研究過程が窺えるのが稿本である。そのなかでも稿本Aと稿本Bは、「4. 日記抄録（日記帳）」にもたびたび登場しており、重要である。そこでこの2種の稿本の概要と目次について、「6. 稿本目次」として掲載した。

さらに、水谷氏の著書に序文を寄せるなど、水谷氏の拓本研究と大きくかかわった人物が、学習院大学教授などをつとめた朝鮮史学者・末松保和氏である。末松氏との関係がわかる書簡について、日記の関係部分の抄出や参考資料とともに提示したのが、「7. 末松保和氏関係記事」である。

本稿は、主に稲田が全体にわたり編集を行い、三上がこれを補助した。データ整理にあたっては、牧飛鳥氏にご協力いただいた。記して感謝を申し上げる。

稲田奈津子

三上喜孝

---

## 1. 水谷悌二郎氏年譜

### 【既存の経歴】

本号掲載の筆者水谷悌二郎氏は三重県の人、明治26年に生まれ、大正7年東京帝国大学法科大学（仏法）卒業、しばらく朝鮮銀行京城本店に勤務、のち同行大阪支店に転じ、大正13年に退職。更に昭和2年より東京帝国大学文学部に入学、東洋史学を専攻された。戦前、一時教鞭をとられたことがあるよしであるが、現在は専ら書齋にこもって研究にいそしんでおられる。本論文以外にも書に関係あるものに、既に公表された「粘蟬碑考」その他があり、将来或いはこれらも書品に掲載させてもらう機会があるかも知れない。[伏見冲敬]

（『書品』第100号「後記」，171頁）

### 【年譜】

明治26年（1893）0歳

12月24日 三重県桑名で出生（本籍は三重県桑名市大字今一色寺町三〇七四番地、同市大字今一色片町五番水谷吉兵衛の次男、母こう）。

明治33年（1900）7歳

□月 尋常小学校入学（～明治37年3月卒業）。

明治37年（1904）11歳

□月 高等小学校入学（～明治39年3月卒業）。

明治39年（1906）13歳

4月 県立富田中学校入学（～明治44年卒業力）。

大正元年（1912）19歳

9月 第一高等学校（第一部）入学（～大正4年7月卒業）。

大正4年（1915）22歳

9月 東京帝国大学法学部入学。

大正7年（1918）25歳

9月 東京帝国大学法科大学（仏法）卒業。

11月 株式会社朝鮮銀行入社、京城本社勤務（単身赴任）。

大正8年（1919）26歳

4月 大阪支店転勤。

大正9年（1920）27歳

3月27日 伊東富太郎と養子縁組、その娘の秀と結婚（妻の父は伊東富太郎、母は照代／大正11年6月9日養子のみ離縁〈本年譜大正13年条では妻方実家に転居、「3.日記目録」の大正14年注記参照、岳父との関係は続いている〉、水谷家に復籍す）。

・この年は日曜日の小旅行、写真に凝る。

大正10年（1921）28歳

2月25日ころ このころ撮影の写真あり（和服、全身座像）。

3月 東京帝国大学文学部（東洋史学科）入学（聴講生）、ただし通学せず。



---

・この年は日曜日の遠出，油絵，とくに写真に凝る。

大正11年（1922）29歳

6月7日 写真を撮影す（和服，上半身）。

大正12年（1923）30歳

・この年，油絵に凝る。

大正13年（1924）31歳

9月4日 依願退職により朝鮮銀行退社（27日，辞令受領す）。

10月14日 このころ転居（三重県香取の妻の実家に移る）。

大正14年（1925）32歳

・この年，釣り三昧，軽い読書で過ごす。

大正15年／昭和元年（1926）33歳

・この年，年初から読書欲が盛り返す。

昭和2年（1927）34歳

2月 上京，下宿。

4月 東京帝国大学文学部（東洋史学科）聴講生〔～昭和5年〕。

「学籍簿」は本年2月から翌年3月まで。この年，池内宏・宇野哲人・服部宇之吉・今井登志喜・原田淑人の講義に出る。時間割については「4. 日記抄録（日記帳）」4月20日条参照。

5月～ 池内教授の講義「満鮮上代史（麗済羅史）」（～翌年2月）。

11月20日 東京府荏原郡碑衾町大字衾114番地に転居。

12月2日 石印『旧拓好太王碑』（有正書局）を買う。

昭和3年（1928）35歳

2月15日 池内教授の聴講止め，宇野・原田・加藤・竹田を聴講する。

4月10日 今西积文（大日本時代史・古代上）・『石印好太王碑』を見る。

昭和4年（1929）36歳

4月～ 池内教授の講義「満州諸族史」（～翌年2月）。

6月29日 『楊守敬雙鈎本』を入手。

昭和5年（1930）37歳

2月26日 池内教授終講。

7月23日 『語石』の「好太王碑」を見る。

8月6日 「粘蟬祀山神攷」を草す。

昭和6年（1931）38歳

1月13日 『楊守敬雙鈎本』を売却。

3月12日 愛児孝夫，死亡。

31日 東京帝国大学文学部（東洋史学科）除籍。

昭和7年（1932）39歳

4月2日 日本書紀・三国史記・日本古代史や好太王碑等を読む。

5月1日 妻倒れる。

---

---

12月 3日 亜細亜協会「会余録」第五集を購入す。

4日 「会余録」第五集と『大日本時代史・古代上』、『石印好太王碑』（有正書局）とを対校。

14日 『神州國光集』（第九集，羅振玉本「好太王碑」）を購入す。

昭和8年（1933）40歳

1月30日 青江秀『高麗好太王碑之解（永樂太王墓碑釈文）』を見，翌日購入す。

2月 1日 好太王碑5資料を校合し校定す（～3日）。

5月31日 「南淵書」を徹底的に批判する（～6月28日）。

8月12日 「高句麗好太王碑字数攷」を草す。

昭和9年（1934）41歳

7月11日 三井聴水閣鑒藏本『高麗好太王碑』を購入。

10月15日・16日 久々に池内講義ノートを見る。

昭和10年（1935）42歳

3月25日 榮禧『高句麗永樂太王墓碑調言』（謄写版印刷）を購入。

9月 2日 雙鈎本『東夫余永樂太王碑銘』（「会余録」の雙鈎）を購入。

9月 3日 はじめて好太王碑文の「原拓」「最初拓」に触れる。

昭和11年（1936）43歳

10月 7日 銀座松阪屋第一古書展覧会，琳琅閣出陳の『初拓好太王碑』を獲，「宝物を獲た」と歓喜（所謂「水谷旧藏精拓本」，この後「好太王碑」に夢中になる）。

昭和12年（1937）44歳

3月 論文「多度神宮寺伽藍縁起并資財帳考」を發表（『画説』第3号）。

6月10日 論文「粘蟬碑考」を發表（『画説』第6号）。

10月 4日 「好太王碑ヲ見直シ、考へ直シ始メル」。

7日 亜細亜協会「会余録」第五集を〔再度〕購入。

13～15日 『初拓好太王碑』を考究。

20日 好太王碑写真版5種を，新旧2種に分類。

11月11日 『初拓好太王碑』写真31枚を撮影（～12月）。

23日 日本橋白木屋古書展，文行堂出陳の縮印『朝鮮総督府蔵拓本』を取得。

昭和13年（1938）45歳

5月 8日 『楊氏雙鈎好太王碑』と，大森松四郎輯『永樂太王古碑』を購入す。

7月12日 楊守敬『寰宇貞石図』，以後しばしば見る。

9月 6日 『初拓好太王碑』の盛箱出来上る。

11月12日 『初拓好太王碑』を中心に，楊氏両本（寰宇貞石図本と雙鈎本）と楊氏蔵本について考究。

12月14日 池内宏論文「広開土王碑発見の由来と其の現状」を読む。

昭和14年（1939）46歳

1月23日 青江釈文と諸釈文との対照表を作る。

2月24日 香取秀真と同道し，酒匂景信本を見る。香取は酒匂本を「雙鈎廓填」本と断言す。

---

---

3月22日 池内教授の「満州諸族史講義ノート」2冊を合綴す。

4月より 私立向島高等女学校勤務（歴史と英語の講師（～昭和18年、また昭和19年12月までとも））。

昭和15年（1940）47歳

1月4日 好太王碑研究、第一章の執筆開始。

昭和16年（1941）48歳

10月27日 妻・秀，大岡山114番地で死亡。

昭和17年（1942）49歳

・このころ江田文雅堂（江田勇二），北京か奉天にて「水谷原石整拓本」を購入するという。

昭和18年（1943）50歳

3月29日 本郷弓町の江田文雅堂にて，はじめて「水谷原石整拓本」をみる。

昭和19年（1944）51歳

8月24日以後 「水谷旧蔵精拓本」の疎開を考える。

昭和20年（1945）52歳

4月30日 「一月以上カ、ッテ，漸ク好太王碑字ノ研究ヲ卒業シタ」。

5月15日 「『水谷拓本』は仮面絶無の真碑文」の結論を得，これを購得す。「正ニ最初拓本間違無シ。鬼神呵護ヲ得タルモノダ」「生命ヲ延バシテ研究ヲ完成シタイ」と記す。

16日 早速，「古拓（水谷原石整拓本）ト精拓（水谷旧蔵精拓本）ト並看，大抵同ジ」という。

8月以降 『初拓好太王碑』（「水谷旧蔵精拓本」）を手放す。

昭和21年（1946）53歳

7月17日 ここ三四日，「首」「稗」釈文のことを思う，以下連日の如く好太王碑文研究に打ち込む。

昭和22年（1947）54歳

・好太王碑文研究に打ち込む。

昭和23年（1948）55歳

・好太王碑文研究に打ち込む。

5月29日 好太王碑博物館本を特別観覧す。

7月3日 「好太王碑文研究」序説・結論を書き終える。

8月1日 「好太王碑文研究」序説・第一章・結論を浄書。

9月17日 「好太王碑文研究」に目録を付し終える。

10月16日 「釈文」浄書を完了す（「好太王碑文研究」第二章の完成）。

11月5日 文求堂にて「傳鄭孝胥下命拓本」を見る。

昭和24年（1949）56歳

11月23日 「好太王碑研究」第三章を写し終える（いわば第一次原稿が完成）。

12月9日 東大駒井和愛助教授に「好太王碑研究」を呈す。

23日 草稿「好太王碑考」（第一～三章）の執筆を始める（～翌年1月了）。

昭和25年（1950）57歳

---

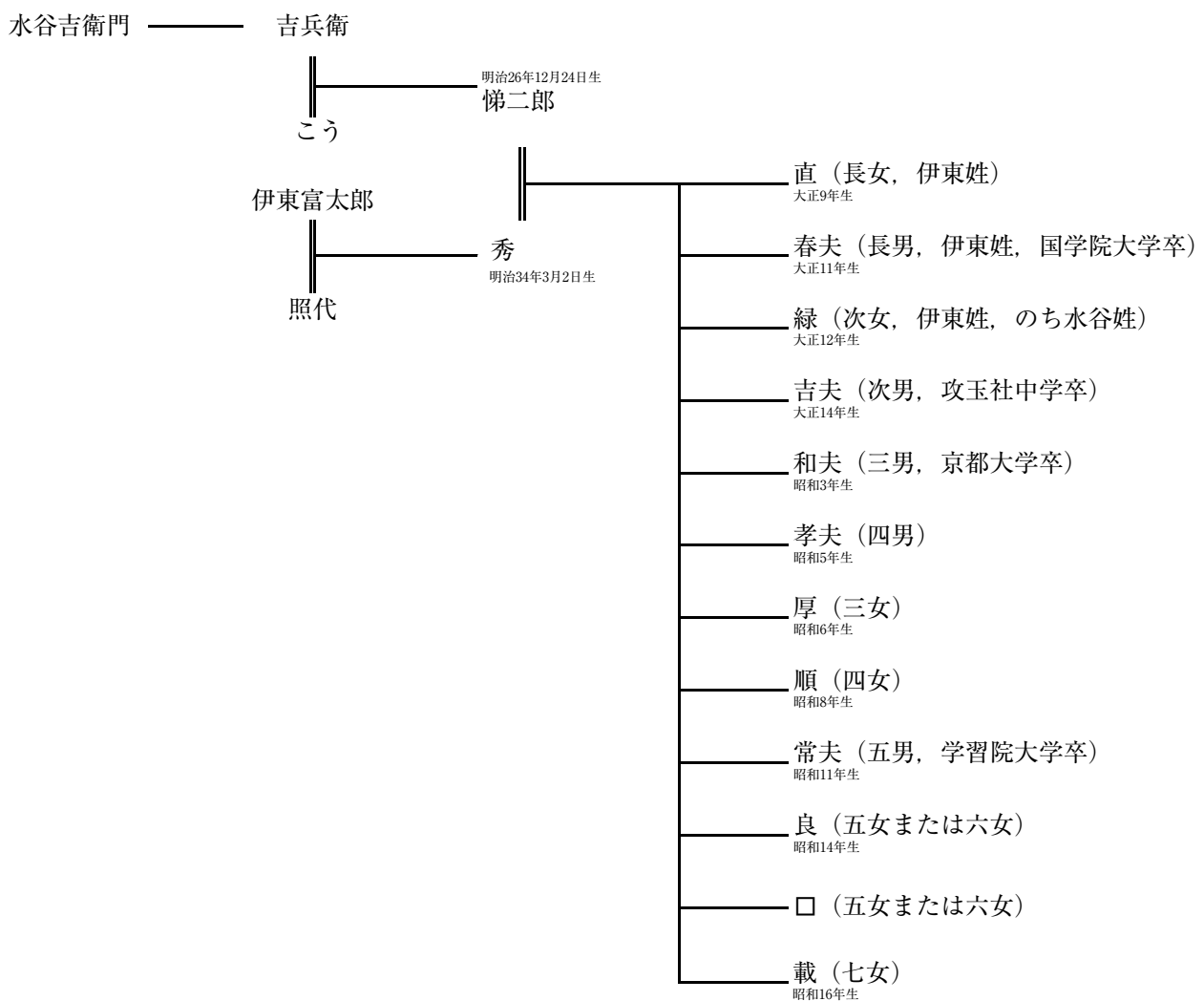


- 
- 11月12日 東洋文庫蔵の前間恭作氏寄贈好太王碑を見る。
- 昭和26年(1951) 58歳
- 7月 池内宏著『通溝』上巻を見る。
- 昭和27年(1952) 59歳
- 3月10日 草稿「好太王碑字の変相」の執筆を完了す。
- 昭和29年(1954) 61歳
- 1月6日 「好太王碑字の変相」補完す。
- 14日 好太王碑研究発表の件、江田勇二が西川寧に紹介するという。これより「碑文研究 刪改」始まる。
- 4月21日 写真を撮影す(全身立像, 東京国立博物館前にて, 子息・常夫氏撮影)。
- 昭和33年(1958) 65歳
- 4月7日 「好太王碑研究(墨本概説)」の冒頭を改訂す。
- 12月12日 「好太王碑研究(改続稿定稿)」を書き終る。
- 昭和34年(1959) 66歳
- 3月14日 西川寧, 『書品』に論文「好太王碑考」の掲載を慫慂す。
- 30日 伏見冲敬と「好太王碑考」掲載につき打合せ。
- 6月8日 『書品』掲載用の「履歴」を送る。
- 3日 写真を撮影す(上半身, 『書品』百号所載, 伏見冲敬の撮影)。
- 25日 これ以前, 『書品』附編として, 論文「好太王碑字の変相」の掲載が決まる。
- 7月10日 『書品』百号(特集「好太王碑考」)(同誌は同年6月1日付けの発行)。
- 14日 伏見, 論文「粘蟬碑考」の寄稿を要請す。
- 昭和36年(1961) 68歳
- 8月3日 原稿「□紋鏡紋様に就いて」を書き改む。
- 昭和40年(1965) 72歳
- 11月5・6日 「金子鷗亭氏本」と「家蔵本」とを対校す。「又始メルカ」と記す。
- 昭和50年(1975) 82歳
- 9月12日 論文単行本化の件で, 末松保和に返事する。同文に「第一線の日本の学者諸氏が全く李(進熙)氏に押され放し意気全く挙がらず, 私老人何とも不思議」等と記す(「7. 末松保和氏関係記事」書簡1)。
- 25日 水谷の末松宛て手紙(書簡2)。
- 10月26日 水谷の末松宛て手紙(書簡3)。
- 昭和51年(1976) 83歳
- 1月2日 水谷の末松宛て年賀はがき(書簡4)。
- 昭和52年(1977) 84歳
- 1月29日 水谷の末松宛てはがき(書簡5)。
- 9月1日 水谷悌二郎著・末松保和解説『好太王碑考』(付録「水谷拓本」縮尺写真, 開明書院, 142頁)発行。
-

昭和 59 年 (1984)

3月 9日 老衰にて死去（満90歳2ヶ月余）。

## 2. 水谷家系図略



### 3. 日記目録

分類	番号	和暦・西暦年（日記記述年月日）	タイトル	大きさ（cm）	冊数	注記
日記帳	1	大正7年・1918年 （大正7年7月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.0×横6.0	1冊	「名古屋銀行」手帳、名古屋市西区伝馬町、頭取滝定助、創立明治15年10月、資本金7百万円
	2	大正8年・1919年 （大正8年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦14.0×横7.5	1冊	「朝鮮銀行」手帳（資本金4千万円、朝鮮京城府南大門通三丁目、電話代表番号六〇一〇番、振替貯金口座 京城三三番、総裁 美濃部俊吉、支店・内地東京、大阪、神戸……）
	3	大正9年・1920年 （大正9年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦15.0×横10.5	1冊	「大正九年当用日記」積善館発行
	4	大正10～11年・1921～22年 （大正10年1月1日～11年2月26日）	「大正十年当用日記帳」	縦14.0×横9.0	1冊	「大正十年当用日記」積善館発行 11年3～12月は現存する手帳群になく、現状では欠落している
	5	大正12年・1923年 （大正12年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦14.0×横7.3	1冊	「朝鮮銀行」手帳（資本金8千万円、総裁 美濃部俊吉、支店・内地 東京、大阪、神戸、下関ら）
	6	大正13年・1924年 （大正13年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.0×横7.5	1冊	「三井銀行」手帳（資本金6千万円、取締役社長 三井源右衛門）
	7	大正14年・1925年 （大正14年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.0×横6.0	1冊	「日本勧業銀行」手帳（東京市麹町区内山下町一丁目） 手帳に記されていないが、今年より以後、毎年「日本勧業銀行」手帳となり、各年末に岳父より贈られる。
	8	大正15年・1926年 （大正15年1月1日～12月15日／昭和1年12月25日～31日）	「日記帳」	縦12.0×横6.0	1冊	
	9	昭和2年・1927年 （昭和2年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.0×横7.5	1冊	
	10	昭和3年・1928年 （昭和3年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.5×横7.5	1冊	
	11	昭和4年・1929年 （昭和4年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.5×横7.3	1冊	
	12	昭和5年・1930年 （昭和5年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.5×横7.3	1冊	
	13	昭和6年・1931年 （昭和6年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.0×横6.4	1冊	
	14	昭和7年・1932年 （昭和7年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.0×横6.0	1冊	「香取カラ勧業銀行ノ日記帳ヲ頂戴スル」
	15	昭和8年・1933年 （昭和8年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.0×横6.0	1冊	
	16	昭和9年・1934年 （昭和9年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.0×横6.0	1冊	
	17	昭和10年・1935年 （昭和10年1月1日～12月31日）	「日記帳」	縦12.0×横6.0	1冊	
	18	昭和11年・1936年 （昭和11年1月1日～12月31日＋巻末その他）	「日記帳」	縦13.0×横7.0	1冊	
	19	昭和12年・1937年 （昭和12年1月1日～昭和13年1月31日＋巻末）	「日記帳」	縦13.0×横7.0	1冊	
	20	昭和13～14年・1938～39年 （昭和13年1月1日～14年1月31日、巻末抄録）	「日記帳」	縦12.8×横6.5	1冊	

分類	番号	和暦・西暦年（日記記述年月日）	タイトル	大きさ（cm）	冊数	注記
日記帳	21	昭和14年・1939年	「日記帳」		1冊	
	22	昭和15年・1940年 （昭和15年1月～16年1月＋無年月 日次記事）	「日記帳」	縦13.3×横7.0	1冊	
	23	昭和16年・1941年 （～昭和16年11月15日）	「日記帳」	縦12.5×横7.0	1冊	表紙裏も利用 昭和16年正月～同年11月15日、末尾に 無年月日次記事あり
	24	昭和16～17年・1941～42年 （昭和16年11月16日～昭和17年11 月30日）	「日記帳」	縦11.5×横7.0	1冊	
	25	昭和17～18年・1942～43年 （昭和17年12月1日～昭和18年11月 28日）	「日記帳」	縦11.5×横6.0	1冊	
	26	昭和18～20年・1943～45年 （昭和18年11月29日～20年1月12日）	「日記帳」	縦15.0×横8.0	1冊	
	27	昭和20～22年・1945～47年 （昭和20年4月13日～22年1月31日）	「日記帳」	縦14.0×横7.5	1冊	「THE BANK OF CHOSEN（朝鮮銀行）」 （大正9年版） 手帳用紙の徹底利用のため、2年余りの日 誌に転用し、全冊は通頁・逆頁を通じて5 部から成る
	28	昭和22～25年（附26年）・1947～50 年（附51年） （昭和22年2月2日～25年1月31日）	「日記帳」	縦15.0×横8.5	1冊	粗末な無名手帳1冊、24枚（上部に青罫 線一本引いてあるだけ（＋小紙片1枚））
		昭和26～28年度				欠
	29	昭和29～30年・1954～55年 （昭和29年1月2日～30年12月25日 ＋その他）	「日記帳」		1冊	
	30	昭和31年・1956年 （昭和31年1月1日～32年1月15日 ＋その他）	「日記帳」		1冊	
	31	昭和32年・1957年 （昭和32年1月1日～33年1月25日 ＋その他）	「日記帳」		1冊	
	32	昭和33年・1958年	「日記帳」		1冊	
	33	昭和34年・1959年 （昭和34年1月1日～35年1月20日 ＋その他）	「日記帳」	縦10.7×横7.0	1冊	
	34	昭和35年・1960年 （昭和35年1月1日～36年1月7日＋ その他）	「日記帳」		1冊	
	35	昭和36年・1961年 （昭和36年1月1日～10月19日）	「日記帳」		1冊	
	36	昭和36年～37年・1961～62年 （昭和36年10月20日～37年6月10日）	「日記帳」		1冊	
		昭和37～38年度				欠
	37	昭和39～40年・1964～65年 （昭和39年1月～40年3月）	「日記帳」	縦11.5×横6.3	1冊	
	38	昭和40年・1965年	「日記帳」	縦11.5×横6.0	1冊	
	39	昭和41年・1966年 （昭和41年1月1日～42年1月21日）	「日記帳」	縦11.4×横7.0	1冊	
		昭和42～43年度				欠

分類	番号	和暦・西暦年（日記記述年月日）	タイトル	大きさ（cm）	冊数	注記
日記帳	40	昭和44年・1969年 （昭和44年1月1日～45年1月14日）	「日記帳」	縦12.4×横7.0	1冊	表紙なし
看聞抄録	41	昭和13年 （追記：昭和23年5月28日／同23年 8月5日／同25年11月12日／同26 年5月14日）	「看聞抄録」 第4冊		1冊	
	42	昭和45～46年・1970～71年	無題	縦11.0×横7.0	1冊	昭和46年度「山川歴史手帳」使用 もっぱら日記ではなくメモ

#### 4. 日記抄録（日記帳）

〔凡例〕【】番号は「3. 日記目録」の番号に対応する。句読点については武田が適宜これを挿入し、また清音の一部は濁音に改めた。□は釈読不能の字。…は省略部分。〔 〕は武田が補った部分を示す。書名・史料名には適宜『』を補った。文末注は武田による。

##### 【1】大正7年・1918年<sup>(1)</sup>

9月24日 火 …高橋健自氏「上古ノ服装」、岡部<sup>(精)</sup>□一氏「奈良時代ノ風俗」、黑板博士「平安時代ノ文化史概観」ヲ読ム。…黑板博士ノ「国史ノ研究」ガ欲シクナッタ。<sup>(2)</sup>

##### 【2】大正8年・1919年<sup>(3)</sup>

※日記中にみえる書名

正月 『三太郎ノ日記』、『万葉集選釈』、『和歌百話』／三月 与謝野明子<sup>(晶)</sup>『心頭雑草』、柳宗悦『宗教ト其心理』、『□□要覧』、『□□要覧』／四月 米田(庄太郎)『ばん近社会思想ノ研究』、窪田(空穂)『最新一万歌集』、田山花袋<sup>(撰)</sup>『新選名勝地誌』、有島(武郎)<sup>(叛)</sup>『反逆者』、『華山全集』／六月 『或女』／八月 『水滸伝物語』、『印度仏教思想史』／九月 大町桂月『八犬伝物語』、久米(邦武)『聖徳太子実録』、〔高桑文子〕『女の旅』、永井〔潜〕『生命論』、金子大栄『仏教概論』／十月 倉田百三『出家とその弟子』、『エーレルレーヌ詩集』、与謝野〔晶子〕『明星抄』、『趣味の写真術』、大谷光瑞『西及南に於ける日本人の変展策』／十二月 『実用写真術』等

##### 【3】大正9年・1920年<sup>(4)</sup>

1月2日 金 〔斑鳩見物〕…法隆寺を見る。南大門内ノ中門を眺め、五重塔、金堂の位置。金堂では、□□寿仏ノ存外小さいこと、存外面相の穏和なこと。…橘夫人念持仏ノ優美なる、可愛い、懐かしい、美しい□□。其色ノ甚光沢。東院夢殿、中宮寺ノ□□に余り異った印象もない。法輪寺・法起寺を経、郡山ニ歩いて…

5日 月 〔奈良見物〕午前八時四十分天王寺駅発、奈良午前九時半。…三月堂を見、手向山神社、春日神社、若宮を拝し、春日山に登りかけて止めて、地獄谷ニ志す。…

2月29日 日 〔河内の歓心寺・金剛寺〕

3月28日 日 〔再び奈良東大寺〕



4月1日 木 書物ヲ読メヌ。デモ邪魔サレナケレバ、例ヘバ「極楽莊嚴」ノ様ナ本モ一気ニ読メル。静カナラバ「大無量寿経疏」モ読メル、読ミタイ。「希蠟紀行」ハ買ッテカラ、二週間位ニナラウカ、電車ノ中ノ往キ還リニ読ンデ、…

17日 土 〔法隆寺壁画を見る〕…十二時前、法隆寺駅着、法隆寺ニ詣ル。先ヅ宝蔵拝観。寺伝聖徳太子作九面觀世音ノ小品ノ一寸美シイノト、夢違觀音（金銅立像三尺弱）ノ傑出シタ美シサ、顔モ当然ト天下ノ美シサト、ニツラ覚エテ居ル。ソレカラ金堂ニ行ッテ、今日出掛タ主目的タル壁画ヲ見ル。東南北ノ三面ニ□□アルガ、破損烈シカラザレバ、其画トシテノ美ガ余リ感ゼラヌモノバカリダ。唯、著名ナ西壁阿弥陀浄土ハ実ニ美シイ。割合善ク残ッテ居ルカラバカリデナク、絵トシテモ傑出シテ居ル。殊ニ本尊弥陀ト右脇侍觀音菩薩トハ、左ノ脇侍ヨリモ又美シイ。褐色ニ褐セタ如来ノ顔容、朱色ノ衣、美シイ。脇侍ノ顔ト姿勢、立派ナコトダ。南大門南西田圃路カラ□□シテ、午後四時法隆寺着。五時過帰宅。

30日 金 神經衰弱<sup>(5)</sup>

10月31日 日 〔また法隆寺・奈良へ〕

11月7日 日 〔京都へ、大徳寺・鹿苑寺等〕

※日記中にみえる書名

幸田露半<sup>(伴)</sup>『掌中山水』、『奈良時代史論』、『日本の彫刻』、『大日本美術史』、和辻哲郎『偶像再興』、大谷光瑞『極楽莊嚴』、『大経義疏』〔大谷光瑞『大無量寿経義』か〕、厨川白村『象牙の塔を出て』、〔濱田青陵〕『希蠟紀行』、木村庄八<sup>(莊)</sup>『後□印□□』<sup>(期)</sup>、石井〔柏亭〕<sup>(象派)</sup>『我が水彩』、山本鼎『袖雨』、□村□一夫<sup>(谷)</sup>『西洋画法』、『油絵のスケッチ』、塩屋温『唐詩三百首』、『泰西ノ絵画、及彫刻』、沢木梢『美術の都』、Francis Jammes “La Vierge et les Sonnets” 丸善<sup>(有島生馬)</sup>、生島訳『回想のセザンヌ』、“L'Oeuvre de Paul Claudel” その他・丸善、『西國寺めぐり』、有島武郎『惜しみなく愛は奪う』、『実用写真術』、『通俗写真』、『通俗三国史』、『論語古義』、『釈迦牟尼伝』、長与善郎『頼朝』、豊島与志郎<sup>(雄)</sup>〔訳〕『ジャン・クリストフ』、小説『無』、森鷗外訳『即興詩人』、坂口昂『世界ニ於ケル希蠟文明の潮流』、和辻哲郎『日本古代文化』、『フィルム写真術』、大谷光演『法悦ノ一境』、□<sup>(晩)</sup>鳥敏『更正の前後』等

#### 【4】大正10～11年・1921～22年<sup>(6)</sup>

大正10年・1921年<sup>(7)</sup>

1月16日 日 〔奈良、竹内街道〕

2月20日 日 〔奈良、興福寺・春日社・新薬師寺〕〔斑鳩、法隆寺・中宮寺〕

4月13日 水 銀行ヲ出ルト、全然写真ノコトニ没頭シテ居ル。此ノ様式デ余ノ一生ガ終ルモノトシタラト考ヘルト、変ナ心持ニナツタ。<sup>(8)</sup>

5月1日 日 〔奈良、博物館・般若寺〕

15日 日 〔京都、加茂川・銀閣寺・南禅寺・知恩院〕

9月25日 日 朝十時頃カラ、手製枠張りノ画布ニ向ッテ、林檎三箇トバナ、二個ヲ画キ始メル。<sup>(9)</sup>

※日記中にみえる書名

『フィルム写真術』, 「中公」 正月号の小説, 木村〔小舟〕『日本国宝巡礼』, 「改造」 2 月号, 池山〔栄吉〕『意識歎異抄』, 〔木下杢太郎〕『地下一尺集』, 松本文三郎『印度の仏教美術』, 『劉生画集及芸術観』, 暁鳥敏『親鸞聖人論』, 〔松本文三郎〕『支那仏教遺物』, 「太陽」 三月号, 『中級写真術』『華嚴聖歌』, “Paul Cézanne” 丸善, 『自由な油絵の学び方』, 島崎藤村『千曲川のスケッチ』, 伊藤白蓮〔柳原〕『幻の華』・『几帳のかけ』(詩集), 訳書『絵画写真の研究』, ヴァン・ゴッホ『セザンヌの回想』, 『通信□□解説』, 『実用写真』, 『若翁書杜詩五律』, 「写真芸術」 12 月号, 南実『写真芸術の研究』, 『華山』, 『万葉短歌全集』等

## [5] 大正 12 年・1923 年<sup>(10)</sup>

1 月 2 日 火 旧臘廿四日ニ始メタ油画静物ヲ追究。<sup>(11)</sup>…

※日記中にみえる書名

森芳太郎『最新実用写真術講話』中巻, 『華山画語』<sup>〔講〕</sup>, 与謝野晶子『源氏物語』, 国訳漢文体成<sup>〔大〕</sup>『晉唐小説篇』, 『ジャン・クリストフ』第 4 巻, 〔海芸術巡礼紀行〕<sup>〔地中〕</sup>, 『支那陶磁器源流図考』<sup>〔衍〕</sup>, 国訳漢文大成『紅樓夢』, 『画人行旅』, 国訳漢文大成『唐宋八家文』下巻, 『世界に於ける希臘文明の源流』等

## [6] 大正 13 年・1924 年<sup>(12)</sup>

9 月 4 日 木 午後一時半、銀行へ行ッタ。支配人ニ聞クト、未ダ解職ノ辞令ガ来ズト云フ。思ヒ懸ケヌ六日分ノ給料ヲ貰ッテ来タ。<sup>(13)</sup>

14 日 日 榎原地方ノ故瓦採集旅行。

22 日 月 午後四時、天王寺駅着。□車デ香取母上を同伴、御来□。引上準備ニ御手伝、否指揮ノ為。

27 日 土 午後二時、□□□銀行へ行ク。支配人ヨリ依願退職ノ辞令ト、退職□□金千円トラ貰ッタ。

10 月 4 日 土 朝、香取ノ御手紙着。…余ガ「文学上ノ研究」ヲスルナラバ、父上内諾ノ旨内報スルトアル。<sup>(14)</sup>

14 日 マル東運送店デ発□ヲ頼ム。<sup>(15)</sup>

※日記中にみえる書名

Deusche Franzosische 丸善, 『仏和小辞典』, Lettres de Van Gogh 丸善, 頼山陽『新居帖』, 中村不折ら『支那絵画史』, 滝精一『文人画概論』, 『国訳漢宮□□』<sup>〔秋〕</sup>, 国訳漢文大成『紅樓夢』中巻, 『椿山画譜』, 藤原□也<sup>〔懸 静〕</sup>『浮世絵』, 国訳漢文大成『楚辞』, 露伴『幽情記』, 藤原作太郎<sup>〔岡〕</sup>『近世絵画史』, 梅沢〔精一〕『日本南画史』, 『水滸伝』上巻, 国訳漢文大成『長生殿・燕子箋』, 胡的<sup>〔適〕</sup>『中国哲学史大綱』上巻, 国訳漢文体系<sup>〔大成〕</sup>『老子・列子・莊子』, 今関天彭<sup>〔翠〕</sup>『支那戯曲集』, 井上準『日華語学辞林』, 『随園詩話』, 『新史奇観』, 『西廂歌劇』, 『芥子園画伝』, 『仏教聖典総論』, 〔木村泰賢〕『印度<sup>〔哲学宗教史〕</sup>□□哲学史』, 〔木村泰賢〕『原始仏教思想論』, Llie Fame Comstrucrury 丸善, 『工芸美術集英』, 『水滸伝』中巻等

## 【7】大正14年・1925年

3月23日<sup>(16)</sup> 土 …

9月17日 木 昨日、岳大人八神ヲ取ラシタ拓本ノ鐘銘ヲ、康熙字典ヲ引キ始メルガ、午後四時頃ニ、漸ク先一通り意味通ズルヲ得タ。然シ、刻字（立派ナ拓ガ得ラレタ程ノ雄渾ナ辞句ニ相応ジタ刻字ダガ）所々、殊ニ肝心ノ鑄造ノ由来ノ部、竣工ノ部ガ摩滅シテ居テ解セラレヌ。夜、□□□ヲ浄書シテ了ル。字句ハ□書□□□等ノ成語カラ来テ居テ、□□□ガ字典ニ凡テ出テ居ルノデ解ル。

※日記中にみえる書名

洋書2冊・丸善、『水滸伝』中巻、『八犬伝』、国訳漢文大成『紅樓夢』下巻、洋書1冊、森鷗外訳『ファウスト』、末広厳太郎<sup>(弘)</sup>『農村法律問題』、新村出『南蛮更紗』、『華山』、『華山画譜』、『大雅<sup>(登)</sup>画譜』、『石田墨<sup>(画伝)</sup>』、『芥子園<sup>(画伝)</sup>集』、Archipenko、藤村『近世絵画史』、『近世名家詩選』、『続和鑑聚英』、『週刊朝日』、『カメラ』、『写真芸術』、『本朝画人伝』、『先哲<sup>(ヤ)</sup>伝』、『サンデー毎日』、神原泰『未来派研究』、『新ロシア美術大観』、『歴史と地理』8月号（銅鐸の論文）、『支那陶磁源流図考』、『釣り方図解』、『浄土真宗聖典』、『上田敏詩集』、『極東莊嚴』、既刊の『歴史と地理』、『古代染色図録』、『工芸美術聚英』、『歴史地理』、『南蛮廣記』、梅原真隆『歎異抄の意義と解説』、中沢〔見明〕『史上の親鸞』、辻善之助『人物論叢』、津田左右吉『神代史の研究』、芥川龍之介『支那遊紀』、『奈良時代史論』、『仏教芸術』（『天平芸術の研究』、源豊宗『天平彫刻の概観』、浜田青陵『天平彫刻と新羅彫刻』、白鳥庫吉『唐芸術と天平芸術』）等

※帳末の書名リスト<sup>(17)</sup>

『雲』山村暮鳥詩集、アイデア書房／『芭蕉七部集定本』勝峰晉風著、岩波書店／プラトン『プロタゴラス』菊地〔慧一郎〕／『冬の砂』幸田露伴／『<sup>(戦)</sup>ばん近の思想』ヘンリ〔アンリ・ポアンカレ〕・岡谷〔辰治〕訳、叢文閣／『民法ノ基本問題』牧野〔英一〕、有ひ閣／『定本源氏物語新釈<sup>(斐)</sup>』全三冊、金子元臣著／『典籍叢談』、新村出、岡書院／『国文学研究叢書』／『近世日本世相史』斎藤隆三著、博文館／『窯辺雑録』富本憲吉著、文化生活研究會／『親鸞上人筆跡<sup>(之)</sup>の研究』辻善之助、金港堂／『日本仏教史』金港堂／『漢文詳解』高田／『支那古代史』フレデリック・ヒルト著、西山栄久補訳、三省堂

## 【8】大正15年・1926年

2月12日 金 朝日新聞、箭内互博士逝去、十日、享年五十二。

12月25日 土 今午前一時何分カニ、大正天皇崩御。新帝踐祚セラレテ、昭和ト改メラレタリシト、郵便局ノ報告。

※日記中に見える書名

西村〔真次〕『国民の日本史 大和時代』、『意識歎異抄』、『近世名家□集』、『歴史と地理』、『近世絵画史』、『文人画概論』、『西洋史』、『支那小説戯曲史概説』、久松潜一『万葉集の新研究』、富岡謙蔵『古鏡の研究』、高橋健自『考古学』、富岡『桃華盦古鏡図録』、『寧東』法隆寺特集号、『書苑』、箭内〔互〕『東洋読史地図』、『親鸞聖人の信仰』、『解題叢書』、『鑑鏡の研究』、『有史以前の日本』、『補正朝陽字鑑』、小金井良精『人類学研究』、『西洋美術史（古代家具篇）』、『富岡鐵斎』、『博古図総説』、『みづえ』、『アトリエ』、『中央美術』、文寿承『印史』、西鶴『好色五人女』、『日

本古刻書史』、『<sup>〔増〕</sup>贈訂國書解題』、『<sup>〔成〕</sup>九咸宮醴泉銘』、『王羲之』墨本、『古事記日本書紀の研究』、『新<sup>〔撰類〕</sup>選□林抄』、津田『神代史の研究』、『水滸伝』中、『国際写生情報』、『国訳唐詩選』、『写真芸術』、『静物画の研究』、『石濤』、『芸術写真の研究』、『朝日カメラ』、『見真大師』、河東碧梧桐『画人蕪村』、岸田劉生『初期肉筆浮世絵』、『國書解説』、『宋元名家詞』、『支那文学概論』、『周易講義』、『易学講話』、『佐味田〔及〕新山古墳研究』、『仏教芸術』、梅原末治『近江國高島郡水尾村の古墳』、『考古学雑誌』、高橋建自『銅鉾銅劔の研究』、『考古学概説』等

※帳末の書名リスト

『東洋史年表』／『親鸞聖人筆跡の研究』辻善之助／『日本仏教史』辻〔善之助〕／『支那古代史』ヒルト／『金石索』／『漢籍解題』桂胡邨／『寧楽刊経史』／『支那人名辞典』／『国史大辞典』六冊／『日本随筆索引』太田為之助、岩波書店／『官職要解』和田英松、明治書院／『芸文』／『東洋学報』／『史学雑誌』／『東亞之光』／『考古学雑誌』／『近世日本小説史』鈴木敏也、内外出版／『使徒』Renain、広瀬訳／『王道天下之研究』田崎仁義、内外出版 他多数

[9] 昭和2年・1927年<sup>(18)</sup>

1月6日 木 …隅田八幡宮…<sup>(19)</sup>

4月3日 日<sup>(20)</sup>

11日 月 朝、東大文学部入学許可書着。<sup>(21)</sup>

13日 水 午前七時前東京駅中央ニテ信濃町、七時半下宿ニ入ル、朝飯。九時過ニテ大学ニ至ル、学生便覧ヲ貰ヒ、講義時間ヲ見テ、十一時頃カラ大体面接シ、正門北ノ店ニテ伊藤東涯跋西京雜記一冊一・七〇、〔和〕漢洋年契一冊一・三〇買フ。

14日 木 登学十時～十二時、服部〔宇之吉〕教授ノ周礼ノ話ヲ聴ク。午カラ又神田ヘ歩イテ帰ル。…

16日 土 八時～十時ノ宇野〔哲人〕教授周易講義、十時～十二時今井〔登志喜〕助教授史学概論講義ヲ聴イテ見タ。…

19日 火 …講義二ツ共スッカリスカラ食ツテ、読書ノ気モナクナツテ、一時半、歩イテ神田小川町ノ古書店ヲ見、…

20日 水 七時半登学（時計ガ止テ居タノデ誤ツテ）、然モ藤田〔豊八〕・池内〔宏〕兩教授共<sup>(22)</sup>ペケ。

※日記に記された時間割<sup>(23)</sup>

	八～十、九～十	十～十二	一～三
月	<del>申世国語</del> 45	<del>紅樓夢</del> 45	
火		<del>唐宋經濟史</del> 46	唐代文化及其波及 44
水	漢魏六朝ノ西域史 46	満鮮上代史 45	
木		周礼 39	
金	<del>漢文講読</del> 40		
	希臘考古学		
土	周易 40	史学概論 46	

- 21日 木 朝九時、文求堂デ十三経註疏八帙ヲ買。<sup>(24)</sup>
- 28日 木 …今週ニナッテカラ講義ヲ聴タノハ竹田氏丈一時間、図書館デハ陽気デ居睡スルモ宜□□モノダ。
- 30日 土<sup>(25)</sup>
- 5月1日 日<sup>(26)</sup>
- 18日 水 …藤田・池内両教授講義ヲ始テ聴ク、…<sup>(27)</sup>
- 31日 火 …午後一時～三時、始メテ原田〔淑人〕助教授「唐代文化及其波及」講義開始、聴ク。
- 6月3日 金 八時半～十時、原田助教授希臘考古学（瓶器）最初ノ講義。
- 4日 土 宇野氏、今井氏講義。一時半過カラ、人類学教室デ原田助教授ノ「唐代文化及其波及」ノ講義ヲ聴ク。
- 15日 水 藤田教授「漢魏六朝ノ西域史」ハ見限ッテ、出タコトニスル。池内教授聴講。
- 22日 水 十時カラ、池内教授聴講。
- 7月31日 日 …「悌二郎印」…
- 8月3日 水 「悌二郎印」此間ノヲ磨消シテ、新ニ刻ス。今夜ノ所デハ稍ニ意ニ適フト思ッテ居タガ、矢張り従来ノ傾向刀法ヲ脱スルヲ得ズ、今少シ自由デアリタイ。<sup>(28)</sup>
- 10月5日 水 午前十時～十二時、池内宏教授ヲ聴ク。
- 12日 水 午前十時、池内教授休ミデ、…
- 26日 水 午前十時～十一時、池内教授聴講。
- 11月2日 水 午前十時～十二時ノ池内教授休講。
- 3日 木 …午前…洗足池ヲ廻リ、午後大岡山ヘ秀ト子供ト行ッテ、又洗足池ヲ運動、…
- 16日 水 池内教授聴講。
- 20日 日 （東京都荏原郡）碑衾町（大字）衾114宅ヘ移転。
- 30日 水 池内教授聴講。
- 12月1日 木 …小川町松文堂デ長ク見タ後、葉昌熾「語石」四・五〇…ヲ買ッテ帰ル。<sup>(29)</sup>
- 2日 金 …新橋きんつば屋志るこ一〇、遂ニ晩翠堂ニ行キ「高麗好太王碑」四ハヲ買ッテ帰ッタ。<sup>(30)</sup>
- 14日 水 池内宏教授聴講。先生、新羅本紀ノ錯簡ヲ切り貼リシテ、支那史料ト突キ合ワセテ、前人未発ノ史ヲ闡明シテ大得意デアル、結構ダケレド。
- ※日記中に見える書名  
『閻立本帝王篇』、『十三経註疏』、『漢式鏡』、『翁方綱兩漢金石記』、『薛氏鐘鼎款識』、『欽定四史』、『從古堂款識学』、

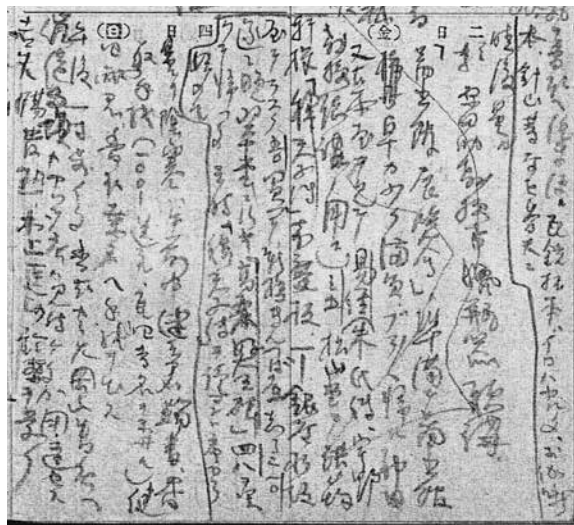


図2 上海有正書局『石印好太王碑』入手  
(碑文との出会い) 昭和2年12月2日



『名原』、『<sup>( 郷 )</sup>とう石如印存』、『鐵雲藏龜』、『小野賢一郎』、『陶器を試る人へ』、『日本陶芸史』、『趣味の支那叢談』、『銅鐸の研究』、『繡像女才子書』、『野口古鏡拓本』、『<sup>( 賢か )</sup>多雲城碑拓本』、『古都印堂』、『奥の細道』、『語石』、『弘安先生遺墨帳』、『高麗好太王碑』、『論語』、『林泰輔』、『支那上代史〔之〕研究』、『陸奥碑文集』、『支那天文学』、『<sup>( 隣 )</sup>陸心源』、『千甍亭古磚図釈』／『桑原<sup>( 隣 )</sup>しつ蔵□□』等

## 【10】昭和3年・1928年

1月18 水 午前十時～十一時半、池内教授聴講。

2月1 水 朝起キテ、池内教授聴講を休ンデ…

6 月 …午後二時半、語石読過<sup>(31)</sup>…

8 水 池内教授聴講。直ニ帰ル。

15 水 池内教授聴講ヲ止メル。<sup>(32)</sup>

30 金 午前中、拓本ノ法ヲ祖母様ニ聞ク。前ニ聞キ又タ見タ祖父様ノ方法トハ大分異ル。

4月10 火 早稲田大学出版『日本時代史』古代上（久米〔邦武〕博士著）ニアル高麗好太王碑  
釈文（今西龍博士）ヲ石印好太王碑ニ参シテ見ル、僅カ数行ノミ。<sup>(33)</sup>

11 水 午前□□好太王碑釈文、今西氏（日本時代史<sup>(34)</sup>

17 火 起、未ダ睡クテ、二階ニ坐ッテ、拓本ヲ見テ居テサヘ覺エズ睡眠ヲ禁ズルコトガ出来  
<sup>(35)</sup>ス。

25 水 前十時、大学へ出タガ、池内・黑板二教授イツレモ休ミ、ドチラカ聴カウト思ッタニ。<sup>(36)</sup>

7月28 土 暑気強くカラリトシテ居ル。午後〇時半、家ヲ出テ徒歩、奥沢・調布ヲ経テ沼部ニ  
至ル。鶉ノ木ノ先住民ノ遺跡ヲ見ント思ッタガ、之ニ至ル前ニ、沼部嶺ノ丘陵地ノ玉川斜面ニ、三  
ヶ所ノ新開ノ切通路ガアリ、其土ノ断面ニ土器ノ小破片ノ露レタルヲ見出シ、嶺ノ一ヶ所ニ [1]  
形ノ孔ノ切り開カレタル及川石ノ水平ニ一箇バカリ一列ニ耕土中ニ並ヘラレタルヲ見出シタ。尚調  
ヘタラ面白カラウガ、土器ハ二十五個ノ小破片、中一個ノミアイヌ式ラシク、他ハ赤色。其一ハ [2]  
ノ文アル面白イモノ。<sup>(37)</sup>四時半帰宅。

8月21 火 午後〇時半出発、徒歩、奥沢ヲ経テ東調布町・沼部・嶺ノ鶉ノ木ノ先住民遺跡ヲ見  
テ廻ル。意図ト異ル収穫ハナシ。歩イテ帰宅、五時半。

9月11 火 二ヵ月振り大学第一期授業料納付。

22 土 十時～十一時、琳浪閣。…朝鮮高麗宮址満月台出土瓦、慶州各地瓦・土器ノ拓本百三十  
枚許ニ・五〇ヲ買フ。<sup>(38)</sup>

25 火 午後一時半～四時半、本郷琳浪閣。昨日約束ノ朝鮮ノ古碑拓本、三・——。…昌寧碑ノ  
他唐代石刻三四枚アル。他ノ拓本新羅真興王北漢山碑、粘蟬碑。

26 水 粘蟬碑デ又一日。

10月10 水 北漢山碑・昌寧碑拓本ヲ見ル。

14 日 奥沢カラ嶺ヲ見テ、前ノ所デ土器片拾ヒ、更ニ池上□□慶大グラウンド前ノ処ヲ経テ、池  
上町久ヶ原ノ新開地□□デ又拾ヒ、更ニ西ノ方、何カノ学校ノ東方丘陵地一帯貝塚、殊ニ今掘リ  
残サレター小丘ハ、全部ガ貝塚カト思ハル。<sup>(39)</sup>

---

※日記に見える書名<sup>(40)</sup>

〔中尾万三〕『西域系支那古陶器ノ考察』、『山海経』、『漢石經攷異補正』、『爾雅疏義』、『鋼琴師室』、『周金文存』、『古鏡図録』、『日本時代史 古代上』、『石印好太王碑』、『陸心源』、『千甓亭埤録』、『鐘鼎款識原器拓片』、『策石月像帖』、『孔廟萬名六十史碑』、『瘞鶴銘』、『古鏡存』、王引之『経伝釈詞』、『説文通檢』、『殷墟書契考釈』、『博古図録』、『印譜』、『權衡度量実験攷』、『宋代法帖略志』、他多数。

【11】昭和4年・1929年

正月31日 日 …語石…

4月24日 水 十時～十二時、池内教授、満州諸族史開講。此講義何ノ辺カト思ッテ居タラ、上古漢民族の朝鮮關係ヲ明カニシタノヲ聴クコトニシタ。<sup>(41)</sup>

5月12日 日 (家で) 顔魯公、高句麗好太王碑帖ヲ見タリ。<sup>(42)</sup>

6月18日 火 降雨。朝、文求堂ニ寄ッテ、□□□□□□影印本ヲ買フ。

29日 土 水道橋南陽堂、楊愷吾雙鉤ノ高麗好太王碑銘六・——、及□□□□ヲ買フ。帰宅。四時半迄、好太王碑ハ佳イ。<sup>(43)</sup>

30日 日 楊氏雙鉤好太王碑、石印本ト比較スル。雙鉤ハ立派ナ隸書デアル。□□□□カ□ハシク□□□□□□□□知レヌガ、無味乾燥ナ石印本トハ実ニ大キナ□□アル。

7月1日 月 箒居。好太王碑雙鉤本、拓影本対校記、略々ヤッテ見ル。

8月6日 火 石川駅カラ池上、電車。東調布慈恵予科校庭ノ土配場デ土工の弁休中ニ土ヲ掘リ、一群ノ土器ヲ得タ。大□<sup>(44)</sup>ノ可ナリノ大破片。其他拾得多数。二時帰。

7日 水 午前十一時出テ、巻尺ヲ買フ。石川ヨリ電車、慈恵予科校庭遺跡ヲ見ル。恰モ土工ノ昼休ニ、二三所貝塚ホヂッタガ得ル□ナシ(文様□□□ノ小片ノミ)。唯北端ニ迫リ、人骨ノ露出ヲ見、大分掘リ返シタ。説明ヲ聞キ終テ、学校小使ニ注意シタガ、先生居ラズトテ其俣ニシタラ、土工がオッポリ出シタ。(二時ニ)慶大グラウンド前□□付近埋立地ヲ見…。

9日 金 六日ニ得タル鷄ノ木ノ土器、大□<sup>(45)</sup>ノ破片、聯結スルヲ得ント暫次ニ配合シテ見タ。惜シムラクハ大□ノ尚一部分ニ過ギズ。文様ノ一群ノ組成、尚定形得ルト思ハレヌ。<sup>(46)</sup>

9月7日 土 午後、楊愷吾雙鉤本高麗好太王碑ヲ見ル。

18日 水 十時カラ、池内教授聴講。

10月3日 水 十時～十二時、池内教授。

11月6日 水 池内教授休講。

27日 水 十時～十二時、池内教授。

12月11日 水 十時～十二時、池内教授。

12日 火<sup>(45)</sup>

※帳末の月日別図書購入表<sup>(46)</sup>

『皇清経解』、『殷文存』、『亀甲獣骨文字』、『支那歴史地理研究』、『読史記十表』、『石鼓文講』、『大無量寿義解』、『周金文存』、『中国文字学』、『春秋大事表』、『中村不折蔵吉金文石印本』、『張淑未所蔵金文文字』、『客心齋集古録』、『大雅堂画譜』、『流沙墜簡』、『広倉古石録』、『東州草堂金石跋』、『白川永久録』、『白川夜話』、『金石私志総目』、狩谷掖斎『本朝度量衡考』、藤〔原貞幹〕『好古日録』、

---

藤〔原貞幹〕『金石遺文』, 平田〔篤胤〕『皇国制度考』, 『三雲古器図考』, 〔青柳種信〕<sup>〔筑〕</sup>『築前国〔続〕風土記拾遺』, 『新編相模国風土記稿』, 『水経注』, 『山海経存』, 他多数

【12】昭和5年・1930年

- 1月12日 日 「日本時代史」第一冊古代史（久米〔邦武〕博士）ノ初ヲ少シバカリ読ミ懸ケタ。
- 14日 火 又一ノ真興王戊子巡狩碑、咸南カラ□□ニ立タトアル。面白い。
- 15日 水 池内教授休。
- 21日 火 「朝鮮」正月号デ咸南利原郡山中、新発見新羅真興王巡狩碑記事ノ抄出。…五時帰宅。北漢山碑等ヲ見ルガ読メズ。
- 22日 水 十時～十二時、池内教授。
- 29日 水 十時～十二時、池内教授。
- 2月5日 水 十時～十二時、池内教授。
- 12日 水 十時十二時、池内教授。
- 15日 土 考古学雑誌十二卷十号今西博士北漢山碑考アル、之ヲ買フ、○・二〇。
- 19日 水 十時～十二時、池内教授講義。
- 26日 水 十時～十二時、池内教授終講。
- 3月26日 土 午前十時半、上野美術協会と書篆刻文人画展覧会ヲ見ル、□□点中、中村不折氏蔵本邦紀年金石文拓本多数アリ、喜ビ見ル。
- 19日 土 美校デ中尾万三博士支那古陶窯ト其作品第一回講演ヲ聞ク、三時過ぎ終ル。<sup>〔47〕</sup>
- 6月4日 水 〔上田恭輔〕「支那陶器繪高麗」ヲ読ミ終フ。
- 7月22日 火 考古学研究室ニ至リ、原田〔淑人〕助教授・駒井〔和愛〕君カラ今春遊支ノ土産ヲ沢山見セテ貰ヘタ。中々面白い獲物。
- 23日 水 語石ヲ前ニ、好太王碑ヲ復見ル。<sup>〔48〕</sup>
- 8月4日 月 粘蟬碑拓本ヲ見テ考フルモ、□□新得処モナシ。
- 6日 水 粘蟬祀山神攷ヲ艸ス。二年越ノ考案、書キカケルト中々進マズ。
- 10月1日 水 国勢調査。
- 11月14日 金 四時。考古学研究室デ原田助教授ノ新発行楽浪ヲ見セテ貰フ。
- 23日 日 粘蟬祀山神攷第二稿ヲ艸ス。
- 30日 日 粘蟬碑攷ヲ原稿紙ニ写ス。<sup>〔49〕</sup>
- 12月20日 木 <sup>〔榎〕</sup>楊星吾好太王碑ヲ良カラウカト思ッテ、跋文ヲ写ス。此文甚ダ欠点ノ多イコト□□□ノ如キモ見付カル。
- 22日 月 楊氏雙鈎好太王碑ヲ石印本、及時代史巻頭ノ縮印ト比較シテ考タ。據ルベクモアラスコトヲ断定シタ。售ルコトニスル。<sup>〔50〕</sup>
- 30日 火 琳浪閣ニ先ニ買ッタ陶靖節案・詞綜・古詩源ノ三部ヲ售ッテ、五円ヲ得タ。楊氏雙鈎好太王碑ガ三円ダト云フノデ之ヲ售ラズ、持ち帰ル。
- ※日記中に見える書名リスト<sup>〔51〕</sup>

国訳漢文大成『荀子』, 国訳漢文大成『墨子』, 『殷契鈎沈』, 『関東鐘銘拓本集』, 『周金文存補遺』,

---

『筆史』、『金石私志』、浜田〔耕作〕『東亜考古学研究』、『楽浪郡時代の遺跡』、呉〔大激〕『古玉図考』、『国  
訳水滸伝』、『とう金吉図』、『東大・考古図編』、『客心齋集』、『両漢金石記』、〔羅振玉・王國維編著〕  
『流沙墜簡』、『九朝律考』、『古鏡銘考証』、〔容庚〕『金文篇』、容〔容媛 輯、容庚 校〕『金石書録』、  
宋陳思『書小史』、『宣和奉使高麗図経』、羅〔振玉〕『璽印姓氏徴』、『括地志』、『盛京疆域志』<sup>〔考〕</sup>等

### 【13】昭和6年・1931年

1月13日 火 午後一時、神田山本書店ニ行ッテ、持参シタ激□□□校刊刻石・集古虎□符攷・  
黄晟氏刊山海経及楊氏雙鈎好太王碑ヲ售リ、十五円ニナル。<sup>(52)</sup>

27日 火 粘蟬碑攷改訂ノ攷ヲ再ビ始メル。<sup>(53)</sup>

29日 木 東京駅白木屋、謄写版ヲ見ル。(新製品ダト云フ) 高価ナノデ□□□□□買フ。

3～4月<sup>(54)</sup>

7月1日 水 粘蟬碑考ヲ刪定シテ、…<sup>(55)</sup>

8月20日 木 晴。午前八時四十五分頃カラ歩ク。石川高台上ノ新開道路ヲ南シテ下リ、池上町・  
久ヶ原ノ土器散布地帯ノ全ク開鑿セラレテ、古キ痕ノ僅少ヲ止ムルヲ見回り、東調布町・千馬ガ窪ハ、  
鵜ノ木光経寺・峯・下沼部用水直上新鑿平地ノ渴デ石斧ト思フモノ、弥生式土器破片ヲ獲テ、調布  
カラ電車。帰宅、二時半。疲レタ。

10月<sup>(56)</sup>

※帳末の月日別図書購入表<sup>(57)</sup>

一月購書 三日 『古香齋・初学記』 山本／孫怡讓<sup>〔諱〕</sup>『契文举例』 山本／洪頤煊『漢志水道疏証』  
山本／『東亜百系奥地分』 九□□

二月購書 五日 羅福頤『古璽漢印文字徴』 晚翠軒

三月購書 九日 『淮南子真証』 山本

四月購書 一日 『聖典』／十五日 『古泉叢話』 山本／『筑前須玖史前遺跡の研究』 刀江／二十  
日 『法隆寺宝物図絵』 京都文華堂

五月購書 二日 〔辻善之助〕『親鸞〔聖人〕筆蹟之研究』 北沢／十二日 『仏説無量寿経阿弥陀経  
〔梵〕  
ぼん文和訳』／〔大谷光瑞〕『無量光如来安樂莊嚴経講話』

六月購書 六日 『山海経広註』 山本／『真宗大綱』 玉英支店／九日 『朝陽字鑑精華』 西東／  
『妙蓮法華経講話』 三越／十一日 『逸周書集訓校釈』 琳浪／『安陽発掘報告第二期』 文泉／  
二十日 『談書會誌』 20冊 小山書店

七月購書 四日 『漢熹平石経残字集録』 晚翠／『隸篇』 山本／七日 『新出漢魏石経考』 文泉  
／『中国古今地名大辞典』 文泉

八月購書 □日 『鐵雲藏龜』(新刊) 山本／『広倉学窘叢書』 山本／十一日 『雪堂叢刊』 山本

九月購書 八日 Le Chinese antique 丸善／廿六日 『遼東志』(尊経閣叢書) 巖松／『欽定満  
州源流考』 巖松／『対馬口談』 巖松／『國語集解』 山本／『淵鑑類函』(光緒編石印) 山本

十月購書 三日 『蔵平瓮記』 古書展覧会／『歴代ノ古泉百二十五譜』(中村不折) 井上／羅振玉  
『隋唐以来官印集存』 □□／九日 『敬吾心室彝器款識』 □□／『秦漢瓦当文字』 琳浪／呉侃<sup>〔叔〕</sup>  
□『商周文拾遺』 文求／『安陽発掘報告』 文求／十六日 『漢三国六朝紀年鏡集録』 岡書院／

『貞松堂集古遺文』 文求／廿一日 『攷古録金文』 山本／『水経注』 山本／『隸篇』 山本  
十一月購書 五日 『漢書吳音の研究』 □□□／廿日 『詩三家義集疏』 山本／『宋刊嘯堂集古録』  
文求／『澗秋館吉金図』 文求  
十二月購書 十四日 国史体系本『日本書紀』 玉英堂／十八日 『親鸞聖人真跡字□□』 井上／  
『日本読史年表』 稀書展／十九日 Ruins of Desent Cathey 窪川／廿四日 『説文古籀補』 琳  
浪／『標準國音検字』 文求

#### 【14】昭和7年・1932年

4月2日 土 午後、日本書紀神功紀百濟肖古王以下ノ王名出ヅルヲ、三国史記ニ照合スルニ、  
書紀ノ日付（月朔）ノ記事ノ百二十年前ノニ附トナセルモノナルヲ知ル。応神迄ヲ考証シツツア  
ル。<sup>(58)</sup>

29日 金 久米博士日本古代史下附録ノ今西龍博士高句麗好太王碑に就きてヲ終エ、石印本ニ  
抄写。

5月15日 日 夕五時半頃トカ、犬養首相官邸デ陸海軍人六名ノ襲撃スル所とナリ、ピストル  
二弾、頭部ニ命中シテ、十一時半逝去スト。夜半ト雖外ガアワタダシ。

7月21日 木 粘蟬碑幅ヲ二階ニ展ベテ、粘蟬碑考ヲ訂正スル。<sup>(59)</sup> 未修。

10月1日 土 今日、府下五郡八十二村ヲ市ニ併合シテ、大東京市成立シタ。<sup>(60)</sup>

12月3日 土 …。柏林社デ明治廿二年発行亜細亜協会「高句麗古碑、附古碑釈文」ナル小冊  
子ヲ買フ、三五――。

4日 日 好太王碑有正書局石印本、時代史景印ヲ昨日ノ石印ニ校合スルニ、彼此有無アリ。必  
ズシモ古キガ善クハ無イ。

14日 水 敬文堂デ神州國光全集第一二三年ト云フ函入廿一冊ヲ買フ。十円。重イノニ閉口シ  
テ帰宅。五時。

※帳末の月日別図書購入表<sup>(61)</sup>

一月 十一日 古書流通所石印薛氏款識法帖 晚翠／三体石経尚書春秋教大本 ヌ／十四日 野呂  
介石『天地石□画譜』 古書展・水谷／十九日 『余清齋法帖版本』 白山南陽堂／廿五日 趙子  
固蘭亭□□□版 南陽

二月 一日 唇去数部南書／『余清齋法帖』／□□衍氏讀古文義／吳大澂氏『説文古籀補』原本（以  
上みな）琳浪閣／『淵鑑類函』 山本／王氏<sup>(国維)</sup>『國朝金文著録表』 □忠愍公遺書本、及校勘記並鮑  
鼎氏補遺 山本／廿七日 『欧米に於ける支那古鏡』 岡書院

三月 十一日 『古文尚書撰異』 和書展・琳浪／『皇朝五經彙解』 ヌ文明堂／廿六日 『照顔録』  
文□堂／手簡 山本／廿九日 『古文書鑑』 黒木欽堂氏編 渋谷宮益坂正進堂／『南画への道程』  
々書房

五月 十七日 『作詩関門』 渋谷書店

六月 八日 『増補日本南画史』 宮益坂□文堂／『浦上玉堂』 本郷玉美堂／無量寿如来絵 本郷  
□□□／『説文捷要』 南陽堂／十一日 『鐵齋墨妙集』 御徒町荒井浮世絵店／『観古閣叢稿』  
文行堂



七月 十六日 『人間学トシテノ仏教』 丸善  
八月 十一日 『芭蕉七部集』 丸ビル富山房  
九月 九日 『永豊郷人稿』 並雜著 山本／郭沫若『金文叢攷』 山本／十九日 『先秦文字』 銀座  
□□□□／『考古学講座和鏡梵鐘』 ヲ／廿三日 『黄河治水・楚育王注』 新宿紀国屋  
十月 廿六日 『政余彫玉』 巖松堂／『賢歌憲評』(返却)／『呂氏春秋』 山本／『水経注王氏會  
校本』 山本／『論語語由』 巖松堂／廿九日 『鎮國守國兩部遺事』 巖松堂  
十一月 四日 「道□字鐘銘拓本」 柏林社／『古今書刻下編碑刻』 琳浪／『新□注地理志集解』  
文求／八日 『夢□藏陶』 渋谷敬文堂／十九日 『輿地広記』 善宋本 琳浪／廿日 『筠清館墓』  
『定武蘭亭』 琳浪／『石印博物志』 琳浪／『夏小正』 琳浪  
十二月 二日 『小信□藏古泉布拓冊』 吉田／三日 亜細亜協会刊『高句麗古碑』 柏林／『広雅  
疏証』 文永／『貞松堂集古遺文補遺』 山本／六日 『天経或問』 巖松／九日 『東部支那』 巖  
松／『考古学雑誌』(2冊) 巖松／十四日 『神州國光集』全廿一冊 渋谷敬文堂

※帳末のメモ

廿二年亜細亜協會『會余録』第五集 横井忠直氏 出土記／明治廿四年『史学会雑誌』二十二  
号～二十五号 菅政友氏『好太王碑銘考』／廿六年『史学会雑誌』四十七号(四十八号重複)  
四十九号 那珂博士『高麗古碑考』／三十一年『考古学会雑誌』二編一の三号<sup>(62)</sup>

【15】昭和8年・1933年

1月3日 火 神州國光全集ヲ見ル。  
7日 土 神州國光集金石文目ヲ作り始メル。羅氏漢石存目金石跋等ヲ見倣フ。  
11日 水 神州國光集ノ金石文ヲ諸書ニ比照ス。  
12日 木 神州國光集ノ金石文ヲ諸書ニ対比シテ見ル。  
30日 月 晴。午後、新宿三越デ、本日カラ開会ノ書物春秋會古書展覧会ヲ見ル。…今泉氏天  
□菴旧藏書カラ多ク目ニ附イタ。(其中ニ、明治十九年今泉氏令写了ト跋シタ清写高麗好太王碑  
注アリ、著者明カナラズ、卷頭ノ縮写碑文ニ當用馬兼羊〈羊ヲ何カ譌ッテ居ル〉ニ作ル、亜細亜協  
会本ノ同年ヲ気付イタ、四・——ト云ッテ、買ハズ。<sup>(63)</sup>  
31日 火 好太王碑ニ就テ、明治二十二年刊ノ亜細亜協会本アリ。数年早イ注釈本ガ欲シクナッテ、  
午後三時過、急遽出発。新宿三越書物春秋會古書展デ、今泉氏旧藏ノソレ、外題ニ永樂太王墓碑  
文トアル写本ヲ買フ。四・——。帰宅。□□□□。夜、新獲ノ此本、表紙汚穢ヲ嫌ッテ、覆ヒテ作  
り終ル。少シク校合ヲ始メル。<sup>(64)</sup>  
2月1日 水 時々、上海石印・亜細亜協会・明治十七年解本ノ卷首ノ臨写本ノ三本ノ好太王碑  
ノ字形ヲ校合シ、後ノ兩本ノ錯簡ヲ神州國光集・日本時代史ノ兩整装本景印ニ校シテ、其拓紙ト装  
貼ノ都合ニ依ルヲ校定ス。<sup>(65)</sup>  
2日 木 晴。好太王碑諸本ニ関スル昨日ノ考ヲ補考シ、記録ス。然ル後、「碑解」ヲ一読シテ  
見ルニ、諸書ヲ引用シテ中々時代トシテハ努メラレタルモノナルベキモ、其引ク三国志等ノ文・和  
訳ノ書キ流シノ乱暴ナルガ数多所ニ着イテ気持ノ緊張ヲ破ル。矢張り今西氏ノ論考ニ其ノ存在ノ実  
現セラレタル丈ノ現実ハアル。唯時代ノ早キ(今西氏ニヨレバ、十七年酒匂大尉が齎来セリト云ッ

テ、此書ハ十七年七月ニ成ッテ居ル）丈ガ珍トセラルベキモノ。<sup>(66)</sup>

3日 金 晴。好太王碑、征百残記中ニ出ヅル五十余城ノ名ヲ、後ノ守墓烟戸ノ城名ニ参照シテ、  
適會乃至確定該当者ヲ調ル。結果トシテ二三ノ新獲アリシツモリデアル。

3月9日 木 語石・校碑隨筆等。

15日 水 小西先生ヨリ□□、神州国光集ヲ返サレ、□□ヲ呉レタ。

16日 木 神州国光集ヲ見ル。

4月19日 水 午後。京橋高島屋ニ至リ、晩翠軒ノ催シナル朝鮮古美術工芸展覧会ヲ見ル。大概、  
高麗・李朝陶磁及近世ニ至ル木工、紙□・漆器、鐵器（火鉢三足ノ鼎形）等、前回ニ見タル範圍ノ  
モノダ。珍ラシキハ高麗黒釉花瓶ノ肩部ヲ廻ッテ…。

5月25日 木 御茶の水カラ琳浪閣書店デ、…（古書名）…、南淵書三冊二・五〇ヲ買フ。<sup>(67)</sup>

31日 水 南淵書中卷ノ好太王碑文ヲ、會余録本、羅氏本、楊氏本、書苑羅氏積本、今西氏積  
文ト対照ス。疑フナラバ、南淵書本ハ書苑羅氏積本、楊氏本、會余録本及其積文ヲ、更ニ上海石印・  
寰宇貞石図カ西東書□石印本カデモ参考シ、相当ナル眼識デ読積文ヲ批正シ、缺文ヲ補充シテ出来  
タモノデアラウ。正確ナル古本トシテハ、碑ノ第三面第一行ノ全ク缺ケ（テ居テ、其前後ノ文ノ却  
テ長ク続ケラル）タルガ、解スルヲ得ザル重大欠陥デアル。是ハ今西氏ノ実査記録ヲ未ダ見ザリシ  
作者ガ羅氏ノ缺四十字ナル注（書苑本ニモ洩ラサズ）ヲ見付ケズニ、楊氏雙鈎本（宣統元年刊）ヲ  
デモ頼ッテ作ッタト推測セシムル根拠デアル。<sup>(68)</sup>

6月15日 木 南淵書ノ好太王碑文抄写終ル。

16日 金 南淵書所輯ノ好太王碑文抄写ヲ、諸本ニ比較ス。書苑掲載ノ羅氏積文ニ同ジキ誤積（羅  
氏ノ誤積デハナイ、書苑記者ノ妄改デアル）ガ多ク見ユ。

27日 火 南淵ノ書ヲ思ヒキッテ読ム。上卷ヨリ通読、面白イ。ドウモ小説ラシイノハ、論ジ  
行ク考証的態度ガ大ニ不足致シ、□□初唐代ラシクナイ此書トシテ、明治末年久米・那珂・三宅諸  
博士ノ業績ヲ取り入レ、塩梅セシモノト考ヘルノハ至当デアラウ。（廿八日記）

28日 水 南淵書読了。礼記ノ孔達ノ大同ノ章ヲ、文ヲ変ヘテ引イテ居ル、面白イ。

7月10日 月 日本橋白木屋古書展ヲ見ル。琳浪閣出陳ノ亜細亜協会余録十五集全揃ヒ（二・  
五集ノ二冊ハ補充本、他ハ一乃至九、十乃至十五ノ二綴チテアル）二・五〇。<sup>(69)</sup>

8月12日 土 高句麗好太王碑字数攷。些カ所好ニ癖スルニ類スル攷辭〔？〕。<sup>(70)</sup>

14日 月 身体疲倦、読書根氣続カヌ。亜細亜協会會余録ヲ見ル。

※帳末の月日別図書購入表<sup>(71)</sup>

一月 廿八日 柴栗山酒家□七絶小箋 小山・徳宅／三十日 『汲古印粹』三冊 新宿三越書物春  
秋会／三十一日 『高麗好太王碑之解』 ヌ

二月 八日 『尚書後葉』 巖松堂／『書經集伝石印本』 山本／『書苑』六卷外 一誠堂／十二日  
『二百蘭亭□印攷』 松雲堂／十五日 『書道全集』 渋谷道玄坂・雄龜書店／二十一日 『校解隨  
筆』（原本刊）琳浪閣／二十四日 『漢字形声□□』<sup>〔讀か〕</sup> 渋谷・紀国屋／『宋本胡刻文選石印』 渋谷・  
雄文堂／『揮毫大観』 楠瀬日年氏 渋谷・敬文堂／二十五日 『書道全集』第五卷 神保町・大  
雲堂／『制度通』寛政版 巖松堂／『書苑』一誠堂

三月 四日 『書説・詩説』 郝蘭皋 文求堂／『兩周金文辭大系』 郭沫若 ヌ／十八日 『書芸』

- 小山／十九日 『生ノ実現としての仏教』 大岡山／二十四日 『石鼓文』、『錦山安氏甲本』 晩翠軒／二十五日 〔徐謂仁〕『随<sup>(軒)</sup>□金石文字』 丸ビル・□□□
- 四月 十八日 『書□全集』、『漢刻石』 敬文堂／『文字及書道』 敬文堂／二十日 『校本万葉集』 敬文堂／<sup>(伊藤仁斎)</sup>古学先生「雲行雨施」四大字一所、木版拓本 古とう堂／岩波文庫『白文万葉集』上冊 □□□／二十四日 『翰墨行脚』 大岡山・中山／二十七日 岩波文庫『白文万葉集』下冊 金満堂／二十八日 『書道全集』第三卷 目黒 □□□／『書道全集』第七卷 目黒□□□
- 五月 三日 『書芸』五月号 □□□□／八日 『書道全集』第六卷 清水書店／十五日 『日本古典全集』、『<sup>(銭)</sup>泉幣攷遺図録』 敬文堂／十八日 『考古学雑誌』12巻1号 巖松／二十一日 〔池〕大雅堂真跡山水冊 荒井浮世絵店／『掌中東西年表』 丸多古／二十三日 『碑帖大観』 南陽堂／石印小本『尚書後葉』 南陽堂／『青成山常道觀唐皇明勅碑拓本』 本郷・赤門・木内／二十五日 『校けい堂集』 琳浪閣／『南淵書』三冊 琳浪閣
- 六月 二日 『二十一史約編』 琳浪閣／十日 『箋注聞□□集』 敬文堂／『嚴武□がん記磨崖拓本』 赤門・木内／『久尼法範□師』 赤門・木内／十二日 『梅道人墨竹譜』 朝倉堂／『安立山古鏡図』 朝倉堂／『金石存』 朝倉堂／『欽定赤注山海經』 朝倉堂／『經学輯要』 朝倉堂／十七日 『書芸』大岡山／『槐文行堂書店拓本』／『大和生駒郡平城□□』 □□／『越前坂井大名』□□□□／『大坪正義氏藏鐸□□□』／直孤文刻土器ラシキノ拓本数葉／秘密手拓拓本／二十四日 唐拓化度寺求古簡印
- 七月 二日 『書芸』七月号 □□□□／七日 國訳漢文大成『易經・書經』 敬文堂／『史籍名著解題』 敬文堂／十日 『亜細亜協会余録』一集至十五集 白木屋古書展・琳浪閣／『陶淵明集』 琳浪閣／『ぎ川李氏藏化度寺碑吳平齋鈎刻本』 大雲／『書道全集』第八卷 一誠堂／十四日 『正統金石萃編』 山本／『金石契』 山本／二十日 『尚書箋』 応氏 山本／『隸古定尚書』 文求
- 八月 一日 『書芸』八月号 大岡山・宮□／九日 『陶淵明集』 山本／『陶淵明集箋注』 田村／『馬鳴寺根法師碑拓本』 一誠堂／十日 『南唐証清堂帖』 目黒・八坂書店／十七日 『陸謹庭李春明藏宋拓化度真本』 晩翠軒／二十四日 『日本精神に関する一考察』 紀平〔正美〕博士 丸善
- 九月 二十一日 『尚書古今文注疏』 松亀／二十九日 『美術叢書』池大雅 新宿・巖松／『翁覃溪校勘肅本淳化閣帖』 巖松
- 十月 三日 『陶詩宋曾集』 琳浪／『陶淵明集箋注』 文求／八日 『書芸』 宮北／十二日 岩波文庫『論語』 高島屋／二十五日 明張東海『蓮華歌』墨本、一軸 本郷・中村書店／三十日 『東洋美術史』大村西崖著 目黒・文節堂／三十一日 『元明清書画人名録』 □□／『□□ 東方徵讃』 荒井／『□書大字麻埋記』 荒井／『鄭道忠墓誌』、『曹默鳳氏雙鈎』 荒井
- 十一月 三日 『楷法溯源』 神保町・大屋／『日本南画史』 成進堂／五日 『書芸』十一月号 宮北／十日 『尊号美談』 新宿三越・古書展／『賞奇軒墨竹譜』 巖松堂／十三日 『池大雅先生薦事余光』 井上書店
- 十二月 六日 『書芸』十二月号 宮北／七日 翁覃溪校勘『淳化閣帖』 大岡山・中山書店／十一日 『十七帖の研究及び訳』 中村不折 大成堂／十三日 『歴代名人年譜』 文求／『尚書講話』 文求／『陶靖節詩箋』 山本／二十五日 『漢碑録文』 京都・彙文堂／『石鼓文匯』 彙文堂／

二十九日 『書芸』 昭和九年一月号 宮北／三十一日 『篆刻秘蘊』 日本橋・□□□□

# 【16】 昭和9年・1934年

2月15日 木 □□□□上代史新羅真興王事読筆記ヲ見、三国史記等ヲ見ル。

16日 金 三国史記、書紀。

17日 土 漢山碑・昌寧碑拓本ヲ見、考古学雑誌十二卷一、三号、今西〔龍〕博士ノ三碑考ヲ見ル。

7月11日 水 市電、日本橋白木屋古書會ヲ見ル。「書苑」一ノ五會告ニ見ル高麗好太王碑四分ノ一縮印〔画箋四枚〕ヲ買フ、一・——、文行堂。朝鮮浅川伯教氏蒐集ノ朝鮮古窯陶磁出土品展覽ヲ見、<sup>(74)</sup>…。

12日 木 雨。好太王碑ノ新得何モ無シ。然シ比較スルニ、此新獲影印ノ三井本ハ神州國光集第九集羅氏本、有正書局本等ニ比シテ、原始ニ近キ拓本デアアルコトハ肯定シ得。<sup>(75)</sup>例ヘバ

9月26日 水 宮益坂ノ雄文堂書店デ、日本時代史ノ古代上下二冊、一・六〇ヲ買ッテ帰宅。<sup>(76)</sup>五時半過。

10月15日 月 池内教授ノ帝大講義満鮮上代史高句驪建國ノ論ヲ読ンデ見ル。ソレハ久米〔邦武〕氏古代史ニ高句驪ト句驪ト別チ（即後漢書ヲ信用スル博士ハ、同書ノ別項トシテ句驪ヲ□□シタルヲ拠トシタノデアラウ。前者ヲ夫余種、後者ヲ貉種トシテ居ルトイフノダ）、高句驪國ハ句驪ナルニ、其法俗伝統ニ夫余種ノヲ仮タル爲、其起源不明トナレリト説クニ□□リ、試ニ他著ヲ見□□。

16日 火 池内教授講義等。

18日 水 加藤繁博士帝代講義□□史ノ序論、古代史論及本論ヲ見ル。

22日 月 東大和田〔清〕助教授ノ東洋史概説講義□□ヲ少シ見ル。<sup>(77)</sup>

26日 本郷琳浪閣…。朝鮮光文會刊ノ海東繹史四・——、総督府ノ朝鮮図書解題六・——、…中江…、高橋亨文学博士述（朝鮮総督府学務局出版）朝鮮宗教史に現れたる信仰の特色五〇ヲ買フ。<sup>(78)</sup>

30日 火 海東繹史。初テ吾人ノ見ヌ者ガ出テ居ルカモ知レスト、期待シテ見ル訳ダ。

11月2日 金 書芸、去年三月ヨリ今年 月迄…、黄草嶺真興王巡守碑拓景、及…抜き出ス。纏ルツモリ。

※帳末の月日別図書購入表<sup>(79)</sup>

正月 二十二日 『支那花鳥画冊』、『支那名画選集』、後藤〔朝太郎〕・山口〔弘達〕『硯の栞』／二十四日 頼山陽『真跡耶馬溪図巻』、杉田以園『耶馬溪真景図帖』

二月 一日 『書芸』二月号／七日 史可法艸書『杜詩』墨跡／二十日 郭〔沫若〕『古代銘刻彙攷』、『雙劍<sup>(80)</sup>□吉金文選』、『孫氏周易集解』／二十四日 『観妙齋金石文考略』

三月 一日 『文人画選』、『宋画』／四日 『書芸』三月号／七日 『王注老子』、『尺とく奇□』／八・九日 『弘法大師書集』

四月 三日 『書芸』四月号／二十一日 『魏晉唐小楷法帖及研究』

五月 四日 『書芸』五月号／九日 『御批歴代通鑑輯覽』／十八日 『孫氏周易集解』、『周易口<sup>(81)</sup>けつ義』／十九日 『新疆甘肅探險』、『〔魏〕晉唐小楷法帖〔ノ〕続』

六月 一日 『桑名城下古地図』、『錢范拓本十五帖』／八日 『書芸』六月号／九日 『貨布文字考』

／十日 『女尼古録』、『安吳論書』、『古銅瓷考』／十六日 『尚書講義』／十八日 『觀古閣泉説』  
七月 一日 『立□館令集』、『東海道筋均律抄桑名□□墨引上帳』／七日 『書芸』 七月号／十一日  
『高句麗好太王碑』 縮印七条版画第四枚、白木古書會文行堂／十三日 『守國公十七歳御和歌短冊  
幅』、『淳化法帖集』／二十九日 『慶応四年正月□付近戦闘図』  
八月 十三日 『京都美術大観』／十九日 『木□□阿□作古鏡拓本』、北野天満宮蔵『日本古地図』  
／二十七日 『蘭亭及法帖概覧』、『日本歴史地図』  
九月 四日 『撃滅』／七日 『書芸』 内藤湖南博士追悼号／八日 『大清會典』／十日 橋本増吉『東  
洋古代史』／二十六日 『敦皇出土古写仏典について』、久米〔邦武〕『日本古代史』上・下（布製本）  
／三十日 郭〔沫若〕『殷周青銅器銘文研究』  
十月 六日 菅〔政友〕『任那考』、『読史備考』／十六日 趙子昂『大成殿記』、『行成卿和漢朗詠集抄』  
／二十二日 『法帖概覧続及殷文周篆』、『支那上代書史』／二十六日 那珂『海東釋史』、総督府  
『朝鮮図書解題』、高橋亨『朝鮮宗教史に現れたる信仰の特色』、中江丑吉『尚書般庚篇に就きて』  
／二十六日 『眉寿図』／二十七日 〔楊守敬〕『激素飛清閣評碑帖記』、神龍半印本『蘭亭序』、『磊  
齋鉤印選存』、『定武樓印〔累〕』  
十一月 五日 『尊古齋古璽集林』 第一集／十三日 『書芸』／十七日 『古泉匯』  
十二月 一日 『さん籀移古金木選』、『翁譚溪鈎化度寺石印』／六日 『文字』、『神州大観』、『書芸』  
／二十日 『俑廬日札』／二十八日 『法帖書論集』／二十九日 『書芸』 昭和十年正月号

## 【17】昭和10年・1935年

3月8日 金 午前、急イデ〔辻善之助〕日本仏教史研究、教行信証後序問題ノ略目・要文ヲ約抄。  
午後、エルム書房ニ返ス。他書ト交換ナラバ差金ヲ戻ストノ事デ（現金戻ルナラバ四・五〇ト云カ  
フ）、黒板勝美博士国史ノ研究総説二・二〇、各説上二・七〇ヲ買フテ、前書ヲ返ス。<sup>(80)</sup>

25日 月 十時過發。日本橋白木屋古書展、長白榮禧高句麗永樂太王墓碑調言（謄写版、小冊、  
五〇）ヲ買フ。歩イテ日比谷図書館及ビ…。<sup>(81)</sup>

9月2日 月 十時發。室町三越一誠堂ノ展売ヲ見ル。明治十九年三月六日及八日雙鈎ト識シ、  
嚴確私印、秋雪野人ノ二印記、卷首ニ荻原之印、方印、外題ニ東夫餘永樂太王碑銘抜一百七字ト  
書キ、嚴確ト印記アリ。雙鈎搨字ノ後ニ、隸字碑文ニ朱ノ句読、反点、敖子池注、武郷□ノ注アリ。  
首ニ年紀ノ外、海軍省御用掛青江秀□<sup>(82)</sup> 積アリト朱記。二円。…。帰宅六時過。

3日 火 新獲「東夫餘永樂太王碑銘雙鈎」ヲ審ニスルニ、會余録ノ縮印ガ全ク同書体デ、画毎  
ノ気分マデ縮メラレテ存スルヲ見出ス。縮石印ノ拠ルニ□□ヲ始メテ覺ル。其ノ明カナ誤字ハ、原  
拓不明ナルヲ誤ッテ画ヲ選ビ定メタコトト思フノ他無ク、而シテ三井本、上海石印本、羅氏本等（各  
本間ニ小異ガアルガ、先大抵同ジトシテ）トノ間ニ、殆ンド字字異構別画ヲ見ル。最初拓ヲ愈々見  
度キモノト思フ。<sup>(83)</sup>

4日 水 夜。好太王碑銘新獲本釈文ヲ見終ル。

5日 木 東夫餘永樂太王碑銘雙鈎ノ字□□・行数攷及釈文、主トシテ青江本ト対校シタル処ノ  
攷ヲ（二、三、四日攷）録シ置ク。買ッタバカリデ（三月廿五日ニ買フ）、未ダ読マナカッタ長白  
榮禧氏永樂太王墓碑調言ヲ読返〔ス〕。此書、序ニヨレバ光緒八年（明治十五年）ノ拓本ニ拠トア



ルガ、其釈文ハ南淵書流ノモノ。但、新拓本ト異ル旧拓本ノ字ニ合スルラシイ所多ク、此点、参考スベキダ。光緒八年ノ拓本ダツタラ欲シイ。

6日 金 永楽太王墓碑調言ノ碑文ヲ、亜細亜協会石印本及新拓本ト対校略表ヲ作ル。先日、「東夫餘永楽太王碑銘」ニ外表覆紙ヲ加ヘタガ、未ダ題ヲ書カズ。會余録本ノ字ヲ集メ、撮シテ作ル。會余録ニモ外表紙ヲ附ク。

7日 土 尚、永楽太王碑□□□楽□。南淵書ノ碑文ヲ書苑第五号ノ釈文ニ□□□レバ、此釈文ガ偽釈文ノ基礎粉本トイフベキデ、益々自信。<sup>(84)</sup>

10日 火 八時過發。上野へ省電、久シ振りニ図書館。…好太王碑研究書ヲト思ツタガ、青江秀氏ノ「東夫餘永楽太王碑銘之解」(小杉温村博士書デ跋ガアル)<sup>(根郷)</sup>ヲ見付ケテ借リタ丈。対校。行数迄全然同ジ。但、蔵者ノ手入レガアリ、銘ニ句読送り、仮名ヲ付スル等ガ、余蔵本ト異ル処。池内宏博士「真興王戊子巡境碑と新羅ノ東北境」…。

10月19日 土<sup>(85)</sup>

11月7日 木 昌寧ノ比子伐碑大拓本ヲ懸ケテ、考古学雑誌十二ノ十一今西博士ノ論文ヲ読ム。

※帳末の月日別図書購入表<sup>(86)</sup>

一月 九日 『文字録存』／十一日 『三代秦漢の遺品に識せる文字』／十五日 『観無量寿経』／十九日 『桑名城川口港版画』／二十六日 『頼山陽真蹟上楽翁公書』、『鳥羽伏見の変と維新史の訂正』

二月 二日 『那須國造碑拓本』／四日 『広重』アルス版、『墨林新清』／九日 顧燮光『夢碧移石言』、『龍門邇原拓本』剪帖冊／二十三日 直木〔三十五〕『楠木正成』／二十六日 竹内〔逸〕『支那印象記』、岩波文庫『東海道中膝栗毛』、『物語支那史体系』<sup>(大)</sup>第一卷、同左第二卷

三月 七日 辻博士『日本仏教史研究続編』／八日 黑板博士『国史の研究』／十日 後藤〔朝太郎〕『支那旅行通』／十四日 中村徳五郎『児島高德』、中村直勝『日本古文書学』／十五日 中原<sup>(郷)</sup>とう州師『亀□讚』半折／二十五日 『高句麗永楽太王墓碑調言』長白榮禧攸峯・光緒廿九年著(謄写版本) 白木屋古書・水谷書店／二十五日 『大蔵経索引』、『読書誌會』、『書鑒』／二十六日 『楽翁公余影』、『阿弥陀経講話』、『太平記』、『國書刊行會出版目録』附『日本古刻書史』／三十日 『観世音菩薩』、『新訳金光明経』、黑板〔勝美〕博士『皇家中興の大業』、藤<sup>(縣)</sup>□〔静也〕博士『江戸時代の絵画』／三十日 亀田〔純一郎〕『太平記』、友枝〔照雄〕『平家物語の考察』、中村『増鏡』、『楽翁公偉績講演集』、『秘本万葉集抄』、関野〔貞〕博士『楽浪帯方の遺物』、『大鏡』、後藤朝太郎『翰墨談』

四月 九日 鷺尾〔教導〕『恵信尼文書の研究』、『教行信証』／十三日 村井直巖編『古墳古器之図』、『坂東真本教行信証』、『参考太平記』／十七日 『書芸』四月号／二十七日 『伏廬蔵印』、『かん齋蔵印』<sup>(知か)</sup>

五月 一日 『書道全集』第二卷／十三日 『行成字鏡』／十五日 『書芸』五月号／二十五日 『出世豊太閤』少年倶楽部一月号付録／二十六日 『神州大観』1～14冊、『韻補』、『納経集印冊』／二十八日 『退閑雜記』、『国史大辞典』／二十九日 蓮實〔長〕『那須國造碑考』、『大楠公を語る』、『大楠公展覧会大観』、『日露大海戦を語る』

六月 十三日 『書芸』六月号

七月 十一日 『楠氏研究』、『大無量寿経国訳』／十二日 『陶詩集注』、『陶詩彙評』／十七日 『難  
太平記』／三十一日 『書芸』 八月号  
八月 十二日 『狩谷校齋全集』 第三・七・八・九卷／二十五日 〔中村不折〕『法帖〔書〕論集』  
漢碑之研究上／三十一日 『法帖〔書〕論集』 漢碑之研究下  
九月 一日 『書芸』 九月号／二日 『東夫餘永楽太王碑雙鈎本』 明治十九年・日本橋三越一誠堂、『金  
文統編』、『書道全集』 第四卷／二十日 『増補多〔賀〕城碑考』／二十六日 『東海道名所図会』,  
『相模國風土記』、『書道全集』 第六卷,『立見大將伝』,『書画骨董雑誌』,『楽翁公偉績講演』,『日  
本歴史文庫』 五冊／二十八日 〔村上專精〕『仏教統□□』 五篇  
十月 五日 『復原聖徳太子伝暦』／六日 『書芸』 十月号／十六日 『神明鏡』,『六史要覧』,『宇  
多天皇実録』,『古今著文集』,『一代要記』,『多度神宮寺伽藍縁起并資財帳』 景写本／二十九日 『古  
事記に於ける特殊なる訓法の研究』,『国史学の栞』,『憲法制定の由来』,『雲崗大石窟』,『聖徳太  
子憲法と法王帝説の研究』,『補校上宮上王帝説証注』《以上, 100 冊》  
十一月 十一日 『古事記』 古典全集本／十二日 『三国史記』 朝鮮史学会刊／十三日 『御大札記念  
写真帖』／十九日 『書苑』 八ノ九, 十ノ一・二・三／二十日 『六国史』／二十七日 『校本古訓  
古語拾遺』, 池辺『古事記通釈』,『支那暦法起原考』  
十二月 十一日 『日本書紀通釈』／十四日 『校訂古事記伝』／二十一日 『敷教条約』,『大名□  
氣』,『又定□公和歌』,『井伊直孝公□□書簡』,『柴栗山上近衛公書』,『菅公略伝』,『草のよす  
が』,『御國古器略考』,『東國通鑑』 朝鮮光文會刊, 大谷光瑞『仏教の大意』,『我郷土(石津村)  
之古蹟』／二十四日 『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』,『春日山地獄谷石仏拓本』,『元興寺縁起』  
／二十五日 中村不折『秦碑之研究漢碑之形制』／三十日 『瞥見旧事記』,『日本逸史』, 黒板『聖  
徳太子小観』,『聖徳太子御像解法』, 岩波文庫『日本書紀』,『書芸』 十二月号

## 【18】昭和11年・1936年

1月28日 火 神保町ノ岩波書店デ、国史の研究各説下、三・五〇ヲ買ウ。<sup>(87)</sup>  
29日 水 国史の研究各説下、飛び々々読ミ(昨夜ヨリ今日ニ)。  
4月9日 日 午後五時、大岡山工大前中山書店へ書物ヲ售リニ持ち行ッタガ、…□□□<sup>(88)</sup>  
21日 火 午後一時半、東京美術学校ニ在ル文庫ニ香取秀真ヲ訪フタガ不在。…三時半、美校  
文庫ニ訪フテ面□ヲ得タ。御高話ヲ承リ、文庫閲覧証下付願ヲ、先生(秀治郎ト云フ「本名」ヲ始  
メテ知ル)紹介者トシテ…。<sup>(89)</sup>  
5月16日 土 池内博士朝鮮の文化ヲ読ミ始ム。  
16日 土 池内朝鮮の文化ヲ読ミ続ク。  
9月21日 月 琳琅閣ニ見テ買フ本、…、高麗永楽太王碑釈文纂攷、八五、…。<sup>(90)</sup>  
10月7日 水 曇。午前九時発。銀座松阪屋第一古書展覧会、四分ノ三マデ見テ、琳琅閣出陳  
ノ初拓好太王碑ト題スル原初拓本剪貼十二冊ヲ見ル。善イカ、ルモノガ售ラレ居ッタ。想像モ出来  
ヌモノデアル。価三十五圓也ガ一寸痛イケレド、見過グル中ニ、如何ニ余ノ学問的事業ノ一劃期的  
仕事ヲ此中ニ見出スコトノ可能性ヲ覚エルノデ、買約。琳琅閣店員江田氏、支那ノ上海デ入手シタ  
モノデアルトノ事。他ノ書ニ目ガ呉レテ戻ッタ。正午頃ダッタガ、帰途ニ就キ帰宅。郵便局デ四〇

——受取り、更ニ松阪屋ニ行キ、寶物ヲ獲タ。夜カラ八日、九日午前半日ヲ、此拓冊ニ見入ッテ居ル。九日、午前八時ニ終ッタ。第二冊目ノ検討ニ、半日ヲ費ス。中中、新見ハ出ヌケレドモ、亜細亜協會本ト新拓本トノ各ノ拠ッテ来ル所ヲ、此ノ原石本ニ拠リテ歴歴判明セシムルコトノ出来ル点、今迄ニテモ多処アル。此ノ拓本ニ最も近イノハ、書道全集第六卷所載本（原大印出、十二字バカリ）デアルガ、其或画及ビ字外ノ処ニ墨ヲ用ヒタ所ヲ、此本トノ比較ニテ知り得ル。三井本、羅氏（国光集）本、有正書局本ノ三ノ中デハ、最後ノヲ最劣トシ、前二者ハ時々長短ヲ見ルガ、皆字外ニ石灰ヲ用ヒタ後ノモノ。字モ漸々ニ手ヲ入レラレテ居ルコトガ判ル。（九日午後一時半記）<sup>(91)</sup>

8日 木<sup>(92)</sup>

9日 金 好太王碑研究。<sup>(93)</sup>

10日 土 好太王碑研究。

11日 日 好太王碑研究。

12日 月 好太王碑研究。

13日 火 好太王碑拓冊、一応見終ル。

14日 水 好太王碑、再校。第二冊ヲ読終、新得ハ無シ、前後処ヲ□ムルノミ。

15日 木 好太王碑。

16日 金 好太王碑、第五冊ヲ再校。傷文ヲ又発見、中中未釈字ヲ拓出セルモ、釈読出来ズ。情無イ。

17日 土 好太王碑。

18日 日 好太王碑。

19日 月 好太王碑。

20日 火 好太王碑。

21日 水 好太王碑。

22日 木 好太王碑。

28日 水 書芸。神州国光集各号ノ見ル好太王碑、傍証ヲ獲ン為。

29日 木 好太王碑第一面初ヨリ、三校。殘字二字一紙偽貼ヲ、又発見、正ス。紙接合所調べガ手懸リニナッタノデアル。何デモシテ見ル事ダ。

30日 金 午前。好太王碑、三校続ク。

11月13日 金 曇。午前九時発。上野美校。関野〔貞〕氏…『高句麗時代〔の〕遺蹟』（平壤付近）、池内宏氏『満洲〔国安東省〕輯安〔県〕高句麗遺蹟』、『朝鮮古籍図譜』<sup>(94)</sup>第一冊、楽浪（丸都）帯方、高句麗遺蹟ヲ借覧。池内教授ノ著ニ、昨年発見高句麗墨書墓誌ヲ珍ト見、好太王碑文ノ参考資料タル文、及ビ字ヲ見ルヲ得ルト思フ。四時半—七時、帝大、東方文化学院講演、池内教授、輯安高句麗遺蹟、昨及ビ今秋調査ノ概要。幻灯ヲ用ヒテ説カル。帰宅八時十五分過。<sup>(94)</sup>

20日 金 晴。午前九時発。美校文庫。朝鮮古籍図譜<sup>(95)</sup>一二三四、及ビ其解説、借覧。三時五十分退館。

23日 月 日本橋白木屋古書展、文行堂ノ大正七年釈文・解説ヲ附スル画箋二枚ニ縮印シタ好太王碑（高句麗好太王碑縮本）、五〇。<sup>(95)</sup>

12月18日 金 〔十九日記〕朝鮮金石攷、葛城末治氏、昭和十年刊、…好太王碑ニ就テハ釈文ヲ掲ゲズ、抄文ヲ出スノミ。

- 25日 金 好太王碑、第一面、第四校続ケル。  
26日 土 好太王碑、第一・二面、四校。  
27日 日 好太王碑、二面、第四校。新得無カラズ。  
29日 木 好太王碑。  
30日 水 好太王碑、第三面、四校。  
31日 木 朝鮮金石攷、葛城末治氏著、巖松堂<sup>(96)</sup>。

※巻末のメモ

○国学論叢、第一巻第一号（鉛字）、劉節氏、好太王碑考釈。○考古学雑誌五ノ三・四（大正三年十一・十二月号）、関野博士、輯安県、平壤、□□。

好太王碑拓冊／平面一尺×六寸／高二寸七分、二・四、三・二、二・七、＋一尺一寸／更ニ一分ヅ々増セバ二寸八分、二・五、三・三、二・八、＋一尺一寸四分<sup>(97)</sup>。

#### 【19】昭和12年・1937年

- 1月4日 月 朝鮮金石攷。  
5日 火 朝鮮金石攷、比子伐碑ヲ掲ゲテ考ヘル。  
7日 木 午前、好太王碑。午後、…江戸橋二ノ八、松慶ビル座右宝刊行会ニ至リ、満洲国安東省輯安県高句麗遺蹟ヲ買ウ、二・三〇。帰宅六時。<sup>(98)</sup>  
8日 金 好太王碑。  
9日 土 好太王碑。  
10日 日 好太王碑。  
11日 月 好太王碑、四校。  
13日 水 好太王碑、四校、終ル。（尤モ、先日、第一面五行、掃除□倭ノ倭ヲ考ヘテ居タノヲ、五校トシテ記シテ居イタガ、全□トシテハ四校□ノデアル。）<sup>(99)</sup>  
14日 木 好太王碑。韓穢・城名ヲ見テ見ルト、魏志東夷伝ヲ見ル〔ニ〕、二三同地名ラシキヲ見得ル。今西氏、記サズ。（十九日。那珂博士ノ論文ニ、既ニ載セラレ居ルヲ見ル。）  
15日 金 好太王碑。城名、其他。  
19日 火 曇リ、後雨降ル。九時半発。美校文庫。三宅博士、考古学研究〔『考古学会雑誌』〕ノ高麗古碑考、那珂通世遺書・外交繹史ノ高句麗考ヲ抄写。  
21日 木 曇リ、後雨。午前九時過発。上野図書館。…史学雑誌四十六巻一号（昭和十年一月号）、末松保和氏、好太王碑辛卯年ニ就テ。朝鮮金石総覧（大正八年、三月刊、大正十二年補遺）。帰宅、六時二十分。<sup>(100)</sup>  
22日 金 午前十時半発。日比谷図書館。満洲歴史地理第一巻、白鳥〔庫吉〕・箭内〔互〕両博士ノ漢代ノ朝鮮、稲葉〔岩吉〕博士ノ漢代ノ満洲、箭内博士ノ三国・晋（南北朝等、読マズ）の満洲続編、少シク抄録。…輯安県附近高句麗遺蹟、三宅俊成氏ノ好太王碑ノ記述ヲ抄録。帰宅、六時半。  
27日 水 香取〔秀真〕先生「日本鑄工史」ヲ戴ク。<sup>(101)</sup>  
3月25日 木 午後。株券・□券等ト、初拓好太王碑十二冊ヲ、長二郎様方ヘ預ケル。火災多発□□□。<sup>(102)</sup>

- 4月4日 日 午後。洗足〔池〕、長二郎様御宅へ行ッタ、お土産。預ケタ好太王碑ヲ貰ッテ歸ル。
- 5日 月 朝鮮史のしるべ、計・六〇ヲ買フ。<sup>(103)</sup>
- 16日 金 粘蟬碑拓本ヲ撮影。<sup>(104)</sup>
- 5月1日 土 粘蟬碑考ヲ香取先生ニ託シテ、ホツシテ、何ノ仕事の間ノ空虚ノ心持。早速、好太王碑ニカカル。好太王碑、写真ニスルナリ、撮写ニスルナリ、初拓本ノ呉処勝処丈ヲ、一先数ヲ定メタラ、ヤリ始メル。<sup>(105)</sup>
- 2日 日 好太王碑二面、少シク〔脱字あるか〕マデ行ウ。
- 3日 月 好太王碑、少シク従来ノ考ヲ進ムル所モアリ。一度ハ一度ノ効アルヲ思フ。
- 4日 火 好太王碑。
- 5日 水 好太王碑、考察。
- 6日 木 二三日来ノ仕事ハ、好太王碑ノ考ヲ纏メル事、幾何程、新得アルヤ。雙鈎（謄写版）ニ出スベキ幾何カ、写真ハ如何、ト調べテ居ル。
- 8日 土 好太王碑。□考ノ結果、調べヲ終ル。貧弱デアルガ、予想ノ如クデアル。
- 11日 火 好太王碑。
- 12日 水 好太王碑ニ就テ□□□□□。
- 6月4日 金 池内博士ノ満洲民族史講義筆記ヲ讀ム。武断ニ服シ兼ネル感、益々大キイガ、サレバトテ反証ヲ拏ゲントスレバ、博士ト同様武断ニ陥ルニ違無イ<sup>(106)</sup>（五日夜）。
- 14日 月 美校ニ、〇時半頃、香取先生ヲ訪フタガ、未ダ出勤セラレヌ。博物館ニ訪フモ、出勤セザリシ由、好太王拓本ヲ特別観覧ヲ請フタガ、新館落成迄ハ見セストノ事。
- 17日 木 …本郷弓町文雅堂、雑談、三時間バカリ（支那拓本工ノ事ナド）。…好太王碑関係ノ雑誌ヲ探シテ神保町ヲ歩キ、獲ル所無ク、帰宅六時半。<sup>(107)</sup>
- 10月4日 月 好太王碑ヲ見直シ、考ヘ直シ始ム。
- 5日 火 好太王碑。
- 7日 木 日本橋白木屋古書展、窪川ノ亜細亜協定会余録第五集（好太王碑）ノ完本、・三〇。
- 13日 水
- 14日 木
- 15日 金
- 16日 土
- 初拓好太王碑考究。<sup>(108)</sup>
- 20日 水 既刊管見に入れる好太王碑写真版各種（と云っても五種だが）を二類に分ち（二十日）、（以下廿一日）新旧の鑑定点として、第一面のみの著しい字形を比較して見る。ゴチャ、と書いて見る。<sup>(109)</sup>
- 29日 金 二三日見タ語石、夜終ル。好太王碑に関係アルコト、之ヲ手拓シテ行写スト云フ。碑估李雲従ニ関スル記事ヲ拾ヒ集メタ。<sup>(110)</sup>
- 11月6日 土 又、此頃、好太王碑ヲ見テ考エテ居ル。新獲ハ稀デアルガ、氣ガ済マヌ爲、又シテモ翻閱シテ居ル訳デアル。
- 10日 水 好太王碑。考察ニシテモ、写真ヲ利用セネバナラズ。相当ノ数ニ昇ル写真ヲ、写真屋ニ頼ムノハ辛イシ、思フ様ニ出来マセヌ。自ラノ手ヲ下ス他無イ。木ノ枠ヲ作ッテ、複写ノ用意



---

ヲスル。※上ノ横木ニ□ヲ載セ、写真器ヲ□懸ケテ、俯瞰撮影之装置ヲ作り終ヘル。<sup>(111)</sup>

11日 木 好太王碑ヲ如何ニ配合シテ、手札版ニ六字宛ヲ撮影シ、得分ヲ数日考エテ来タガ、結局手際善クハ行キサウニナイ。障屏ヲ用フル他無イラシイ。午後三時前、駅前川島写真材料店デ、プロセス乾板手札一・三〇。□□現像薬、酸性ハイポ鉄皿三、□・二〇。赤電球ヲ買フ（計二・四五）。帰宅。直チニ、四時二十分頃、路、大分暗イ感ジノ曇空ノ窓下ニ、第一枚ヲ撮影。加減ヲ見ル。F8一分。夜、現像（十二三年振ノ操作デアル）過ギテモ居ラズ、好結果ラシイ（八時半記）。

12日 金 好太王碑撮影、二枚。

13日 土 好太王碑撮影、五枚。

14日 日 夜、入浴ノ前、半時間バカリノ間ニ、十二日撮影ノ二枚ヲ現像。一枚、日中ニ撮ッタノガ、ヒドイカブリ。

15日 月 三時、四時迄、昨夜現像カブッタノヲ、再ビ撮ル。夜、現像六枚。十三日中ノガ、矢張り少シカブッテ居ルガ、焼ケル程度。

16日 火 好太王碑、写真三枚撮ル。夕、川島写真屋へ、プロセス原板、第二打ヲ買ヒニ行ク。

17日 水 好太王碑、写真六枚。夜、十六日ノト、計八枚現像（一枚残シテタ）。十六日ノ一枚、取枠装置の不注意デ、嵌マラナカッタラシイ、カブリデ駄目。十七日ノ一枚ハ、乾板裏返シデ駄目。計十二枚。総計三枚（十枚ノ中デ）失敗トナル。

21日 日 …午後漸ク目覚メテ、写真五枚ヲ撮ル（中二枚ハ前ノ失敗ノ再挙）（廿六日記）。

22日 月 午前、写真一枚ヲ撮ル。午後、川島写真店ニ至ル。プロセス原板、第三打ヲ買フ。暗室ヲ借りテ、未現像写済ノ七枚ヲ取り出シ、新乾板十二枚ヲ皆装置。帰宅シテ、六枚撮ル。夜、現像十枚。稍、写度不足ヲ覚シモノアルモ、全クノ失敗ハ無イ（廿六日記）。

24日 水 （廿六日ヲ前記）午前三枚、午後二枚撮影。夜、前ノ残リトデ、八枚現像。是デ全乾板三十五枚中、三枚失敗デ、所獲種板三十二枚（残リ一枚ハ、予備ニ取ッ置テイタ訳デアル）。此中ノ一枚ハ、総督府本ノ第二行我字ノ位置ヲ示ス部分写ト、張遷碑・広武將軍碑陰ノ各臆字ノ部分写ト、半分二度ニ撮ル（廿四日撮ル）モノ。他ノ三十一枚ガ正シク初拓好太王碑ノ著シイ文字、及其証タル同碑字タリ。

26日 金 午後、写真屋川島ニ至リ、原板ヲ示シテ印画紙ヲ買フ（前ノト同紙ヲ）。夜、始メテ焼付ケ。七原板、八枚（香取ヘ一斑ヲ報ゼシ爲、「爲我連／下迎王」ヲ二枚焼キ、府本縮写ト共ニ廿七日送ルノダ）。原板ノ善イ出来ハ、此印画紙デハ強過ギテ、寧ロ写真石版ノ様ダ。カブリ過ギタノガ、原拓本ノ味ヲ善ク出シテ居ルノガ、興味アル事ダ。<sup>(112)</sup>

27日 土 …香取ヘハ、廿六日欄記載ノ如ク、二枚ノ写真ヲ同封、初拓好太王碑考ノ一斑ヲ報ズ。

12月2日 木 夜、写真焼付十枚。是デ、一通リヲ終ルノデアル。総督府本ト三井本トノ第二行「爲我連」ノ部ヲ、ロートグラフトシテ見ル。先、見ラレルモノガ出来タ。是モ一法デアル。

6日 月 三日獲タ東洋学報十五ノ二、前間恭作氏、新羅上代ノ王譜ニ新ラシノ説ヲ□読ミ、序ニ前ニ蔵スル史学雑誌ノ末松保和氏ノ論議ヲ読ム。<sup>(113)</sup>

7日 火 好太王碑、新羅□錦ノ参考ニ、前間・末松両氏ノ論文ヲ尚見ル。

11日 土 午後一時、帝大文学部三十番教室、史学会講演、池内教授「広開土王碑発見の由来と碑石の現状」。

---



12日 日 前日曜日撮影ノ写真出来、大カビネ三枚、台紙貼付四・——、台紙無シノ焼増十一枚六・六〇、□・六〇。桑名へ十一枚ヲ送ル。

【20】昭和13～14年・1938～39年

昭和13年・1938年

2月9日 水 午前十一時発、上野松阪屋・第一古書展ヲ見ル。…文求堂ニテ遼東文献徴略ヲ伺フモ獲ズ。

5月6日 金 水道橋下車。南陽堂ニ、昨夜届イタ目録ニ見タモノヲ見ル。…ソレデ楊氏雙鈎好太王碑（不思議ニモ、昭和初年ニ此房デ同ジキ本ヲ買ッタ事ガアル。後、山本書店カニ持售ル）八・——、大森松四郎氏輯、永樂太王古碑ナル小冊子〔大森松四郎・武井龍三編『高勾麗永樂太王古碑』1908年〕、二・——ヲ買フ。

8日<sup>(114)</sup> 日

10日 火 午前十一時半発、上野美校。午後〇時五分、香取先生ニ面接、頃日獲タ拓本中ノ年号鏡拓本ノ御鑑定ヲ請フ。

6月14日<sup>(115)</sup>

24日 金 文雅堂、曩ニ貰ッタ秦漢瓦当漢鏡拓本冊二冊ヲ返シテ、同値ノ寰宇貞石図ヲ貰フ、五〇入レル。<sup>(116)</sup>

7月12日 火 寰宇貞石図ヲ見ル。<sup>(117)</sup>

30日 土 文雅堂、豐宝子碑ノ石印本・二〇。…史学雑誌、本年一月号（池内教授好太王碑ノ考）ヲ□雑誌屋ニ見テ得ヌ。帰宅、三時前。

9月6日 火 七月下旬、榎本重大工様ニ依頼シタ初拓好太王碑ヲ盛箱、漸ク八月下旬（何日カ正確ナ所ヲ書き忘レタノデ、此ニ記ス）出来ル。全部ラワン材デアルガ、材ノ色ノ変ッタ処ヲ利用シテ、蓋ヲ作ッタナド、中々善イ。<sup>(118)</sup>

10月30日 日 十一月十日カニ、開館式ヲ挙クルト聞ク。帝室博物館ノ好太王碑初拓本ヲ研究〔サ〕セテ貰ッテ、愈々数年ガ、リノ小考ヲ纏メ上ゲラルト思ヘバ、心ノ勇ムコトデアル。<sup>(119)</sup>

11月1日 火 寰宇貞石図。<sup>(120)</sup>

2日 水 寰宇貞石図。

3日 木 寰宇貞石図。

4日 金 寰宇貞石図。

5日 土 寰宇貞石図。

8日 火 寰宇貞石図。

9日 水 好太王碑楊星吾藏本石印（寰宇貞石図所載）ト雙鈎本トヲ、初拓本ニ比較。漸ク石印ノ変ナ所ガ加筆ニ係カルコト、雙鈎本ガ又大分自由ナ創作物トモ云ヘルコト、原本ハ矢張り石印ノ本デアルコトヲ憶測シ得ル。<sup>(121)</sup>

12日 土 好太王碑初拓本ヲ中心トシテ、楊氏両本等、楊氏藏拓本ノ真偽、其時代等ノ解釈ヲ漸ク明カニ致□定シ得タ（十三日□□□）。

13日 日 好太王碑。

14日 月 好太王碑。

16日 水 曇。…今日、昨日カラ開館。一般観覧ヲ許サレタ帝室博物館へ行ッテ、好太王碑最初拓本ヲ観ルツモリデ居タノガ、秀ノ外出デスッカリ宛ハズレ。気が脱ケテ、読書モセズ。

18日 金 午前十時前発、上野帝室博物館。十五日ヨリ一般観覧ヲ許可セラレタル新装成ル館内ヲ巡覧。館員ノ人ニ訊タルニ、好太王碑拓本未陳列、特別観覧モ今ノ処何時許スカ解カラス、来年ニデモナリ落付イタラトノ事デ失望シタ。然シ、開館ノ堂々タル改装、学ブ処多大。二時半、退館（三時ニ閉館、明日ハ全休、皇太后様御来館ノ爲）。

19日 土 折角考ヘテ居タ好太王碑初拓本ヲ見ルヲ得ズシテ、樂シ〔カラ〕ザルコト甚シイ。

21日 月 好太王碑、顧命ノ顧ノ左辺ノ形ヲ確認スル。

22日 火 好太王碑。

23日 水 好太王碑。

24日 木 好太王碑。

25日 金 好太王碑。

12月14日 水 池内教授、好太王碑現状考（史学雑誌<sup>(122)</sup>□□本）。

#### 昭和14年・1939年

1月8日 日 午後、京都臨川書店ヨリ、満州金石志三冊、補遺附外編及校記一冊ヲ送リ来ル。早速、満州金石志ノ高麗好太王碑ノ章ヲ読ンデ見ルト、釈文ハ古イ。寧ロ古イ我釈文ヨリ、整ッテ居ル。附スル説ノ羅叔言海東金石苑補遺説ヲ以テシテアル。海東金石苑補遺ノ説ニヨルカト思ハル、釈文<sup>(123)</sup>デアル。

10日 火 好太王碑ヲ又復看ル。

11日 水 初拓好太王碑。

12日 木 初拓好太王碑。

13日 金 初拓好太王碑、検討ヲ終ル。

18日 水 好太王碑研究読書。池内博士講義、高句麗ノ史ヲ読ミ直ス。<sup>(124)</sup>

22日 日 青江氏解以下、好太王碑読釈文ニ就キ、著シキ字ノ釈文ヲ表示シテ見ヤウト始メル。

23日 月 青江氏以下、諸釈文ノ表ヲ終ル。

30日 月 美校文庫へ、三時前着。四時五分钟前、〔香取〕秀真先生ト面会。帝室博物館蔵好太王碑初拓本特別観覧方、御高配ヲ願フ。<sup>(125)</sup>

#### 【21】昭和14年・1939年

2月10日 金 午後、香取先生（熱海東海岸観海楼樋口旅館ヨリ）書物博物館ノ好太王碑二通観覧ヲ許可、□□ヲバ通書セラル、由、御礼状ヲ出ス。

13日 月 好太王碑。

19日 日 午前九時半頃、田端。香取先生ヲ訪フ。…好太王碑拓本ノ話ヲ御礼シ直シテ、一時間半足ラズ御邪魔シ、零時十五分前…

22日 水 夜九時半、香取先生ヨリ端書、廿四日午後一時、文庫へ来テ博物館へ同道シヤウト

ノ事。同時ニ御蔵高句麗好太王碑縮本（総督府本、余蔵ト同ジ）印本ヲ速達デ送ラル。

24日 金 待チニ待ッタ博物館行き。午後零時出ル、一時美校文庫。直ニ香取先生ノ案内デ、博物館事務所二階学務課デ好太王碑ヲ拝見。拓本デハナイ摹本（雙鉤填墨）デアッタ。尚、一部ハ更〔ニ〕之ヲ摹シテ墨字ニシタモノデアッタ。驚キ、夢ノ又夢ヲ見テ居ル様。会余録本ガ完全縮写デアッタ。二時半、辞シテ帰ル（電車中<sup>(126)</sup>デ）。

3月3日 金 午前八時過発、九時半上野図書館。如蘭社話巻八ニ邨岡良弼氏「高句麗古碑」（明治廿一年）、東三省古蹟遺聞続編と丘可銘氏「…〔 〕」、朝鮮金石総覧ノ好太王碑文ヲ見。午後、遼海叢書第一集瀋故ノ高麗古碑、邢樹氏金石文字弁異ヲ見、抄出。六時退館、帰宅七時半。

4日 土 午前八時過発、上野図書館十時前。歴史地理三十二編（五号）黑板〔勝美〕博士好太王碑調査報告（講話筆記）、史学雑誌一—五編ノ内、菅政友氏ト那珂博士ノ好太王碑考〔菅政友「高句麗好太王碑銘考」『史学雑誌』24、那珂通世「高句麗古碑考」『史学雑誌』49、のち『外交繹史』岩波書店、1958年に所収〕ヲ抄。後者二冊ノ中一冊丈抄終ル。四時退館。帰宅六時。〔「補遺」欄につづく〕遼海叢書ノ瀋故ハ、前日態々臨川書店ヘ注文、…無イト云フ返事ヲ幸ニ、注文ヲ取消ス。榮禧氏釈文ノ肥造字ヲ小字ニシ、楊拓明カニ見ユル字丈大字ニシ、榮釈ヲ所々改作シ、或ハ改悪シタルモノニ過ギヌ。情無イモノ。

6日 月 朝鮮金石総覧ノ好太王碑ヲ、同ジキ釈者ト思ハル、大正七年ノト、朝鮮史釈文（満州金石志稿引ニヨル）トニ並看スルト、其間ニ自ラ変化ノ趣ヲ見ル。即チ大正七年ノ次ニ、総覧ノ釈文ヲ位置スベキデアルコトヲ知ル。

7日 火 今西氏釈文ヲ改メテ総督府釈文ト並看スルニ、矢張り那珂・三宅。

8日 水 午前八時過発、図書館十時前。史学雑誌第四編ヲ借りテ、先日ノ那珂先生高句麗古碑考ノ第二回ヲ抄、午後四時終ル。同時ニ借リタ博物館歴史部第一区列品、金石文目録大正十年十一月発行ニ拠ッテ、好太王碑ガ明治廿三年図書寮ヨリ引継トアルヲ知ル。サラバ那珂博士ノ文ハソレトシテ、矢張り彼ノ原□デアルト思ハルル理由ガアル。欲ニハ三宅博士ノ所謂博物館ノ「古碑来由」ト云フモノノ全貌ヲ見タイト思フ。<sup>(127)</sup>

20日 月 午後、臨川書店カラ瀋故四卷一冊ヲ送り来ル。<sup>(128)</sup>

21日 火 好太王碑研究ノ略目次ヲ考ヘ、鄒牟伝説考ヲ少シク舛ス。池内教授講義ニ拠リ、論衡・魏略ノ夫余建国東明□□ト、朱蒙伝説ヲ対照シテ考ヘル。之ヲ驪ニ導クノガ主眼デアルガ、未ダソコマデハ舛成ラズ。

22日 水 昨日、池内教授ノ満州諸族史ノ講義筆記二冊ヲ合綴シ、一冊トナス。先ズ善ク作ッタ方ダ。

23日 木 京都彙文堂ヘ…海東金石苑一・二——…<sup>(129)</sup>払イ込ム。

4月5日 <sup>(130)</sup>水 彙文堂カラ輯安縣郷土史<sup>(本)</sup>附外交文書各一冊、計二冊。

5月23日 <sup>(131)</sup>火

24日 水 朝鮮金石総覧上、四——<sup>(132)</sup>（窪川）。

6月5日 月 久シ振りニ、好太王碑ヲ考フ。東洋史大辞典ト漢書王<sup>(133)</sup>もう伝ノ駁、鄒ト関係アリ。句驪、開国説話ヲ夫余ニ採リ駁ニ借タノデアルト論ジテアル。或ハ白鳥…

7月6日 木 午前十一時前、京都臨川書店カラ、王志修著高句麗永樂太王碑攷ヲ郵□ノ□□ハ

レテ居ルガ、碑歌三葉、碑攷四葉ト云フ冊子。珍本デハアラウガ、四・——ハ善イ値デアル。碑ノ  
積文ハ無イ。<sup>(133)</sup>

10日 月 臨川書店ヨリ国学論叢一ノ一、二、三、二ノ一、二ヲ送リ来ル。二ノ一ニ劉節氏好  
太王碑考釈アリ。支那デノ詳論ラシイガ（今ハ見ラズ）<sup>(134)</sup>。

23日 月 劉節氏好太王碑考釈ヲ読ミ出ス。一声ノ転ヲ振り廻シテ、味噌モ屎モ一緒ニスル。  
嫌ハナカロウカ。但シ未ダ我学界ノ論ニ、□ラナカッタ着眼モアル。

27日 木 夜九時、劉節氏好太王碑考釈読了。書韻ヲ振り廻ハス。狂人ニ正宗ヲ持タセタ形。  
充分ナ朝鮮史ノ智識無クシテ、三国史記、遺事、高麗史等ヲ截リ出シテ論ヲ立テタルハ、余ノ如キ  
浅学ニ殷鑑遠カラザルヲ自省セシメル。<sup>(135)</sup>（九時二分擱筆）

8月1日 火 日露役ノ五十七聯隊長小沢徳平ト云フガ、好太王碑石ヲ買ヒタイト云フタト、輯  
安縣外交公牘四十二頁ニ見ル。面白イ（曾テ何カニ読ンダコトハアルガ、〈歴史地理大正□年十一  
月ナリ、余報欄ノ押上氏談酒匂大尉ニ□□□〉、池内教授講義田丘儉ノ記事等）。

9月26日 火 秋晴レノ二階ニ、久シ振り好太王碑初拓本ヲ摩挲ス。初發現時代ノ鈎勒廓填本  
ヲ考ヘル。博物館本ト潘氏本トノ他ニ、尚光緒十二年ニ呉清卿ノ入手シタ本ガアッタ。潘氏本ト全  
ク同紙墨トアル。池内博士論文引呉大澂氏皇華紀程ニ見ユ。<sup>(136)</sup>

10月3日 火 服部先生紀念論文集〔『服部先生古稀祝賀記念論文集』富山房、昭和11年〕、白  
鳥博士夫余始祖東明王伝説考〔夫餘國の始祖東明王の傳説に就いて〕、読了。

11日 水<sup>(137)</sup>

21日 土 朝八時発、九時神保町駿河台、岡書□東部□□拓本法帖展（清雅堂・文雅堂）。目録ニ、  
好太王碑四枚拓本ト云フヲ見テ、樂シミニ行ッテル見ルト、不思議ナモノ、皮紙（ト云フテアルガ  
□黄色ノ残生漉ノ奉紙）ニハ石ニ叩キ込レタ痕ガアルガ、重ネタ表面ノ画箋紙ニハソレガ無イ。拓  
本ノ味ガナイ。雙鈎ノ根迹モ見エタガ、拓本トハ思ヘヌ。加之、字ガ異ッテ居ル。但、一ノ二ノ爲  
我ノ我字ノ位置ガ初拓ニ同ジイ。不思議ノモノデアル。兎モ角モ、予ノ研究ニ容ルベキ価値アルモ  
ノトハ思ヒ得タノデ、買ッタツモリデ□□ノヲ止メル（文雅堂出展、予ガ觀タ直後デ買ッタ人ガアッ  
タラシク、広橋トカ札ヲ附ケテ売物棚ニ載ッテ居ル）。

24日 火 朝鮮史第一ノ一、東国李相国集ニ東明聖王歌ナルモノヲ始メテ読ム。…

## 【22】昭和15年・1940年

1月4日 木 昨夜考ヘテ居タ好太王碑研究ノ第一章ヲ艸シ始メル。

5日 金 午後、夜迄、好太王碑研究第一章、帝室博物館本。

6日 土 午前午後、前後四時間バカリ、好太王碑研究第一章潘、李、呉三氏本、及雙鈎本論。未完。

7日 日 好太王碑研究第一章第二節ヲ終ル。即、雙鈎廓填本考。<sup>(138)</sup>

3月3日 日 昨二日ト今日ト、好太王碑研究雙鈎廓填本考、刪定。

30日 土 好太王碑考ヲ続ケヤウト、久シ振り総督府本石印ヲ掲ゲテ始メタ処へ、家兄カラ書  
留速達便。…

4月2日 火 身ヲ入レテ好太王碑研究続稿、但尚雙鈎廓填本ノ博物館本論改稿、漸ク終ル。

20日 土 好太王碑研究拓本ノ節。<sup>(139)</sup>

5月4・5日 好太王碑拓本ノ項、仲々不進。

11日 土 田端ノ香取秀真先生ヲ訪フ。…拝借中ノ朝鮮総督府蔵好太王碑石印本ヲ返シ、会余録第五集好太王碑博物館本縮印本ヲ拝呈。…

6月19日 月 本郷琳浪閣〔ニ〕寄り、金曜日着ノ目録ニ見ル好太王碑拓本ヲ見ヤウト思ッタガ、既售。

7月1日 月 香取先生ヨリ御手紙、昭和三年二月考古学雑誌、池内博士「満州国安東省<sup>〔輯安県〕</sup>□□□に於ける高句麗遺蹟」ノ一篇ヲ視セラル。早速拝読シ、好太王碑ニ就テハ史学雑誌昭和十二年一月号所掲ノ「由来」〔「広開土王碑発見の由来と碑石の現状」『史学雑誌』49ノ1、13年1月〕ノ詳ナルヲ約説シタルモノニ過ギズ。然シ先生ノ御厚志ニ欽戴スル。

18日 木 …。遼東文献徴略ヲ見ル。<sup>(140)</sup>

11月22日 金 向島高女。帰途、琳浪閣。昨日郵送ノ目録ニ見タ好太王碑十二冊製ノモノヲ見セテ貰ッタ。蔵本ニ同ジ古サノモノと思ヒツ、モ、拓法大分粗、紙モ（画箋デナク、二重デナク）、墨モ（美色デナク、濃クハアルガ粒子疏ナ感じ）違フ。精密ニ見ルト、或ハ蔵本ヲ補フニ足ルカモ知レヌガ（朝鮮式拓法デハナク空白モ蔵本以上ニ保存サレテ居ルガ）、例ヘバ二面四行ノ初数字ノ如キ、拓セラレタニハ拓セラレタガ、殆ド字形ハ見ヌ程度デアル。六五——ト云フ価モ美ケレバ、借りテデモト思ッテ見ニ行ッタガ、先ズ用無シ。唯、一面二行三十三ノ我字ノ辛ジテ蔵本ト同形ナルヲ認め得タルヲ、一近似□ヲ与ヘラレタルト見テ、御免ス。<sup>(141)</sup>

## 【23】昭和16年・1941年

4月26日 土 上野松坂屋古書展ノ盛大ナルヲ見ル。四時間余リ。…帰宅五時前。直ニ眼福ノ念頭ニ残ルヲ調べル。好太王碑。琳浪閣ノハ囊ニ見セテ貰ッタモノ、拓ハ蔵本ニ比シテ悪イガ、字ハ出沒アリ、中々美イ。我字未改本デアル。難シイニハ難シイガ。<sup>(142)</sup>

9月20日 土 六時夕食。出テ、序ニ文雅堂。…羅真玉氏増訂碑別字ヲ買フ、八——。<sup>〔振〕</sup>

28日 日 碑別字ヲ見テ大分好太王碑考ニ及ビ、少シク多度寺資財帳註証に増益スルヲ得、尚終ラズ。<sup>(143)</sup>

10月4日 土 碑別字ヲ見テ居ルガ、五時前、一応終ル。好太王碑考ノ釈文資スル所ハ多カッタガ、是ト云フ収穫ハ無イ。戒ノ戒ナルベキヲ見得タ丈。多度寺資財帳註証ニハ、前ニ欠ケタ□朝防□ノ異字ヲ見ルヲ得テ、資スル所多シ。…

## 【24】昭和16～17年・1941～42年

### 昭和16年・1941年（続）

12月8日 月 午前六時半、天気予報（ラジオ）ヲ放送セズ。変ダ思フ中、七時時報ノ後、臨時ニュース、「大本営陸海軍部、午前六時発表、帝国陸海軍、米英ト西太平洋ニ於テ交戦状態ニ入レリ」ト。七時半発。向島高女、平常通り授業。帰宅四時半。

29日 月 …。好太王碑ヲ目録シラベタガ、文雅堂出陳ハ售レタ由、余リ古拓デハナカッタト。尚、□□デ古イ拓本ヲ見タ。但シ、二面丈ダッタ。新拓本ニ比ベテ、字ヲ多ク見タト、文雅堂氏ノ談。買ッタモノカ。



## 昭和17年・1942年

1月19日 月 七時半発。向島高女。帰途、文雅堂デ…旧拓好太王碑三版、八〇——（以上、皆、有正書局石印デ…、好太王碑ハ五版ヲ□□□レテ居ルガ、今一部ヲ欲シタノデアル）ヲ買フ。帰宅五時。

4月8日 水 午前十一時四十分、大日本史氏族志ヲ読了ヘタ。精カナモノ。中ニ武断服シ難キモノ（例ヘバ、高句麗好台王。好台ナド切角ノ文ヲ、東国通鑑ニヨツテ誤トシタ松下見林ノ説ニ拠リテカ、次大王遂成ト定メタ如キ）、初学者デモ今ハ見附ケラレルモノモアルガ、博広ナ学識ニアラザレバ、如何ニシテカ、ル書ガ出来ヤウ。…

## 【25】昭和17～18年・1942～43年

### 昭和17年・1942年（続）

12月8日 火 宣戦大詔奉戴一周年ノ日。ラジオ、朝来種々ノ放送ヲヤツテ居ル。…池内博士「満州〔国安東省〕輯安縣高句麗遺蹟」ヲ□□□（国内城・丸都城問題ニ就キ忘レタノデ）<sup>(144)</sup>。

## 昭和18年・1943年

正月8日 金 …、西北科学考查団叢刊之考古学第一輯高昌第一分本一・五〇デ買フ（総督府本好太王碑□□ト同ジ）。

3月29日 月 本郷弓町文雅堂書店、一昨ト昨兩日、見セルト案内ヲ受ケタ新獲拓本ヲ見セテ貰ツタ。目的ノ好太王碑ハ、藏本ノ襯紙ニシテアル紙ト同質ト思フ。即チ黄味ガカッタ紙一重ヲ拓シタモノ、藏本ヨリ模糊トシテ居ル感ジ。字ノ見ニクイ第一面ノ下部（一面ヲ上中下三枚ニ截ッテアルノダ、全十二枚トナル訳）ニ、爲我連葭ノ我字ヲ注意シタガ、全ク藏本ト同ジキヲ看得ル（写真□□並看シタ）。見ニクイノガ古イ證拠デハアルガ、見ニク過ギル。墨ヲ全部ニ用ヒタ点、支那人ノ拓ニハ違ナカラウガ、藏本ト如何比較シタラト思フ。主人不在デ、話ヲ聞ケズ。<sup>(145)</sup>

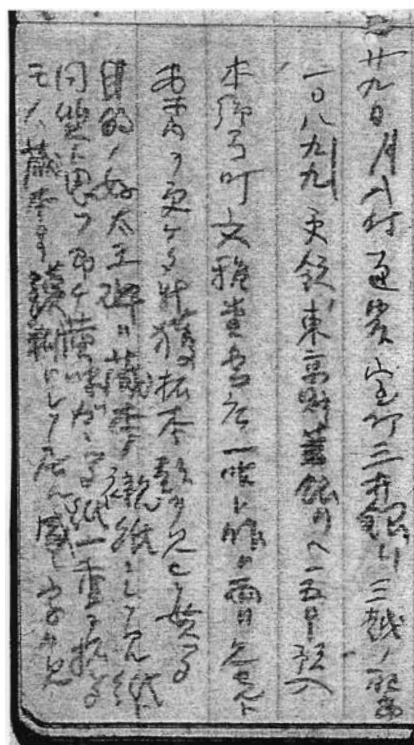


図3 水谷原石拓本との出会い  
昭和18年3月29日

## 【26】昭和18～20年・1943～45年<sup>(146)</sup>

### 昭和18年・1943年

12月2日 木 …『□□国史』…

5日 日 …『東洋学の話』…『東方…』…

6日 月 …『大正新修大藏經』…『倭名類集抄』…<sup>(147)</sup>

13日 月 …『万葉集大辞典』…

16日 木 …福山敏男博士論文集『日本建築史の研究』…

22日 水 香取秀真先生続金工史談〈十八年三月□書房刊〉ヲ買フ。

---

23日 木 …『大日本古文書』…  
 24日 金 …『<sup>〔梵〕</sup>ぼん語雑名』…  
 28日 火 続金工史談  
 30日 木 …『論衡』…『古書字義用法叢刊』…『大正新修大藏經』…  
 31日 金 …『浄土宗□典』…

# 昭和19年・1944年

正月6日 木 朝九時前、続金工史談ヲ読了。  
 8日 土 此二三日、朝床中デ考テタ好太王碑考補充ノ筆ヲ加ヘカケル。  
 10日 月 …『教訓抄』下…  
 15日 土 …『法苑珠林』…  
 27日 木 …『風俗通』…『顔氏家訓』…  
 29日 土 …『梵語千字文索引』…『悉曇阿弥陀經』…『梵語字典』…  
 30日 日 …『浄土三部經』…  
 2月7日 月 …『兵泉茶話』…『万年山横川景岳語解』…『続浄土宗全書』<sup>(147)</sup>…  
 16日 水 …『国史大辞典』四…  
 21日 月 …『日本国見在書目録』…  
 23日 水 …『三太神宮法救事記』…『四神宮雜例集（神風鈔）』…『如来院年代記』…『水戸義公□□□□拓本』…  
 24日 木 …『西大寺資財帳注□□』…  
 26日 土 …『中朝事實』…吉川観方画伯著『浮世絵の顔』…  
 29日 火 …田中重久『日本に遺る印度系文物の研究』…  
 3月1日 水 …『日本仮面史』…『日本蔵書印考』…『近歳上代文化叢考』…『通説日本上代史』…『日本文化史要』…『広重五十三次桑名□□□□』…  
 4日 土 …今井彦五郎『小渦集』…『来馬琢道師蘇浙見学録』…『タイムス』…  
 10日 金 …羅振玉『碑別字拾遺』…羅福保『碑別字統拾』…『海東金石苑』…  
 15日 水 …高倉正三『蘇州日記』…『慈雲尊者全集』…訳本『東西交渉史』…  
 16日 木 …林屋友次郎『異譯經類の研究』…『類聚国史』前篇…  
 17日 金 …『類聚国史』後篇…『佐伯□法師家法七条』…  
 28日 火 …高田真治『支那哲学概説』…末永真海『印度仏教史略』…入江美法『能面検討』…藤井達吉『美術工芸の手帳』…吉沢義則・宮田和一『近松世話物十種選』…  
 4月4日 火 …立見家蔵『寺院由緒書』…『浮世絵類考』…  
 5日 水 …『文筆眼心抄釈文』…『世界美術全集』二・四・五・六…  
 10日 月 …加藤繁『支那經濟史概説』…国史体系<sup>〔大〕</sup>『続日本紀』『日本後紀』『続後紀』『文徳実録』…花山信勝『憲法十七条の精神』…『世界美術全集』八…  
 13日 木 …姉崎〔正治〕『根本仏教』…青木正児『江南春』…  
 14日 金 …木津無庵『講纂維摩經』…

---

- 
- 27日 木 …今井鯉山〔彦三郎〕『神楽催馬楽通釈』…藤波吉宏・金子堅太郎『明治天皇の御事績と帝国憲法の制定』…『梵文入楞伽經』…二木謙三『なぜ玄米でなければならぬか』
- 28日 金 …川勝政太郎『梵字講話』…
- 29日 土 …『源氏物語の音楽』…
- 5月16日 火 …長井真琴『仏教と人生』…服部担風『養病詩紀』…『斯文』三号…『国学院雑誌』百号…
- 22日 月 …常盤大定『支那仏教史蹟踏査記』…
- 29日 月 …根本文三郎『仏典の研究』…『天来翁書話』…西川寧『支那の書道』…京大考古学研究報告『大和唐古弥生式遺蹟の研究』…
- 6月1日 木 …近角常観『信仰問題』…
- 15日 木 …木島謙吉『□□苑一夕語』…
- 16日 金 …森銑三『近世人物叢談』…
- 24日 土 …森槐南『作詩法講話』…『校刻日本外史』…
- 25日 日 …佐藤誠実『修訂日本教育史』…森銑三『古書新説』…
- 28日 水 …暁鳥敏『清沢満の文と人』…
- 7月3日 月 …下店静市『唐絵と大和絵』…吉川延太郎『註解出定後語』…
- 9日 日 …沼畑金四郎『家庭燃料の科学』…
- 13日 木 …下店静市『東洋画の見方と技法』…
- 8月1日 水 …『支那歴史研究法』…
- 4日 金 …『支那及び支那への道』…
- 16日 水 …内藤湖南『支那上古史』…
- 20日 日 …武内義雄『儒教の精神』…
- 24日 木 好太王碑初拓本ヲ疎開サセル為ニ、釈文ヲ□センカト考ヘ、及研究ノ論文ヲ書キ上ゲタク着手スル。久シ振りダ。<sup>(148)</sup>□□□デ考ヘ始メル。
- 26日 土 初拓好太王碑拓本ヲ久シ振り、出シテ見ル。
- 28日 月 初拓好太王碑ノ函ノ戸蓋ニ、初拓好太王碑或ハ句麗古碑ノ字ヲ刻シタク、拓本ニ就キ集字鈎摸シテ見ル。四字ノ方ガ形ガ善サ、ウダガ、マダ定メズ。
- 9月1日 金 隸篇ヲ頭カラ一見シ始メル。獲ル所ハ有ツタニハ相違ナイガ、□破四海覆□破使迴城ノ難字ヲ解ク鍵ハ獲ラレナカッタ。尤モ前出ハ西升ニ从フカ。裏ニモ似ル形ガアルシ、或ハ庶(遷就山陵ノ遷ニ似テ居ル)ニ从フカナドノ疑ハ生ジルガ、文意ノ方デ通ゼヌ。或ハ方言等カラ解シ得ザルカト、昨夜カラ考ヘテ居ルガ、未ダ詳ニ考ヘヌ。□破の破ハ卅日ニ獲タ所デアルガ、<sup>(149)</sup>塙信スル新獲ダ。此破字ニ依リ、其上モ読メサウナモノダガ残念。
- 7日 木 …『隸釈』…
- 12日 火 …『隸釈』…『書道全集』三…『大谷探検隊所獲木簡』ニ「方布八十四匹」…<sup>(異体字)</sup>
- 13日 水 …『書道全集』三…漢晋遺簡ニ匹匹ガ数例見エル。…<sup>(異体字)</sup>
- 14日 木 …『漢晋遺簡』…『書道全集』三…『隸釈』…
- 16日 土 …『隸釈』…
-



---

9日 火 香取先生七〇〇〇状一首。<sup>(153)</sup>

## 【27】昭和20～22年・1945～47年

### 昭和20年・1945年

4月13日 金 明治神宮本殿拝殿、百何十発焼夷弾ヲ受ケテ御焼失ト承ハル。米鬼ノネラヒガ解カル。又宮城内大宮御所ニモ投弾、言語道断。<sup>(154)</sup>

30日 月 一月以上カ、ッテ、漸ク好太王碑字ノ研究ヲ卒業シタ。今日ハ唯二項ダケ。<sup>(155)</sup>

5月1日 火 好太王碑字ノ研究ヲ綴装シテ冊子ヲ作ッタ。目次ヲ作り、綴ジ込ム。ガツカリシタ感じ。尚、一ノ四ノ廿三業字説ヲ補ッタ（貼り付ケ）。

13日 日 好太王碑研究第一章墨本の総説、先ツ考ヘタ丈を書き終ヘタ。目次ヲ作り終ッタ。

14日 月 好太王碑釈文ヲ一寸清書シテ、第一章ノ頭ニ附セントス。第一章目次ヲ終フ。

15日 火 午前七時半、数ケ月振りデ東京ヘ出ル。水道橋駅カラ弓町ノ戦災ヲ弔ヒ、真砂町文雅堂病（一月カラ四月末マデ病シタ）後ノ主人ニ請フテ、好太王古拓本ヲ見ル。正ニ最初拓本間違無シ。鬼神呵護ヲ得タルモノダ。（文雅堂周囲数戸遺ッタ丈デ、皆燬ケテ了ッタ。）生命ヲ延バシテ研究ヲ完成シタイ。一旦帰宅。目黒東貯デ五百圓受領。一時半又出テ、三時半文雅堂。四百圓ヲ内金トシテ宝物ヲ獲、五時半迄帰宅。（十六〔日午〕前十時記ス、拓本東一ヲ掲ゲタ前ニ椅子ニカケテ。）<sup>(156)</sup>

16日 水 古拓ト精拓ト（新獲本ト「初拓」本トヲカウ呼バント考ヘ中デアル）並看、大抵同ジ。拓粗ト精ト、泐痕多ト少ト、大ニ違フガ。加工ヲ今カラ窮明セントス。（午前十時）<sup>(157)</sup>

17日 木 午後四時前、斎藤琳琅閣主人、若主人兩人来訪、書物ヲ賣ル。何カラ記ス暇モ無イ。出シタ丈、何圓カモ一寸見ズ。五〇〇圓ト云フカラト丈。惜シイコトハ惜シイガ、小学書ヲ遺ス。雷雨デ六時半過ぎ迄、雨宿リシテ返ラル。書物、大部分置イテ行ッタガ、見ルト惜シイノデ、何ヲ置イテ行ッタカモ見ズ。午前、東一ヲ見終ル。警報デ中絶。午後、東二ヲ見始タリ。<sup>(158)</sup>

24日 木 午前一時過、久シ振り（四月十六日カラ始メテ）夜間空襲。B 29、無差別焼夷弾攻撃。初期ノ一機ノ投弾ニ、北ノ街道北側合宿発火。カナリ大キイ二階建デアル為、長時間燃エ目標ニナッタ。…三時半頃マデニ、大岡山西町会七十一戸、大岡山東町会南三分ノ一位駅マデ、大岡山国民学校モ有為ニ帰ス。焼夷弾収束。坂本・春日井両家ニ計三個落下シタルニカカワラズ、第十八組人物異常無シ。午後五時、洗足ヲ見舞フ。近火ダガ、異常無シ。午後四時、琳琅閣若主人来訪、書物一部ヲ携帰。夜九時、吉夫、渋谷マデ電〔車〕アリ、ソレカラ歩イテ帰宅。火災ヲ望見シテ、見に来タノデアル。廿五日朝出勤。…廿五日モ電気来ズ。

25日 金 午前十一時半、琳琅閣若主人来リ、書物全部持ち返ッタ。スツスル。午後十時、又B 29 焼夷弾攻撃ヲ始ム。

26日 土 午前一時半、B 公来襲。カナリ身近ク弾落下音ヲ聞イタガ、近処ニハ発火セザリシ様子ダ。南西ニ異常無ク、東ヨリ北西ヘ数ケ処、大火災雲ニ映エテ、久シク戸外ヲ明カニス。午後、大井線ニ沿ッテ、南品川・青物横丁・…、始メテ中延・大井間ノ大残骸ヲ見テ感<sup>(159)</sup>

27日 日 緑廿六、廿七日休ミ。然ルニ、午後、土井嬢、目黒ヘノ用事デ工場ヲ訪ネ、本社タル職場工場、廿六日焼失を見、告ゲラル。



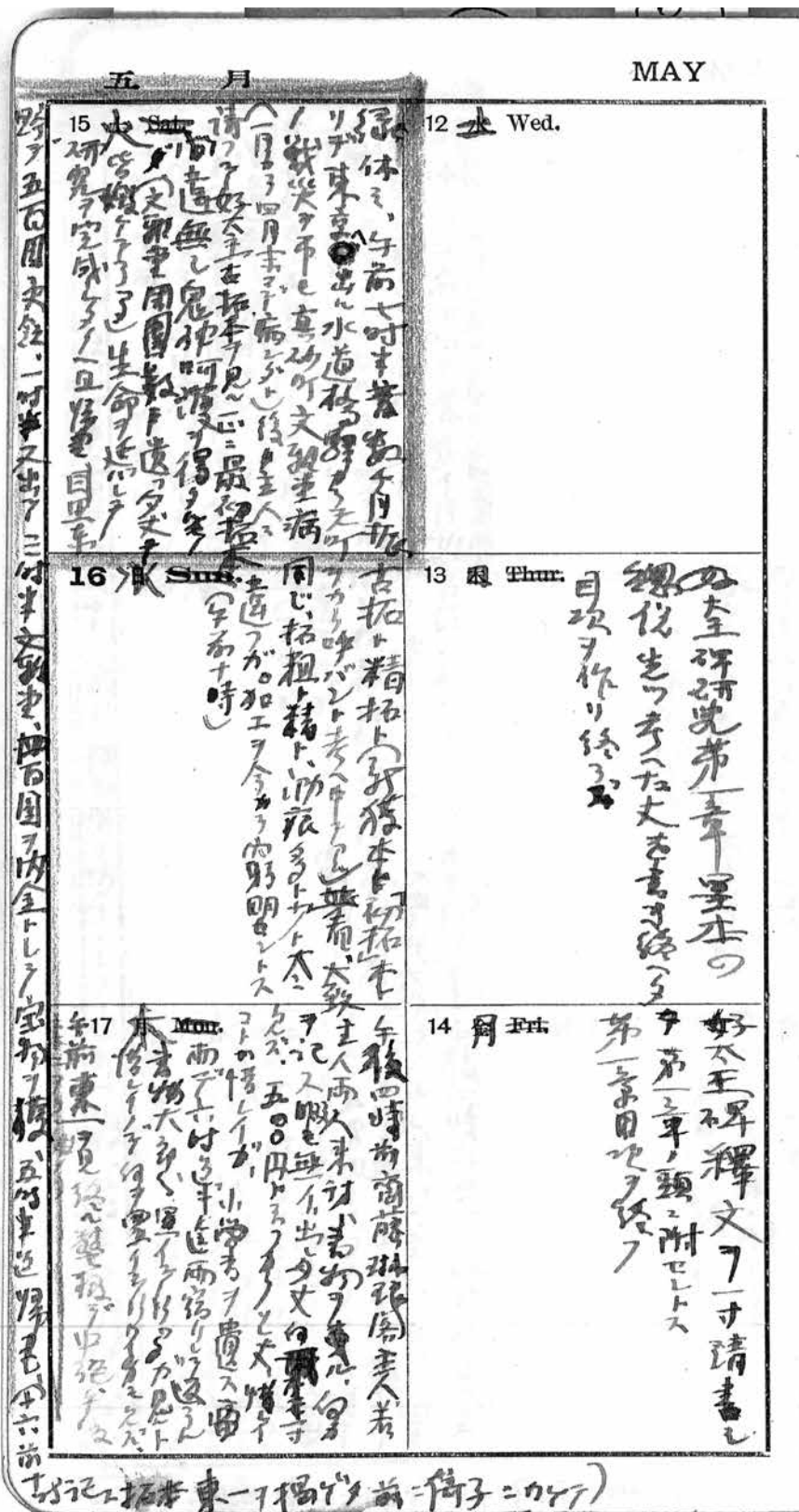


図4 水谷原石拓本を入手 昭和20年5月15日

- 28日 月 午前十時発。…恰モ敵小型機来襲、…
- 29日 火 午前、横浜・川崎・品川B 29 五百、PS-1 百、最初ノ大ガカリノ空襲。
- 30日 水 平和ナ初夏ノ日指ニ、戦災地ヲ忘レテ、好太王古拓本ヲ審観スル。<sup>(160)</sup>
- 6月3日 日 疲労カ、入浴ノ変調カ、頭ガクラクラ。…余、朝八時散髪髭剃リ。古拓好太王碑第三面下部ヲ張懸シテ、下ニ仰臥。欧陽率更ヲ気取ル訳デハナシ。
- 4日 月 …十時三十分、本郷弓町文雅堂。好太王碑ノ事、新シイ話モ無シ。唯、満洲デ見タ好太王碑、二両カ三両カノ拓本ノ古いノガアッタ筈ト云フ。見セテ貰様ニ依頼。午後、帝大正門前琳琅閣新店舗、禹域出土墨宝…。
- 17日 日 好太王碑墨本ノ総説ヲ改メ訂セントシテ案ヲ練ル、未下筆。幸ニ下痢止マル。
- 19日 火 好太王碑はしがきの短章ヲ起稿。久シク考ヘテ居タラ、□□六刻カラ。
- 24日 日 沖縄本島軍指揮官牛島満中將ノ部隊ニ、六月十九日附南西方面軍司令官カラ感状発表。
- 8月14日 火 …九時ノ放送ニ、十五日正午重大放送アルベキ…。
- 15日 水 正午放送、玉音ヲ聴ク。四箇国宣言ヲ受諾スト。国体ハ護持シ得ル故、原子爆弾ノ恐れニ赤子ヲ暴スニ忍ビズ、ト宣タノデアッタ。<sup>(161)</sup> 次ニ内閣告諭、…
- 10月9日 火 此間カラ田中重久氏、聖徳太子御聖蹟の研究ヲ読ミ続ケル。腹ガ減ッテ、ツイ食事バカリガ苦ニナル。何ダカー日ノ大半ヲ食事関係ノ用事ニ費ス様ナ調子デ、読書ノ能率挙ラズ。且ツ台風々々ト追掛ケ々々、西南太平洋カラ（先月マデノB公ノ如クニ、B公ニ替ハツテ云ベキカ）風雨が来襲シテ、尤モ強イノハ広島附近ト云カ、他ノ各地方モソレゾレ豪雨暴風ノ禍ヲ蒙ッテ、米ハ五千万石台ヲ割ルダロウト云シ、…。<sup>(162)</sup>

## 昭和21年・1946年

- 7月17日 水 三四日、夜中ニ目ヲ覚マスト、不図好太王碑ノ釈文ノ事ヲ思ヒ浮ブ。殊ニ履龍負昇天ノ負トシテ居ル字ヲ何トカ、例ヘバ背ト見得タラ文義ガ通ジルト考ヘテ居タ。
- 18日 木 朝、精拓本ヲ見ルト、明カニ首ノ上ノ二点ヲ認メ得ル。勇躍シテ、久シ振リニ原石面拓本ヲ畳ノ上ニ拡ゲテ見ルト、精拓本ト全ク同ジデ、マガフ方モ無イ。先ヅ解決シタ事デ、喜ビ禁ズル能ハズ。浩君ニ対シテ好太王碑ノ話ヲシ、粘蟬碑ヲ展覽シナド、大イニ気焰ヲ上ゲタコトデアル。尚、銘文ノ首行ノ碑麗ノ碑ト見タ字、原石面拓本デハ石旁ノ形ヲ見ズ、禾旁ダト見エル。直ニ思ヒ起スノハ、榮禧氏釈文ハタシカ稞ニ作ツタカト悟エルコト（不確ダガ）。卑旁ハ拓本確カデアルガ、禾旁ガ榮禧氏ノ真拓本、而モ原石面拓本ニ拠ルコトヲ証明スルモノト考ヘラレルノデアル。<sup>(163)</sup>
- 十九日午前十時十五分前、三宅博士ノ碑考追加ニ、稗ニ作ルヲ見ル。<sup>(164)</sup>
- 19日 金 十七日考ヘタ好太王碑ノ首字ヲ稿本ニ訂ス、一の七の十一。碑麗ト読ンデ居タ字、一昨日ハ原石拓本ニヨルニ、禾旁ナルコト明カダツタガ、今朝、三宅博士ノ追考ニ稗ニ作ルヲ見ル。<sup>(164)</sup> 愈博士所拠本ノ古拓ナルコトヲ確認スル。
- 29日 月 ○昨廿八日、思ヒ附イテ広武將軍碑ヲ展ベテ審査。好太王碑字参考ニ、二三ノ所獲ガアッタ。
- 8月5日 月 ○午前中カラ好太王碑古拓本第一面ノ中部ヲ観ル。午後四時前、一の十の廿二關

ヲ観得タ。愉快。

7日 水 ○連日、原石好太王碑拓本ヲ掛ケ、睨メクラヲシテ居ルガ、五日の発見以来、新シイ獲所無シ。疲レル丈ダガ、楽有其中矣。

12日 月 午前中カラ、□□ノ岳翁病床ノ側ニ半日ヲ座ッテ拓本ヲ見セテ貰ヒ、香取先生ノ著書ヲ拝見スル。

13日 火 ○坪井良平氏（梵鐘研究家）子息（京大専科生）来訪。岳翁ト談ジ、宿泊サレタ。

28日 水 ○久シ振りニ危ナ氣ノ無イ天氣ナノデ、好太王碑古拓本一面ノ第三面ヲ懸ケテ考ヘタガ、頭ガ痛クナッタ丈デ、獲物無。

9月9日 月 昨日一日睨暮シタ好太王碑古拓本三面下部ノヲモウ一日懸ケテ、第二行ノ第十三字ヲ第卅六字ニ比較シテ、寐ト審定シ得タ。午後二時頃ニナツタラ、ウ卅六ヲ寐ト認メ、龍龕手鑑ウ部寐、穴部寐ノ形ヲ検出シタノデ断定シタノデアアル。更ニ十日朝五時、碑別字去聲□顔ニ寐形ヲ見テ、愈々判明シタト思フ。南淵書ノ□□ガ又一例、新羅ノ智証大師塔銘ノ序文ノ寐錦ガ傍証（十日前九時）。東洋学報十五ノ二、前間恭作氏論文〔「若木石塔記の解説」〕ニ nim-kūn 説ヲ見ル。<sup>(165)</sup>

## 【28】昭和22～25年、附26年・1947～50年

### 昭和22年・1947年

2月2日 <sup>(166)</sup>日

28日 金 本郷弓町江田文雅堂会談。<sup>(167)</sup>

3月3日 月 …文雅堂…

4日 火 …文雅堂…

7日 金 文雅堂へ行キ、持参ノ粘蝉碑考抜刷ヲ呈ス。増補寰宇貞石図ヲ見セテ貰フ。好太王碑ガ楊印本ノ複写デアアルコトヲ認メル。原拓本ガ奉天カラ買テクルノガ昭和十七年ダッタ云フ（曾テ北京デ買ッタト話サレタノハ記憶違ヒカ）。帰宅七時前。<sup>(168)</sup>

10日 月 …文雅堂…

4月14日 月 …文雅堂…

20日 日 …文雅堂…

5月7日 水 好太王碑研究ニ手ヲ入レル。

8月10日 日 午前十時半発、本郷文雅堂。…永楽大王墓碑欄言油印本ノ邦人ノ版カ、彼土ノカ。鑑識ヲ求メタラ、江田氏ハ彼土ノダト云フ。

24日 日 …香取先生…

10月18日 土 ○十五日十六日、天氣乾燥ヲ感ジタ。久シ振りニ、夜、又好太王拓本ヲ懸ケテ調査、兩日デ第一面三枚。十七日ハ雨、十八日ハ買物デ出サズ。十七日ハ此頃、宵ノ燈下ニ読ミ続ケテ居ル、国語集解□□□見ル、晋文公ノ流浪物語ガ面白ク読メル。…十八日ハ楊鈞本ヲ見ル。<sup>(169)</sup>

27日 月 …香取先生…

28日 火 （○卅日午後二時四十五分、好太王碑第三面上截原拓本ノ下ニ座ッテ、□□□□ツケル）<sup>(170)</sup>

11月18日 火 …文雅堂…海東金石苑並補遺…獲得。

---

昭和23年・1948年

正月28日 水 曩ニ唐高祖李淵ノ祖先魏ノ幢主ダッタト、東洋史大辞典ニ読ム。〔資治〕通鑑ノ東西魏ノ辺カラ隋初迄ヲ読ンダ。ソレヲ又遡ッテ、西晋ノ初カラ読ンデ来ルガ、昨今遂ニ魏ノ分裂ヲ過ギタ。是デ止メルコトニシテ、更ニ曹魏ニ戻ッテ読ムカ、将三国志ヲ見ヤウカト考ヘテ居ル。(正午) 晋カラ梁漢カラ跼跋魏ノ間ニ、好太王碑文ノ證タルモノチョイチョイ見当ッタガ、ドウモ物足ラス。晋書魏書ヲ見タラ、尚有ロウカ。

2月4日 水 通鑑魏紀ヲ読ミ終リ、奴客ノ字ヲ見タノガ見附モノ。

5日 木 三国志ヲ読ミ続ケタ(或ハ四日五日カ、五日六日デアッタカモ知<sup>(171)</sup>レヌ。)

3月5日 金 魏志ヲ読ミ進ミ、廿九卷の末尾ニ近ク管輅傳注中ニ、女郎ノ字ヲ発見ス。恰モ好太王碑ノ用例ニ適合シテ、怪シキ点毫モ無イ。多分見付カルト半ハ確信モテ三国志ヲ読ミ始メタノデア<sup>(172)</sup>ルガ、見付カッテ見ルト上手ク出テ来ルモノト思フ。六日ニ魏志ヲ終テ、蜀志ニ入ル(七日午後四時前記)。

11日 木 蜀志ヲ読ミ了ヘ、呉志ニ進ム。

21日 日 夕六時半、呉志ヲ読ミ了ヘル。

4月1日 木 …香取先生…

3日 土 終日雨デ、春夫兩人坐ッテ休息。午後、好太王原石拓本第一面第一截ヲ掛ケテ、ゴトゴト説明シテ見タガ、恐ラク善ク解ッテハ呉レマイ。解ラセルコトノ六ツカシサヲ知<sup>(172)</sup>ル。

5月25日 火 ○午後二時、後漢書第一一巻(第十一冊)ヲ終ル。…

26日 水 ○後漢書一覽後ノ虚脱状態。書道全集晋唐法帖、十七帖ヲ見ル。

28日 金 ○八時半過発。上野博物館事務所、特別観覧ヲ申込ンダガ、書籍係ノ堀江氏ト云フガ生憎欠勤デ、所蔵所ガ判ラヌカラ駄目ト云フ。明日ニデモ又来テ呉レト云フ。不服ダガ返ル。

29日 土 朝八時過、緑ト同道発。上野〔着〕。緑、博物館観覧。余、事務所。昨日ノ庶務係ノ大塚氏モ伴ハル。本館階下南側ノ書籍ノ係堀江氏ニ会ヒ、好太王碑ガ資料課ニ帰属シテ居ルコトガ判明。堀江氏案内サレ、本ノ事務所□上ノ資料係辻本氏ニ紹介サレテ、幸ニ特別観覧ヲ肯ゼラレ、同課ノ室ノ目録書ダラウ□ノ上デ開イテ見セテ貰ッタ。一面末「八那」二字、二面「出」「新」両字、四面上四字、及末行末字「之」ノ錯簡、「後」字重複等ノ読点ヲ落着カズ。匆々調査、先ズ終ル。十二時二十分前頃ダッタ。庶務課デ料金30円納付。十二時過出ル。三時、〔東大〕法文系36番教室デ史学会講演ヲ聴ク。駒井〔和愛〕助教授ノ“曲阜ト易水”速クテ聴ケヌ。森克巳助教授ノ“日本古代貿易ノ展開”ヲ、途中カラ聴ク。頭ガ好太王碑ニ占領サレテ、耳カラ耳ヘ脱ケル。此日記ヲ書クノデ、益々空聴ニナル。四時迄終ッタノダロウ、水道橋カラ帰宅、六時五分。疲レルガ、心ハ昂<sup>(173)</sup>ブル。

6月14日 月 好太王碑研究墨本ノ研究一部訂正、良カッタ。午前終ル。

29日 火 此間カラ幾日カ、ルカ、池内〔宏〕・黑板〔勝美〕・今西〔龍〕諸氏ノ輯安好太王碑實査報告ノ合編記録ヲ作ッテ居ルノヲ昨日纏メ、今日一寸清書シテ見ル。終了ス。

7月3日 土 好太王碑文研究序説・結論、先日来草稿書キ終リ、墨本研究ノ始、雙鈎郭填本ノ章、国立博物館本ノ冒頭(ニ青江氏附言ヲ引ク)ヲ書キ、綴ジ変ヘタ□□□言二頁、墨本研究一頁ヲ冊尾ニ綴ジ込ンデ、古形ヲ存ス(引文モ見タイカラ<sup>(174)</sup>)。

---



8月1日 日 好太王碑文研究序説・第一章・結論ヲ半紙ニ墨書終ル。なをニ貫ッタ亡母堂ノ習字用紙ヲモテ原稿七葉ヲ廿枚ニ書ク。以後連日書繼グ。(五日朝)<sup>(175)</sup>

5日 木<sup>(176)</sup>

11日 水 好太王碑文研究続稿、今日二枚ヲ写シテ、序説ヲ終ッタ。正二十日間ヲ費ヤス。廿行二十字原稿用紙ヲ下敷ニシテ、163葉ニナッタ。頁モ打タズ、見出シモ未ダシ、中々ダ。<sup>(177)</sup>

12日 木 好太王碑文研究序説、頁ヲ打ツ。

13日 金 ○好太王碑文研究序説・目録ヲ書キ、綴装。ソレダケノ仕事デ□□…

16日 月 夜、序説ヲ書キ終リ、十三日目次ヲ書キ綴ゲルガ、次ノ碑文研究本論ニハ、着手セズ。河伯・黄龍ノ支那思想導入論ヲ考ヘテ居ルノデ。(十七前十時)<sup>(178)</sup>

9月1日 水 中川母堂遺サレタ習字用半紙ヲ貫ッテ、好太王碑文研究ヲ書キ来ッタガ、序説カラノ紙ガ本論83枚デ無クナリ、第二種ノ幅(半葉ニスルト高サ)ニ分レタノヲ使フ。不揃ヒデアルノデ、緑ガ替エテ貫ッテ来ルトテ、残り百数十枚ヲ一昨日持□、20枚バカリヲ残シ昨日書キ、今日ハ厚ガ習字ニ持ッテ居タ同種ノヲ貫ッテ書キ、今11枚ヲ終ル。第三面第一行末潰字ノ論デ終ル。午後五時三十五分デアッタ。順ガ返ラヌノデ、仕事ガ中絶。果シテ貫ッテ来テ呉レルカ否ヤ気ニカ、ル(五時五十五分記畢ル)。

2日 木 紙無シデ、筆握レズ。…○夕七時過、順帰宅。○紙ヲ貫ッテ来テ呉レル。

8日 水 ○夕六時半、碑字研究ヲ録シ終ル。第二章ヲ碑文研究ト云フハ変ダシ、如何セウ。第一章、210葉ト<sup>(179)</sup>2行。

9日 木 睡眠不足カ、頭ガ痛イ。臥テ竹書紀年ヲ窺キカケテ閉口シ、ウトウト。

10日 金 碑文研究第二章碑辞研究(未定)ノ目ヲ整ヘテ終リ。

11日 土 碑辞研究二葉ト十四行。一寸調子ガ狂ッテ変ダ。返□□…

15日 水 午後二時過、碑辞研究之字ヲ終ル。大分予定ヲ省イタノデ、碑辞考ハ22章ニ止マル。字研究ノ<sup>(180)</sup>1/10ダ。

17日 金 好太王碑文研究、碑字・碑辞ヲ後カラ修正シテ、グツタリシテ居ル。昨日先ヅ目録ノ草ヲ作り、今日遂ニ写□字270項、辞17項、目三枚。夕方、表紙ヲ附ケテ綴ヂ、六時前出来上ッタ。遅イ完成。六時廿五分記。八月一日序説ヲ始メ十日ニ終リ、十九日本論ヲ始メテ十五日ニ終リ、書直シテ居ルノデ、今漸ク終ッタ<sup>(181)</sup>訳。

10月11日 日 晴天。昨日迄カカッタ碑字及證例臨摹40葉ノ目ヲ作り、綴ジテ冊子ヲ作ル。後ハ釈文ダケダ。如何ニセウ。

16日 土 午前、好太王碑文釈文ヲ浄書終ル。三日バカリ一通ヅ、書イテハ書誤リ、清書ガ中止シテ居タガ、始メテ一通出来タノダ。午後、碑文研究冊尾ニ貼ル。是レデ完成シタコトニナル。<sup>(182)</sup>

25日 月 好太王碑字及證例臨摹ノ序例ヲ作り書ク。其□ハ□ニ作ッテ置イタ積。拓本ノ写真ヲ截ッテ、臨摹ニ貼り入レタ。實ハ最初カラ之ヲ用ヒレバ、善カッタノダガ、今朝不図考ヘ附イタノデ、不体裁且ツ切角ノ写真ヲ皆用ヒルヲ得ナカッタ。輯安県志ヲ読み。一番ノ獲物ハ榮氏謠言ニ王彦莊ガ出テ居ル事。次デハ其碑文及註ガ南淵書本ニ僅少訂正シタニ過ギヌモノデアル事。傳氏跋文ヲ見ルコト。

28日 木 輯安県志抄出ヲ始メル。<sup>(183)</sup>廿九日ニ終ル。



11月1日 月 岳島健□、廿八日奈良へ同伴シテ下サツテ、正倉院御物展観ヲ見セテ下サル由。  
好太王碑文研究三冊ノ為ニ帙ヲ下サツテ、納メラレタノヲ拝見シタ。桑名へ伺ハズトノ事。<sup>(184)</sup>

5日 金 文雅堂ヲ訪フモ不在。元町公園デ弁当。文求堂ヘ行キ、好太王碑ヲ見セテモラウ。第  
四面ヲ見タガ、墨ガ少クテ疑問ノ読点明カデナイ。唯第一行初ハ、府本ヨリ更ニ「城」ノ旁端ヲ失ッ  
タ形デアル。先日ハ楊本同時位カト思ツタガ、若主人ノ話ニ、二十年前鄭孝胥氏、北京拓工ヲ遣シ  
テ五六本拓シタモノダト云フ。コレ明ダト云フ。サラバ此間ノ「履」ト見タノハ見違ヒカ。氣ノ毒。  
(何時モノ心臓デアル。)止メテ返ル。<sup>(185)</sup>

12月30日 木 午前、春夫カラ“好太王碑積文（以此二行為一行）春夫写”ト。終リニ繋イデ  
三枚半紙□藍インク謄写版ニ刷ツタノヲ十部送ル。稚拙ナ真摯ナ好感ヲ懷カシイ字ダ。有難イ配慮。

## 昭和24年・1949年

3月7日 月 此間カラ考ヘテ居ル好太王碑文研究副本ヲ作り始メル。昭和四年度原田〔淑人〕  
先生講義筆記帳ノ餘リヲ截ツテ始メル。

18日 金 ○午前十時半、七日ニ始メタ好太王碑文研究原稿副本終ル（尤モ未ダ目録ト参考文献  
献ヲ写サヌ）。

22日 火 岳翁ニ年来持参ノ好太王碑拓本ヲ見テ貰フ。

30日 水 …朝鮮金石攷ノ刊行年ハ、確カ十年八月（或ハ一月）〔葛城末治『朝鮮金石攷』大阪  
屋号書店、昭和10年（1935）1月〕…帰宅四時。

4月1日 金 朝、好太王碑文研究参考文献ノ朝鮮金石攷刊年月ヲ補ヒ、南淵書ノ刊年ヲ大正七  
年ト補フ。（後先ニ就テハ白□ダツタガ□デ見タノダガ補ハズ。一昨日ハ□ニ見エズ。朝鮮金石攷  
ニハ大正十一年刊トアツタノヲ見タ。然シ確ニ大正七年ダツタと思フノデアル。）序ニ岳翁御手製  
ノ帙ニ題ヲ書キ貼ル。岳翁ニ揮毫ヲ頼メバ善カッタノダガ。是デ漸ク遺漏無シト云フ事ニナツタ。  
更ニ岳翁ガ原石拓本ヲ見テ、煤汁デ拓シタノダト云ハレタノヲ、成ル程ト敬服シテ稿ヲ改メタ。（ア  
バタモエクボト云フ奴。）有リガイコトダツタと思フ。岳翁ニ一枚シカ見テ貰ハレズ。苦勞シテ持  
参シタ甲斐モ無カッタ恨ンダノガ申訳無ク、回想サレタル次第デアル。（三時半記）

2日 土 好太王碑文研究ノ写書後見付ケテ証拠ニ出シタ北魏碑ノ幢主例ヲ、紙ヲ貼ッテ本文ニ  
増補スル。其他例ニアリ。字数改定ヲヤル。<sup>(186)</sup>

3日 日 午前中カカッテ、数年来床ノ間ノ右側好太王碑□□…<sup>(187)</sup>

6月24日 金 神保町山本書店ニ經典釈文、Maspero ; La Chine Antique、室名索引、楊鈞好  
太王写本版本、般若經□□（玻璃版）、莊子集註ヲ售ツタ。1500（此間ノ借ヲ差引1350）ヲ得。  
水道橋南陽堂デ此間見タ拓本一包ヲ買フ（500ヲ負ケテ400）。歩イテ上野博物館法隆寺文化…。<sup>(188)</sup>

11月14日 月 ○正午、江田文雅堂ヲ訪フ。主人出掛ケシ処、又□□□今日ハ坐ッテ好太王碑  
拓本ヲ持来、精拓本ト対看、精拓本ヨリ勝レタ〔この間に脱落あるか〕処処拓本ニハ劣ル。推測ガ  
□ツタノデ辞去。三時過返ル。

15日 火 十三日カ十四カ、好太王碑文研究ヲ清書シ始メ、十五日第二日、十六日第三日今日、  
尤モ多ク（十六午後五時半記□□半カラ）。<sup>(189)</sup>

22日 火 好太王碑文研究（第三章）写定終ツタ。久シカッタ。業余書画、廓然空闊、後続仕

事モ無い、芒トシテ居ル。第二章ト第三章ト、一年余ノ差デ紙色ノ異ルヲ合綴。第一章ハ□□シテ、二冊ニシタ。岳翁恵造帙ニ無理ニ納メテ居ル。廿六日写記ヲ書キ、悌印ヲ捺シテ見ル。不文没雅、本来ノ面目如何トモスルナシ。<sup>(190)</sup>

29日 火 ○昨夜、好太王碑文研究、岳翁御造り下ツタ帙ノ爪懸・紐ヲ、一本ヅゝ増ス。好結果ヲ致ス。<sup>(191)</sup>

12月9日 金 午後一時前、東大考古学研究室駒井〔和愛〕助教授ニ好太王碑研究ヲ呈ス。十五日頃カラ暇ニナツタラ読モウト云ハレル。概要ヲ130枚位ニ書イテ、考古学雑誌ニ出シタラト云ハレル。厚意ヲ謝シテ、帰宅ス。<sup>(192)</sup>

12日 月 十日カラ好太王碑墨本考起艸。此ハ原稿紙（和夫ノ遺物）12枚、十三（火）21マデ、十四（水）30半葉マデ書ク。十五（木）39半葉マデ。十六（金）40〔葉〕。終ニ註ヲ終ル。<sup>(193)</sup>

17日 土 午後、東横デパート□□原稿紙100枚・65——ヲ買フ。早速、数枚書ク。十八（日）碑字考マタ終ル。十九（月）□考マタ□終ル。<sup>(194)</sup>

21日 水 ○碑文考、廿日11枚。廿一16半□□□□…。廿三、午後三時、39枚終ル。<sup>(195)</sup>

27日 火 ○昨日カラ、墨本考見直シ。午前十一時直終ル。研究控ノ尾紙ニ、考ノ要ヲ記ス。考各冊ニ摂要□□註記。

#### 昭和25年・1950年

1月6日 金 今暁考ヘタノデ、好太王碑字考尾□考□□ヲ改メ拡充、半葉ヲ一葉半ニシタ。40枚ニナツタ。

30日 月 児童劇、廿七日カラ起稿。三十日、原稿紙ニ書ク。

#### 【29】昭和29～30年・1954～55年

##### 昭和29年・1954年

1月6日 水 昭和廿七、三、十編“好太王碑字の変相”原稿を補完（壊ワシテ研究序説ノ目次ト書目ハ反故流用シタリ）。序説ニハ別ノ紙ヲ以テ補完。<sup>(196)</sup>

7日 木 摂要碑文考ヲ見、訂正。<sup>(197)</sup>

8日 金 摂要碑文考、訂正、未終。

9日 土 碑文考刪定。

10日 日 好太王碑碑字考、碑辞考附、碑文考、目次ヲ作ル。<sup>(198)</sup>

11日 月 好太王碑字の変相ヲ又訂正。

12日 火 碑字の変相19頁ヲ改写。

13日 水 碑字の変相改刪。

14日 木 碑字の変相控ヲ訂正。九時半発。都立大学カラ。水道橋ノ壱岐殿坂デ、ウマク文雅堂氏ニ会ウ。立話デ、持参ノ変相・研究写真証例・摂要三冊・春夫謄写釈文二部ヲ托ス。氏用事ノ帰途、時間有レバ西川〔寧〕氏ヲ訪ウテ、預ケルトノ事ダツタ。三町目カラ都電、三越。廿八年秀作美術展覧会、宜宝写真展ヲ観、丸善ヲ少シ窺イテ東京駅。帰宅二時半前。<sup>(199)</sup>

15日 金 好太王碑文研究。碑文研究、読ミナオシ。

- 
- 16日 土 碑文研究刪改、(少シ)終ル。
- 18日 月 旧稿ヲ讀ミ返ス。<sup>(200)</sup>
- 20日 水 碑字研究(第三冊ノ分、初ノ方)刪訂。
- 21日 木 碑字研究、続キ刪訂。
- 22日 金 碑字研究、刪訂ヲ終ル。夕六時四十五分、大分刪ッタ。(又碑字研究ノ初カラモ一度見タイト思ウ。)
- 23日 土 碑字研究、首カラ刪訂。
- 24日 日 碑字研究、刪訂。
- 25日 月 碑字研究、刪訂。
- 26日 火 碑字研究、刪訂。
- 27日 水 碑字研究、刪訂。
- 28日 木 碑字研究、刪訂。
- 29日 金 碑字研究、刪訂。
- 30日 土 碑字研究、刪訂。
- 2月1日 月 朝日新聞第三頁、香取先生、昨夕六時半肺炎デ逝去サレタト。午後二時前發、渋谷から世田谷香取家弔問。読経中□門数十名ノ方々、芋ヲ洗フヨウナ光景。焼香、廊下ニ坐ッテ、五時過済シ、六時過帰宅。<sup>(201)</sup>
- 2日 火 碑字研究、刪訂(午前中)。午後一時着替。渋谷東横デ線香250一、キャンデー500一ヲ買イ、香取先生霊前ト御台所へ。焼香。少シ静カナノデ少シ御話ヲシテ、暫ク坐ッテ、四時過□シ歩行、帰宅五時半。
- 3日 水 碑字研究第一分冊ノ方、漸ク刪訂ヲ終ル。…香取先生ノ通夜、読経終ッタ処、焼香シテ帰宅。八時半少シ前。
- 4日 木 碑字研究第二分冊(第三冊)刪訂ヲ又始メル。午前十一時十分發。渋谷地下鉄青山一丁目、古イ頭デ青山斎場ヲ探シテ時間ヲ取り、新建築ノ葬儀所ニ行ッタノハ読経半(十二時頃)ダッタ。一時カラ離別焼香、□□参会。二時過霊柩ヲ送り、地下鉄デ帰宅。
- 5日 金 碑字研究、刪訂。
- 6日 土 碑字研究、刪訂ヲ終ル。思イ立ッテ、原稿用紙ヲ裏返シテ碑字研究ヲ清書シ始メル。終日デ15枚半(p.144~159半枚)。
- 7日 日 碑字研究、控浄写、p.159左カラ161マデ。
- 8日 月 碑字研究、控浄写、162—177右。
- 9日 火 碑字研究、浄写、177左—191。
- 10日 水 碑字研究、浄写、192—214左4行。
- 11日 木 碑字研究、浄写、214左5行—234。
- 12日 金 碑字研究、浄写、p.235—250半枚。
- 13日 土 碑字研究、浄写、p.250—269。幢ノ中半デ疲労シテ止メル(夕七時七分前)。
- 14日 日 碑字研究、浄写、p.270—283。三ノ七ノ一□ノ34。碑字研究旧稿ハ№215, p.139ヲ分冊第二トシタ。改写№211, p.280左六行デ写シ終ル。紙ノ都合ガ悪ク、旧分冊三ニカカリ、写
-

シテ終ル。

15 日 月 碑字研究、浄写、p.284—303 七行。又質屋へ 1.500—。

16 日 火 碑字研究、浄写終リ。碑辞研究、浄写、p.303—八行ヨリ 319<sup>(202)</sup> 右。

17 日 水 碑辞研究、p.319 左—331。碑辞研究ニ、城山上而建都焉ノ一項ヲ増ス。他ニ其旁ノ造渡ニ半枚ヲ増ス。

18 日 木 碑辞研究、浄写終ル。p.332—343 二所（p.343 即チ旧 p.202、第三章碑文研究第五行ニ始マル、改稿 342 ニ二行剩ル故ニ、反故紙ヲ旧稿上ニ貼リテ補写シタ）。令カモ旧稿ニ無カッタ国城ノ一項ヲ増入。因ッテ旧 17 項ガ 19 項トナツタ。

19 日 金 碑字研究、読ミナオシ、刪訂少シ、p.144（即初メ）—184 右。

20 日 土 碑辞研究、読ミナオシ、p.184 左。

21 日 日 碑字研究、読ミ直シ、p.□□□—216。

22 日 月 碑字研究、読直シ、p.216—248 右。

23 日 火 碑字研究、読直シ、p.248—273。

24 日 水 碑字研究、読直シ、p.274—316。第一章碑字研究終ル。碑字研究 173 枚ヲ一冊ニ綴<sup>(203)</sup>ル。

25 日 木 碑辞研究、読直シ、p.317—342 ト二行終了。碑文研究ハ餘リ書き改メナカッタノデ、直ニ未ダ改メズ、トモカク綴ジ直ス。□□前

26 日 金 碑字研究、又読直シ、p.144—170。

27 日 土 碑字研究、又読直シ、p.171—180。

3 月 1 日 月 碑字研究、読直シ、p.181—217。

2 日 火 読直シ、p.218—226。

3 日 水 読直シ、p.227—247。

4 日 木 読直シ、p.248—280。

5 日 金 読直シ、p.281—298 右。

6 日 土 読直シ、p.298—316 右、即チ碑字研究終ル。碑辞研究、読直シ、p.0332 迄。

7 日 日 碑辞研究、読直シ終ル。

8 日 月 碑文・碑辞研究、目次ヲ訂補。

9 日 火 碑文研究、読直シ、p.229 迄（旧ノ頁、未改）。

10 日 水 p.256 迄。新ニ増補シヨウト考エナガラ、未ダ着手セズ。唯旧稿ヲ読ミ直シテ、字句ヲ訂正スルノミ。

11 日 木 午後七時四十分、碑文研究、読直シ終ル。

15 日 月 日本書紀、韓半島関係条注ニ見エル百濟記等ヲ検出、抄出。

19 日 金 雄略紀“中国”、星川皇子ノ乱説話。<sup>(204)</sup>

31 日 木 香取ニ預ケテアッタ孟鼎泉範拓本・粘蟬碑考原稿ヲ携来。<sup>(205)</sup>

8 月 9 日 月 好太王碑研究第三章碑文研究、増刪ヲ始メタ（p.202 カラ p.209 半葉）。以上ハ増刪少シ（次カラ詳シク増刪少シタノデアル）。

10 日 火 碑文研究、増刪、p.215 マデ。

11日 水 前同、p.223 半葉。

13日 金 碑文研究、p.241 半葉ト二行マデ。

14日 土 郭沫若天ノ思想（岩波講座）ヲ読ミナオシ、研究ノ増刪中断。

9月9日 木 十四日天ノ思想ヲ読ミ直シテカラ、読書（ト云ウモ、小サイ本箱中ヲ捜シタダケダガ）見直シテ居ル。尚図書館ヘ行カネバナラスガ、午前中、好太王碑研究第三章ノ前ノ続キノ辺、少シク増刪ノ筆ヲ入レタ。“中国”ノ天子ヲ慕倣シタ慕倣振りヲ證シタイノダガ（後三時半）。

10月18日 火 午後、渋谷東横旧館七階ニ、西川寧氏書個人展ヲ見ル。昨日、案内端書ヲ氏カラ戴キ、好太王碑文ニ就テ言及サレタノデ行ッタ。碑拓本ヲ“書品”誌特別号ニ載セタイラシイガ、未ダ具体的ニハ準備モ出来ナイ様子デアッタ。<sup>(206)</sup>（四時過帰宅、五時過記ス）

### 【30】昭和31年・1956年

2月13日 日 好太王碑研究第三章稿、昨年十一月11日、平安ノ大半部デ続ケ得ズ、久シク中断シテ居タノデ、ズット考エ来タガ、漸ク想定リ執筆。夕七時過、追諡考・総括考記シ終ル<sup>(207)</sup>（七時十四分）。

### 【31】昭和32年・1957年

高儒留。→→新儒理・儒礼。／世子。天子ノ太子ヲ称ス。／壺杆（好太王——）。韓国著書、国会図書館。／治天下大王——。考古学雑誌、福山氏。／永楽五年。年号ラシキ記載ナリ。然レドモ国家ガ新シク建ラレテ、新シク年号ヲ創定スルノ先例ヲ検スルニ、永楽ノ如キ寛裕ノ字面一モ見エズ。<sup>(208)</sup>…

### 【32】昭和33年・1958年

1月18日 土 夜八時前、天ヶ瀬氏（攻玉社英語教員、順コーラス同人）〔昭和34年7月24日条に天ヶ瀬恭三君とある〕来訪、蔵拓本ヲ見セテ暢談、十一時迄。

4月7日 月 二三日来、好太王碑研究ノ墨本概説巻頭ヲ改訂シヨウト考エテ居ル。今日午前少シ書イテ見タガ、ウマクユカヌ。

12日 土 一週間、好太王碑文研究序説冒頭数頁ヲ（今西〔龍〕博士仮面発見ノ叙述カラハ訂サズトモ可ト思フ）改作シタイガ、尚考案纏ラズ。前日記帳デ、参考文献取得過眼年時ヲ、序説巻末文献目ノ行間ニ赤鉛筆デ記ス。之ニヨレバ、考察進行ノ波ガ見エル（二日間ノ漫々仕事）。

30日 水 好太王碑文研究序説墨本概説ヲ改作スル作文ニ苦心シテ居タガ、前稿ノ六枚ト六行トノ分ヲ一応定メテ、大学ノート紙ニ細書控エヲ作り終ッタ。

5月6日 火 好太王碑文研究序説ノ冒頭ノ改稿纔カニ成リ、前ノ稿紙ヲ裏返シテ書ス（前ノ稿紙p9マデガ恰モ原稿用紙表ニ書イタマダグッタノデ幸ダッタ。但シ改稿恰モ10枚トナリ、旧ノp10ニ続ク。p10カラハ既ニ裏返シテアル。頁数ヲ如何スルカ、今未定）（七時十分記）。

14日 水 好太王碑文研究序説稿p113。拓本（第三節）ノ節、著録ニ見エタ拓本ト本稿所拠ノ拓本ト写真トダケダッタノヲ、資料列举マデヲニトシ、資料以後ヲ三トスルニ定メテ評題ヲ考エテ居ルガ、今日定メテ、三 真碑文拓本研究ト書キ込ム。ズット序説ノ改刪ヲヤッテ居テ、日記ニ表ワサヌノデ、此処ニ目ヲ記シテ置ク。<sup>(209)</sup>（夕6半）



31日 土 好太王碑文研究序説、改訂ヲ終ル。(但シ(附)節ハ未ダ)中々定マラズ、厭ニナツタガ、何トカセネバ。<sup>(210)</sup>

8月2日 土 六時半。鄭文焯氏釈文“將殘王弟我大臣十人”ノ我が、從來考エタヨウニ原石拓本ノ形ニ拠ッタトマデ推測スルハ、自分ノ独り相撲デ、案外会余録ノ并ヲ我ト読ンダノカモ知レヌ、ト思イ附イタ。然ラバ張氏藏本ノ釈文我トスルノモ亦同断。即チ博物館本ト異字デアアルヲ要セス、ト云ウコトナリ。折角序説デ大得意デ演説シタノガ、ペシャンコトナリ終ル。然シ独リノ中ニ、独り得意ノ鼻ヲペシャント自ラヤッタコトハ、幸デアッタと思フ。張氏本ノ黃龍等モ誤植ダガナ。序説、棒ヲ大分引カネバナラス。良イ日ダ今日ハ、悪イ日ダ今日ハ。(6.45) 又記ス。鄭氏誤読ヲ先刻始メテ考エタツモリモハ、先月鄭拓本ヲ李雲従拓本カト見当附ケタ。今日并字考ヲ見テ、羅〔振玉〕氏釈文ト撞着スルヲ考エタ。李本拓本ヲ古形ト信ジ難イカラ、府本〔朝鮮総督府本〕・三井本〔三井家聴水閣本〕ヲ見、会余録本ヲ見、原石拓本ノ臨写ヲ見ルト、会余録本ガ尤モ我ラシイ。一面二行ノ両我字トハ固ヨリ異ナルガ、我ダト鄭氏が横井〔忠直〕氏釈文ニ異ヲ立テテモ、氏トシテハ然ルベキ形デアアル、トモ思ヘル位ダカラ。(6.52) 張氏本ト博物館本トノ字ノ変化ヲ考エタノハ、余リニ手際ガ善過ギテ、以前カラ些カ気ニナッテ居タノダ。<sup>(211)</sup>

9月25日 木 昨日マデ、兎モ角好太王碑文研究ノ史の考察トシテ、鄒牟考ヲ辞句研究カラ碑文研究ノ方ヘ移ソウカト考エテ居ルガ、手ガ下セズ。考エアグネテ、昨夜一寸観テイタ史記会註考証ノ孔子世家ヲボツボツ見テ、日ヲ終ウ。(夜9.50分記)

10月9日 木 高句麗王劉、慕容王ノ營州刺使任命、營州考；好太王碑文研究ノ稿ニ補入。<sup>(212)</sup>

11月6日 木 始メテ好太王碑文研究第三章ヲ読返シテ、第二章ニ移ス工作ヲ再び取上ゲタ。

13日 木 久シク停滞シテ居タ好太王碑文史の考察(故第三章碑文研究ノ一部)改稿ノ続稿ノ筆ヲ昨12日六行、13日十六行(原稿用紙デナイ便箋ノ反故；字数不問、唯行ヲ数エタダケ)ヲ着ケテ見タ。ウマク続ケ得タルヤ否ヤ、未ダ疑問ヲマヌガレズ。(14前9時)<sup>(213)</sup>

14日 金 好太王碑文研究、唯一行増シテ三十、六、十五増考ニ連続サセルコトニスル。此増考ガ原稿ニ続ケテ在ルノハ其ノママニシヨウト思フ。生半可デハアルガ、徹底的二変ヘルベキカモ知レヌガ。

15日 土 好太王碑〔文〕研究進マズ、全ク。生半可(ト書クノカ些カ疑問)カラ進ミ得ナイノデアアル。変エネバナラスダロウ。

22日 土 好太王碑文研究続行、少シ続ケ得タ。

23日 日 好太王碑文研究続ク。

26日 水 好太王碑文研究、ズット毎日ボツボツ。或ハ二行ノコトモアッタガ、又昨日ノヨウ〔ニ〕唯七行ダケノコトモアッタ。今日モ又稍進ンデ、□ク久シウ考テ来タ核心ノ部分ニ筆ガ進ンダ。<sup>(214)</sup>

29日 土 好太王碑文研究、続行。11/30～12/2 稿ヲ続ケズ、怠ッタ訳デハナイツモリダ。

12月3日 水 好太王碑文研究、11/29カラ始メテ、筆ヲ進メル。

4日 木 好太王碑文研究、太王論ヲ草稿了。5日・6日訂シテ、先ズコンナモノカト考エル。他人ノ見テクレハ如何カ知ラスガ、今マデ考エ続ケテ来タコトハ尽シタト思ウ。ホツシタ感ジ。(7日午前十一時□分過、記シ置ク。)<sup>(215)</sup>

12日 金 十時廿分、朝カラノ好太王碑文研究、改稿定□ヲ書写了リ、仮綴ジ込ム。ホツシタ。

---

<sup>(216)</sup>  
(p55)

13 日 土 ……10.39 うんぜん号に乗る…携帯ノ好太王碑文研究分冊第四を見。昨日写シタ分ヲ訂シ補ウ。<sup>(217)</sup>

16 日 火 考古学雑誌大正三年ノ、“二年秋、関野〔貞〕・今西〔龍〕両博士、輯安調査報告”ヲ読ミ抄録。<sup>(218)</sup>

17 日 水 午前。三十一年十一月号考古学雑誌ヲ見テ、好太王壺杆ニ関スル論説ヲ見出シテ、□□□ナガラ写真ヲ見得タノハ、昨ニ続イテ収獲ダッタ。広開土地太諸字〔ハ〕好太王碑ト同構、筆勢モ同ジカト思ウ。<sup>(219)</sup>

18 日 木 考古学雑誌三十一年ノ分ノ好太王壺杆ノ写真版ヲ模写ス。

24 日 水 好太王碑文研究続稿ヲ考エテ、先ズ前月ノ稿ノ部分ニ少シク増訂ヲ加エル。(25 夜 10.33)

25 日 木 久シ振り、好太王碑文研究続稿、太王、辺境外藩王ノ称号トシテ、高句麗・倭・新羅ト移ッタノデハナカロウカ、ト。(夜 10.30)

27 日 土 碑文研究、昨日稿進マナカッタガ、今日ハ又大分続ケタ。

### 【33】昭和 34 年・1959 年

1 月 2 日 金 好太王碑〔文〕研究□□稿ノ分ヲ写定、綴ジ込ム。

<sup>(220)</sup>  
3 日

<sup>(221)</sup>  
4 日

<sup>(222)</sup>  
10 日

11 日 日 劉宋・蕭齊ノ交替ガ、倭太王ノ天子□□ノキッカケダロウ。

2 月 11 日 水 昨年カラ決定シ居テナガラ充分ノ整理ガ出来ヌ爲、未ダシカッタ好太王碑文研究第三章ノ碑文ニ即シタ論議ノ部分ヲ第二章ニ移ス件。整理ヲ完全ニスルニハ、書き改メネバナラヌノデ、トモカク合綴スルダケニシテ、午前中ニ綴ジ直ス。

19 日 木 好太王碑文研究第三章ノ今年増シタ部分 (p.52 右ハ昨年 11 月 12 日ノ末葉ダガ、序ニ之ヲ書き移シテ) ヲ写定シ始メテ、原 52 葉ヲ (2 葉半ヲ) 一枚半書ス個所ニ移シタ (半葉ダケ書き増シガ有ッタコトニナル)。<sup>(223)</sup> 6 時半コロ。

20 日 金 好太王碑文研究写定。昨日ハ、夕刻カラ思立ッテヤッタノデ唯一枚ダッタ。今日ハ、朝カラ午後 4 時マデデ、予定ノ一昨年十一月カラ十二月中ノ改稿増訂ノ分移写ヲ了ル。400 字詰原稿用紙ニスレバ、何枚ニナルカ解ヌガ、細字——但 20 行デハアル——8 枚ト 14 行ニナッタ。

21 日 土 好太王碑文研究、綴直シノ部分ヲ見返ス。何カゴタゴタ不透明ナ感ジ。頭ガイカンノカ (夜 9.35)。

25 日 水 好太王碑文研究、新稿部ト旧稿部ト連接シヨウト苦吟。目途ダケハ着イタガ (夜 9.20)。

3 月 14 日 土 午後 3 時 45 分着手紙、西川寧氏——3 月後ノ書品 100 号ニ好太王碑研究ヲ発表シヨウト云ウ。編集部員伏見〔冲敬〕氏ヲ遣ルカラ、打合ワセヨトアル。<sup>(224)</sup> 3.55。

15 日 日 藁ヲ握ミカケタ。心勇ミヲ押シ殺シテ、西川氏ニ預ケタ稿ノ中、控エノ有ル好太王碑□□□ヲ読ミ直ス。難渋ナ議論ダシ、論ジ足ラヌコト勿論、研究摘要等ハドウダッタカ。書品ノ

---

特別号トスレバ、史論ハ不必要ダロウ。墨本考ダケカ、新獲字ノ説明位ヲ加エルカ。<sup>(225)</sup>

<sup>(226)</sup>  
19日

22日 日 好太王碑墨本研究・総説ヲ練リ直ス<sup>(227)</sup> (23夜、10時)。

23日 月 墨本総説ヲ再ビ (10時)。

26日 木 午前十時前、伏見冲敬氏 (西川氏□□ニ書レタ) 封書速達、何時伺ウベキカ、地図ヲ示セト。西川氏へ答エタ直後カラ心ニカカッテ居タ事、恐縮。十一時、宮丘局ニ速達葉書 (伏見氏名入ノ)、答ヲ出ス。午後3時半、思イ附イテ、文雅堂主人へ礼葉書ヲ出ス。<sup>(228)</sup>

28日 土 好太王碑原石拓本ヲ、久シ振リニ出シテ、二枚懸ケテ見ル。伏見氏訪問ヲ待ッタガ、見エズ。

30日 月 午後四時前、伏見冲敬氏来訪。原稿ヲ持レズ (見タカッタノダガ)。拓本ヲ一枚見テ、字形ヲ写スカラ借りタイトノ事デ、貸ス。4時半返ラル。二階ニ上リ下リデ不便ダッタガ、座敷デ話シヲシタ (5.15)。忙シイ話振リデアッタガ、ホツシタ。<sup>(229)</sup> (原石拓本、6/23 歸ル)

31日 火 朝カラ思イ立ッテ、好太王碑墨本概説ヲ15枚、原稿紙ニ劉節氏釈文批判ト、原石拓本略解説トノ部分ヲ5枚写ス。墨本研究ノ目次ヲ写ス。伏見氏ニ見セル爲 (伏見氏、劉節考釈ヲ読マレタトノ事デ) (6.50了)。

4月1日 水 午前、好太王碑墨本研究抄録、続キ。精拓本ニ就テ。(碑文研究ノ書体ニ就イテノ部分全部ヲ写録。) 昨日ノ原石拓本ニ就テノホカ総テ28枚、即チ14枚。

2日 木 一昨日ト昨日ト写シタル好太王碑抄録ヲ読ミ直シ、夕刻漸ク終ル。封筒ニ容レテ、明日、伏見氏へ送ルツモリ。

3日 金 午前、中央区京橋二ノ三東洋書道協会ト云ウノカラ小包。先年、西川氏ニ届ケテモラッタ原稿5冊ヲ郵送着。又伏見氏へ葉書受状。<sup>(230)</sup>

4日 土 24年12月稿好太王碑墨本研究ヲ読ミ直ス。<sup>(231)</sup>

5日 日 24年12月稿好太王碑碑字研究概要、碑文研究、釈文ヲ読ミ直ス。

8日 水 午後1時、伏見氏カラ葉書。原稿一通<sup>(ひととおり)</sup>検討後、□急送サレタイト云ウ。早速、夜マデカカッテ、墨本研究ヲ字句訂正 (9.45)。

9日 水 午前中、好太王碑考ノ字句訂正 (永楽年号トアッタノヲ、紀年又稱元ト改メタ如キ)。大キナ修正ハ出来ヌノデ、昭和24年12月ノ稿トシテ passable ナモノトシテ満足スルコトニスル。…2時前、緑丘局ニ好太王碑考 (ト赤インキデ総名ヲ書ク) 3冊、附図1冊ト、参考トシテ好太王碑の変相、墨本概説、劉節氏考釈釈文批判、書型論等ノ研究ノ抄録、計3冊、合計7冊を包装、書留小包郵便発送、吉祥寺伏見氏へ。一仕事済シタ気持ち (3.20)。伏見氏へ葉書案内 (4時前)。<sup>(232)</sup>

<sup>(233)</sup>  
10日

15日 水 正午、伏見氏カラ葉書。14日、小包着ト云ウ。5日カカッタコトニナル。…伏見冲敬氏へ会余録第5集 (完本) ト、朝鮮総督府本影印本トヲ第5種速達便、緑丘局ニ出ス。本書ノ後書ヲ訊ネラレタカラ、葉書。

17日 金 伏見氏葉書、20日カラ一週間離京ノ由を報ズ。

18日 土 伏見氏葉書、府本・会余録本受状。略歴ヲ示セト。

20日 月 春夫、歴史教育4月号ヲ示ス。末松保和氏 (学習院大学教授) “好太王碑文” “史料解説”

---

ヲ読み。新シイ見解ト云エバ、漢文ノ読み誤リニ因ルモノダケ (9時15分<sup>(234)</sup>記)。

<sup>(235)</sup>  
22日

25日 土 伏見氏21日受好太王碑釈文校正刷、22日着ノ由、ヲ見ル。伏見氏へ校正刷リ返送ノ葉書ヲ作ッタガ、明日ハ日曜日ダッタ為メ、葉書10——ニシテポストニ入レル。夜7時<sup>(236)</sup>。

27日 月 好太王碑文研究続稿。

<sup>(237)</sup>  
28日

5月10日 日 朝7時半、速達。好太王碑文考、書品ノ33-41頁ノ校正刷(再校。自33頁至41頁。原稿——。出5月9日。戻 月 日。…終日、校正ス(書品一東洋書道協会—中央区京橋2ノ3番地、5/9書)。…校正刷p33ハ《「元せしむことあらむ」と推測サレタ。後述の理由に拠り、紀年は高句麗では好太王の創始した制であると知られる》ノ節ニ始マル。<sup>(238)</sup>

11日 月 同便(小包)、東洋書道協会発、好太王碑考原稿ト、昨着ノ前部全校正刷送附着(後3時)。昨日ノヲ終ッテ送ロウト思ッテ居タガ、伏見氏案内モマタ無シ。トモカク初頁ノ方モ校正始ル。少シ赤字ヲ入レテ有ルガ、漏レテ居ル(夜10時前<sup>(239)</sup>)。

12日 火 夜八時455、好太王碑考校正、一応了。尚、今一度見ヨウト思フ。

13日 水 好太王碑考校正、再度分ガ未ダ見附カル、終ラズ(9.20)。

14日 木 好太王碑考校正、終了。直チニ封筒(10日送付ノヲ裏返シ)ニ校正刷ダケ容レテ、3時過ぎ官丘局ニ速達第五種41一出ス。原稿ハトモカク止メ置ク。伏見氏カラ、此間中指示無シ。京橋へ送ル方ガ手順イイノデハナイカト考エルガ、トモカク吉祥寺伏見氏へ送ッタ。明午前着クダロウト云ウ事ダ(ヤレヤレデアル、4.20)。<sup>(240)</sup>

<sup>(241)</sup>  
15日

16日 土 好太王碑文研究、読ミナオシタダケデ、筆執ラズ。

20日 水 好太王ノ支那文化ノ伝統歪曲、乃至調整・調和ノ処理ノ意味。倭・新羅ノ同様ナ事例トノ関連ヲ考エヨウト思ッテ。

<sup>(242)</sup>  
25日

26日 火 好太王碑文研究改訂稿ヲ、前ノ部分ニ続ケ写定スル。正午、綴ジ込み(60左、余白ダッタ6行、前ノ原稿ヲ裏返シテ2枚、ソレニ便箋裏ニ9行書イテ、恰モ旧24ノ末行ノ碑文作□論ニ続ク。即チ2枚ト15行トヲ増入シタ<sup>(243)</sup>訳)。

<sup>(244)</sup>  
27日

<sup>(245)</sup>  
28日

<sup>(246)</sup>  
29日

6月2日 火 ○好太王碑文研究。碑文□□曰ト所謂□□ノ韻無キヲ論ズル一段ヲ挿入スル爲書キ改メ、貼りコミ、綴ジ直ス。稍密度ヲ増シタツモリ(10時)。

7日 日 ○好太王碑墨本研究：輯安県志ノ好太王碑釈文ノ批判ヲ補入スル艸稿ヲ作ル。夕、成ル(10時前)。

8日 月 好太王碑墨本研究。拓本ノ前文ノ劉節氏ノ釈文作製態度批判ノ次ニ、昨日艸シタ輯安県志ノ釈文ノ批判ヲ写定、貼り込み。薄紙ヲ用ウ。<sup>(247)</sup>

16日 月 好太王碑墨本研究、刪改(15日。14日モ)。

---

<sup>(248)</sup>  
19日

23日 火 午後六時過、手製散髪終ッテ、頭ヲ洗ッテ居ル処へ、伏見氏来訪。原石拓本、亜細亜協会余録5集、総督府蔵拓本石印本、碑字証例ヲ返サレ、好太王碑考校正刷ヲモラウ。前月請求サレテ出シ忘レタ略履歴、粘蟬碑考ヲ掲載ノ画説トヲ携エ、写真ヲ撮ッテ返ラル。此数日、否、<sup>(249)</sup>十数日心待チニシテ居タノデ、些カ心落チツク（10時15分）。

24日 水 午前、好太王碑考第一章ヲ見終ル。p125、三井・府精拓・近拓ヲ並ベタ位置ノ誤リ（精拓倒、三井・近入レ替ヘテ）ヲ訂正シテモライタク、午後三時前、宮丘局ニ手紙速達ヲ出ス（4時10分）。読み始メル前ニ□□シタ。上記ノ誤リヲ除イテ、曩ニ校正シタ誤植ハ皆綺麗ニ訂正サレテ居ル。僅カニ比ヲ此ト誤ッタ二処等ガ、第一章ニ目ニ附イタダケト云ウ成績デアル。伏見氏ニ礼ヲ書ク。第二章以下モ此程度デアロウ。實際読了処ハ誤植少シ（25前6時）。

25日 木 好太王碑考校正刷ヲ大部分読ミ、検討スル。先ズ□□ノ校正振りデアル。羅氏ノ用語懸乏麗牲ノ乏ヲ窺ニ作ッタノハ訂正シタイガ、他ハ大体善イ。5月中旬ニ校正シタ際、コンナ事デハトモト考エタ事ダッタガ、善ク是ダケニ正サレタモノト思フ。4月初訂正シター項ニ第一章ノ写真ヲ援用シタガ、伏見氏ガ附説トシテ並載サレル好太王碑ノ変相デ通溝ヲ見タノガ昭和27年ダト云ウノト撞着スル。昭和24年ノ稿ナルコトヲ、考ノ尾ニ明記シタカラ（夜10時）。

26日 金 午前10時半過、好太王碑考ヲ読ミ了ウ。今日ノ所ハ全ク瑕無シ、喜ブ。後ニ題記ヲ作ル。ソレカラ思イ立ッテ、“変相”控ヲ読ミ了ル。午後零時半、食事中郵便。今読ンダバカリノ好太王碑字の変相（ニ（附）ト冠シ（要約）ト附記シテ題トスル）、校正刷ヲ書道協会カラ。一寸見ルニ、大分誤植有ルラシイ。考ニ直ニ続ケテp166下段ニ始メテp171上段1/3ニ終ル。散歩□□。2時40分カラ見ヨウトシテ、此註ヲ作ル。○夜9時前ニ、校正ノ赤鉛筆ヲ入レ終ル。封筒ヲ反シテ、明朝、伏見氏ヘ送ルツモリデ封入。<sup>(250)</sup>

27日 土 午前8時半、宮丘局執務ヲ待ち受ケテ、伏見氏ヘ校正刷ヲ速達便（33）。

28日 日 午前、伏見氏ヘ手紙、考ノ誤植指摘。午後1時半、ポストニ。

7月2日 木 昨日一昨日ニ続ケテ、好太王碑考ヲ読ミナオシテ居ル。存外誤植ガ尚見遁サレテ居ルノデ、及ビ誤植デナクテ訂正ヲ書入レ字モ有ル。

3日 金 碑考ノ各目ヲ作ル。

4日 土 東洋書道協会カラ、7/1発送書留小包。三井氏蔵好太王碑拓本影□ヲ郵寄。筒ガ潰レテ、蓋ト底ト破損。<sup>(251)</sup>

5日 日 午後二時、伏見氏ヘ写真ト好太王碑拓影トノ受領報葉書。

10日 金 好太王碑研究ノ自分ノ足跡ヲ見ヨウト、“考”ト書イタ袋ノ中ヲ検ベテ、精拓本ニ拠ル初稿ノ紙ヲ見、昭和11年ノ日記帳ノ10月7日ノ欄ノ記事ヲ紙背ニ写シ始メタ処、正午何分カ前ニ郵便。“書品100、好太王碑”ヲモラッタ。“変相”ノ校正ハ間ニ合ワズ。不満足ダガ、用紙ガ善クテ、挿入ノ写真ハ余程見善イ。大キク写シタ金子鶴亭氏蔵剪貼本ハ、四ノ一ノ七ハ利城ガ右ノ方壊レテ居ルノガ、文雅堂デ拝見シタ時ノ記憶ヨリ大キイ。<sup>(252)</sup>

11日 土 書品100好太王碑写真版校記。金子氏本、剪貼ノ際截リ捨テラレタノガ大分有ル外ハ、予想シタ倒装ガ全ク無ク（二ノ六ノ9・11莫□羅は倒装）、横ニ貼ラレタノハ三ノ二ノ28境ダケト云ウ。善イ成績デアルノハ、或ハ伏見氏ノ校正ニ因ルカ。4時半、校記了。



13 日 月 朝九時半過発。水道橋、文雅堂ヲ訪ウ。左膝疾患、安静ヲ要スト云ウ。江田氏ニ面会、礼ヲ述べ、書品関係者ニ礼ヲシタモノカ問ウ。礼状ダケデ善カロウトノコト。11 時半頃辞シテ、お茶の水カラ東京駅。京橋二丁目三番地、東洋書道協会店頭ニ持参ノ書品 100 号ヲ提示、取替エテモラッタ。此店ヲ探スニ時間ヲ要シテ遅クナリ、地下鉄渋谷廻リ帰宅、2 時前ニナッタ。金子氏本好太王碑剪貼本写真校記、p1-32 分ヲ作ル。夜 7 時写定終ル。

14 日 火 午前 11 時 35 分、伏見氏葉書着、書品誤植ノ詫ビ。正誤表ヲ作ルカラ、協力セヨト。及ビ粘蟬碑考ヲ載セタイ加筆セヨ、トアル。礼ヲ出スツモリガ、遅クナッテ仕舞ッテ詫ビラレタ。○好太王碑字の変相（書品）、誤植ヲ調査。○伏見氏ヘノ正誤資料ヲ記シ始メル。夜 10 時、未ダ半ニ成ラズ。今夜ハ止メル。

15 日 水 伏見氏ヘ礼、注文正誤等（便箋 7 枚）。西川氏ヘ礼（12 時半）。午後、緑丘局ニ□□□□□。伏見氏カラ写真、此間ト同ジ 1 枚、仙人ジミタ笑顔ヲ郵寄セラル。封筒ニ礼一行（正午頃）。午後、好太王碑釈文 173 頁ニ誤植（3 ノ 10 ノ 34、三ヲニト誤ル）ヲ発見。夜 8 時、伏見氏ヘ正誤追加ヲ請ウ葉書。<sup>(253)</sup>

16 日 木 伏見氏ヘノ葉書、朝 6 時半投函。

21 日 火 午後 3 時前、西川寧先生カラ端書、挨拶サレル。

23 日 木 午前 10 時 25 分、東洋書道協会カラ葉書、書品百号 4 冊追加贈呈スルトアル。今日ハ、遂ニ未着（夜 8 時 25 分）。

24 日 金 午前 11 時半、東洋書道協会カラ書品 100 号 4 冊、小包便デ着。受状葉書ヲ出ス。○午後、天ヶ瀬家ヲ訪ウテ、書品ヲ贈ル。恭三君モ在リ。母堂ト暫ク話ス。午後、好太王碑書品 3 冊ヲ正誤。<sup>(254)</sup>

26 日 日 夜、書品ヲ容レル封筒ヲ作ル。

27 日 月 書品ヲ送ロウト、春夫ヘ案内葉書。正男様ヘ送ロウト考ルガ、休ミダカラ京都カ名古屋カト躊躇サレル。名古屋ヘ葉書（11 時前）。午後 2 時半、宮ヶ丘局、名古屋・香取ト京都正男様ヘ書品 100 号発送、20—<sup>(255)</sup>ズツ。

29 日 火 好太王碑。書品ノ写真版ニ面行列ヲ注記ス。

8 月 1 日 土 夜、岳母〔ノ〕常夫ヘノ葉書ト、好太王碑書品着、尚二三見セタイ所ガアルガ、余分ハ無イカト（9 時 37 分）。

3 日 月 正男様、31 日ノ葉書——書品“昨日接受、…大急ギデ拝読”ト。

9 月 6 日 日 午前 11 時半過、東洋書道協会カラ書留 44,030—三和銀行京橋支店（銀行□□）小切手ヲ送附（51,800—、税 7,770—）。<sup>(256)</sup>

7 日 月 午後、西川・伏見両先生ヘ礼葉書。午前 11 時三〇分、伏見先生葉書、粘蟬碑文考、着報。午後 2 時、都大住友銀行支店ヘ、小切手預入、…。

13 日 日 朝 7 時半過、書留小包、東洋書道協会。画説六号、書品百号 p123 - 178（好太王碑考カラ末ノ頁マデ）抜刷 1 部、原石拓本ノ二字ズツカビネ版写真 48 枚（其 29 枚ハ書品ニ略原大ニ展大印出サレタモノ、他ニ印出ヲ止メラレタ 15 枚、重複 4 枚）、以上。午前、葉書デ受ケ状ヲ投函。

14 日 月 書品抜刷ニ表紙ヲ貼ル。誤植訂正。

10 月 17 日 土 酒匂氏字。陸地測量部地図、酒匂川ニ作ル。匂、康熙字典ニ見エズ（以前ニモ

既ニ見タカ)。正字、後世勾ニ作り、復〔タ〕勾鈎音(平□)。…、劉〔節〕・榮〔禧〕・王諸氏ノ諸著、版本ヲ検スルニ、皆句ニ作ル。ヤレヤレ也。

11月29日 日 牟頭婁墓誌ヲ考エル<sup>(257)</sup>。

#### 【34】昭和35年・1960年

1月6日 水 東洋書道協会カラ、好太王研究ノ墨本研究、総論、同劉節氏考釈批判等ノ抜キ書キ、伏見氏ヘ示シタ原稿ヲ返送サル(速達第五種便。〔午〕後8時過着)<sup>(258)</sup>。

8日 金 東洋書道協会ヘ、6日ノ原稿入手受領報。

31日 日 東洋書道協会カラ、第五種便(8-)。“源泉徴収票在中”ト附記シテ、薄紙ノ“昭和34年度原稿料、印税、画料等資料せん”“支払者、東京都中央区京橋二丁目三番地株式会社国際聯合通信”“区分、原稿料”“書籍名又は雑誌名および號名、書品100號”“支払金額51,800円、源泉徴収税額7,770円”“区分、原…”“書品104號”“8,050円”“1,207〔円〕”“備考、上記支払金額のうち未払金額0円”“受領者氏名、水谷…”、職業住所、目黒区…。夕方、東洋書道協会ヘ葉書受状ヲ出ス。<sup>(259)</sup>

3月2日 水 午後1時半—3時半、目黒税務署ヘ行キ、確定申告書ヲ作ッテモライ呈出(東洋書道協会ノ源泉徴収票ヲ添付)。税金ヲ還サレルトカ、モット早クスレバ早クモラエル事ダッタト云ウ(3時50分頃)。所謂青色申告、確定申告ト云ウ手続キ(9時10分)。

22日 火 午後3時20分、目黒税務署長8977-源泉(個人申告)還付金支払通知書(緑ヶ丘郵便局)着。(即時)

9月21日 水 水曜日夜8時半—9時NHK教育TVハ、文明ノ起源ト題シテ連続講演。東大教授石田英一郎…。先週マデノ3回ハ、大阪放送デ貝塚〔茂樹〕教授ノ殷ヲ中心トスル支那文明起源論。今夜、朝鮮ノハ三上次男東大教授(TVヲ見ルト、昭和初年ニ原田〔淑人〕先生ノ教室デ、江上〔波夫〕氏ト同様善ク会イ、話モシタ人ダ。但、江上氏ノヨウニ其名ヲ知ラナカタ人。彼、當時ト甚ダ変ラヌ若イ顔。30年後ニ名ヲ知ッタ。論文ハ二三見タノデハアルガ)<sup>(260)</sup>。

12月21日 水 北燕ニ対スル畏憚ガ、碑文ノ筆ヲ縮マセタカ。南北両朝史官ノ文献ニ、王安ノ記載。朝鮮ノ史籍ニ二人ノ王安ノ疑念存在? 第2ノ王安ノ□名ハ? 太王ノ先例ハ? 自号ノ先例ハ?(12/21午前4時50分。3時15分カラ睡レヌ)<sup>(261)</sup>

#### 【35】昭和36年・1961年

4月4日 火 常夫、出発。九州旅行ダトイウ。昨春秋、卒業論文ノ取材ニ行キタイト云フテ居テ、果サナカッタ九州行キデアルカ。論文“島原一揆の研究”ヲ読ン□デ、末松保和教授ガ一緒ニ行コウト云ワレ、他ニ2人バカリ誘ッテ、旅行スルコトトナッタ由、10日頃マデ歸ルト。<sup>(262)</sup>

29日 土 前4時58分47分。高句麗ノ宮・遂成・伯固ヲ、国祖王・次大王・新大王ト序スル国史ニ、鄒牟・儒留・大朱留ト序スル神代紀ヲ加上ス。御肇国天皇以下ノ国史ニ神武肇国ノ神代紀ヲ加上ス。更ニ天地開闢以後ノ神代前紀ヲ加上ス。高句麗ハ単神代紀、我国ハ二重神代紀、ト見当ヲ附ケテ見タラバ如何。百濟・新羅モ単神代紀ニ止マル。我国ノミ二重神代紀。(5時5分)(4時50分頃カ、突如トシテ神武神代紀ノ想定ガ頭ニ出現スルト、次ニ高句麗ノ神代ヲ聯想シタノデアル。取

---

リアエズ記シ置ク<sup>(263)</sup>

9月30日 日 後10時15分、思イ出シテ記シ置ク。好太王碑ニ王ノ呼称ヲ我、吾ト云ウ。寡人ト称セズ。封王冊命ヲ受ケタ燕王ニ既ニ服セズ。自ラノ紀年ヲ称スルノ好太王ハ、サリトテ天子トモ自ラヲ上サヌ故、朕トハ云エズ。称谓ニ苦ンダノデアロウ。吾ノ字ニ着眼スルヲ要ス。鄒牟ニ天子ノ用語ヲ用イタガ、自ラニ未ダシトシタノデアロウ<sup>(264)</sup> (25分)。

【36】昭和36年～37年・1961～62年<sup>(265)</sup>

【37】昭和39～40年・1964～65年

昭和39年・1964年

2月9日 月 縮刷論語集解ノ注ニ、名詞ノ文末ト思ワル、処ニ、余分ニ、之、或ハ之也ヲ附ケタ箇所ガ気ニナッタノデ、拾イ出シテ見タ。計38例、内述而ノ3例ハ疑ワシトモ云エヨウガ、他ハ明カニ余分ノ字デアル。…写手ノ筆ノ勇ミカ、写手ハ南朝人カ、日本ノ上代人カ。書紀ナドノ之字ノ余分書キ、好太王碑ノ最後ノ之字ナドヲ考エ出サシメル。(10、朝8時35分追記)

8月24日 月 未明、目覚メテ睡ラレヌママニ考タ。好太王碑研究ノ第二、三章ヲ組変エ完成シタイコトデアル。第三章トシテ起草シタ高句麗初王ノ碑文ニ見エルモノノ考察ヲ改メテ、第二章ニ容レルコト、シテ、トモカク原稿ヲ切り貼りシテ置イタガ、安ズルヲ得ズ。ソノママニシテ在ッタノヲ、更メタイト思ッタノデアル。午前中、机上デ原稿ヲ見タガ、中々広範囲ニ手ヲ附ケネバナラズ、或ハ第二章ナルモノヲ全ク解体シテシマワネバナラヌカト考エル。未ダ着手ニ至ラス。埒モ無イ躊躇、逡巡デアルガ。<sup>(266)</sup> (25、後1時5分)

昭和40年・1965年

1月21日 木 夜、史料世界史ヲ少シ読ム。好太王碑ナド。<sup>(267)</sup> (22、後0時45分補)

【38】昭和40年・1965年

『正法眼蔵』、『般若心経』、『金剛般若経』、『碧巖録』、『盤珪禪師語録』、『三論玄義』、『印度思想史』、『原始仏教の实践哲学』、『杜甫詩集』、『紅樓夢』、『尚古年表』、『古文真宝』、『木食観正』、『教信証』、『韻鏡』、平凡社『書道全集』、『大無量寿経』、『論語』、『至道〔無難〕禪師集』、『〔浄土〕三部経音義集』、『法句経』、『支那思想史』、『わが親鸞』、武内〔義雄〕『老子と莊子』、唐沢〔富太郎〕『親鸞の世界』、『訳解杜詩』、『仏教要領十講』、『宋名臣言行録』、『実習林凡字学』、『玉台新詠集』、『書法大意』、『孫子』

11月5日 金 日本シリーズノ巨人南海ノ第五戦ノラヂオヲ聴キナガラ、書品100号殆ド全部ヲ載セタ原石拓本剪装本ノ剪去ヲ注出スル。第三面初マデ。尚未完。<sup>(268)</sup>

6日 土 晴。金子氏蔵好太王碑拓本写真版ヲ見続ケテ、夕方終ウ。結局、家蔵本ニ拓墨ヲ附ケタ字——或部分ハ石泐ノ白紙ノ処モアルガ——ニシテ、金子氏本ニ剪帖ノ時棄テラレタ字——或ハ字ノ部分——108字分アルト計算サレタ。其中ノ少数ハ我釈文ニ釈出サレタ字モ有ル。一面ニ於テ、第二面末行ノ金子氏本ニハ、家蔵本デ見離シタ残字ノ何カ読解サレソウナ感じノスルマデ、字画ノ

---

出タモノガアル。調査ヲ要スル。又始メルカ。<sup>(269)</sup>

【39】昭和41年・1966年

『般若心経』, 吉川〔幸次郎〕『論語』, 榊〔亮三郎〕『解説<sup>〔梵〕</sup>ほん語学』, 『<sup>〔梵〕</sup>ほん文心経』, 『論語』, 和辻〔哲郎〕『原始仏教』, 塩谷〔温〕『中国小説の研究』, 国訳漢文体系『水滸伝』, 『古文真宝』, 『論語之研究』, 『唐詩選』, 『中国の知恵』, 『老子と莊子』, 幸田〔露伴〕『莊子』, 飯島〔忠夫〕訳『左傳』, 『良寛詩集』, 『中国古代史学の発展』, 中西〔清〕『全釈徒然草』, 『日本文化史序説』, 『日本宗教史講座2』, 『尚書』, 竹内〔松治 補註〕『蒙求』, 奥平〔英雄〕『絵の歴史日本1』, 『世界哲学史1』 古代西洋, 塩谷〔温〕『桃花扇伝奇』, 塩谷『阿含経講話』, 『支那文学大観』, 『荀子集解』, 『モノロギオン』, 『還魂記』, 『道話集』, 『虞美人草』, 『宗演禅師書簡集』, 『自然と人生』, アリストパネス『鳥』, ウァレリー『文学論』, 児玉〔達童〕『哲学概論』, 『国文学史の研究』, 『剪灯新話』, 『仏教統一論』

7月22日 金 思イ立ッテ、好太王碑墨本編ヲ読ミ直シ、少シ訂正始メタ。7枚マデ。(7時50分)  
23日 土 好太王碑墨本研究、14頁マデ。(9時35分)  
24日 日 好太王碑研究ヲホンノ少シ読ミ直シタガ、書品ノヲ読ンデ終ル。(9時50分)  
25日 月 好太王碑墨本研究、読直シ。(9時50分)  
26日 火 好太王碑文研究墨本。(9時55分)  
27日 水 好太王碑文研究、墨本研究ヲ読ミ了エタ、昼頃。

【40】昭和44年・1969年

『蘇東坡詩集』, 『陶淵明詩集』, 『宋詩選』, 『古詩選』, 『老子』, 『莊子』, 『鈴木大拙全集』, 『津田左右吉全集』, 『左傳の思想〔史〕的研究』, 『碧巖録大講座』, 『宋明時代儒学思想の研究』, 『沙石集』, 『大慧書』, 『国訳禅学大成』, 『人天宝鑑』, 『馬祖語録』, 『圓語心要』, 柳田〔聖山〕『中国禅宗史』, 石崎〔又造〕『近世日本における支那俗語文学史』, 伊藤〔英三〕『禅思想史体系』, 岡村〔吉右衛門〕『版と型の美』, 宇井〔伯寿〕『<sup>〔宗〕</sup>禅教史研究』, 『ファウスト物語』, 『衣服哲学講義』, 『新渡部〔稻造〕先生全集』, 『阿部次郎全集』, 相良〔守峯〕訳『ファウスト』, 荻須〔純道〕『日本中世禅宗史』, 宇井〔伯寿 訳〕『頓語要門』, 『禅源諸詮集〔都序〕』, 『姿三四郎』, 窪田〔空穂〕訳『源氏物語』, 『王右丞集』, 『図録日本考古展〔日本考古展図録〕』, 『法然上人集』, 『芭蕉全集』, 入谷〔義高〕注『寒山』, 水野〔清一〕『中国の仏教美術』, 『蘇東坡集』, 『王摩詰全集』, 石田〔幹之助〕『長安の春』, 『呻吟語』, 『古籀彙編』

## 5. 日記抄録（看聞抄録）

〔凡例〕【】番号は「3. 日記目録」の番号に対応する。句読点については武田が適宜これを挿入し、また清音の一部は濁音に改めた。□は釈読不能の字。…は省略部分。〔 〕は武田が補った部分を示す。書名・史料名には適宜『』を補った。

### 【41】昭和13・23・25年／1938・1948・1950年

#### 昭和13年・1938年

東京帝室博物館歴史部第一区列品金石目録、大正十年十一月発行

一二四 高句麗広開土王碑銘 四幅 甲寅年、支那輯安縣東崗碑石街□□□、明治二十三年図書寮引継

一二五 高句麗広開土王碑銘 四幅 甲寅年、臨写本、支那<sup>(270)</sup>…

#### 昭和23年・1948年

5月28－29日 「高句麗広開土王碑銘」特別観覧ノ記

廿三、五、廿八。午前、博物館監理課庶務大塚氏ニ会フ。電話□堀江氏欠勤デ不調。

廿九日午前十時（頃ナラム）、又訪フ。案内セラレテ、本館階下ノ書籍ノ室デ堀江氏ト面接作礼。調査ノ結果、書籍ノ係デ無ク、資料ノ方ダトテ、自ラ案内セラレテ、事務所楼上ニ返リ、資料室ノ辻本氏ニ依頼、又調査シテ目録ヲ見出サル。

「学芸、高麗古碑、搦本四幅、価格一〇〇,〇〇、明治二十三年七月 日、図書寮引継。掛物方□、各面一幅、各幅明朝仕立、廻り佳絹□□綸本」。以下、各幅ノ細目ヲ記ス。終ノ□□ニハ、「清国奉天省懷仁縣洞溝」トアリタリ（ト思ヒ記ス）。左ニ価格ハ明治四十五年△月△調トアリシト記憶ス。（此点ハ庶務課室大塚氏ヲ待チツツ、思ヒ出シテ書ク、其前ハ帳ヲ見テ書ク。）

一ノ十一ノ冊「八」ハ、三字（〔字ハ〕行ナラム、誤写）×四字ノ末字、一紙。八ハ疑問無ク上ニ続クモノ<sup>(271)</sup>。

〔一ノ十一ノ〕冊一「那」ハ別一紙。其横 □□□白紙貼。「那」ハ疑フノ余地アリ。冊一字ハ一字一紙トナルベキニシテ、疑フベカラザラン。唯、一の九の冊一、一の十の冊一と三字一紙ナルベキヲ□□トセンカ。（廿三、八、五朝九時前）

二ノ六ノ十八、別一紙白紙貼込。

二ノ四ノ十三ハ、四字ノ末字。

三ノ二 一紙。〔三ノ七〕 一紙。

四ノ二乃至五行首四字一紙ヲ、一行四行末字ノ下ニ貼ル。六行以下亦同ジ。九行ノ首ニ末尾ノ一紙。其下ニ第五字等ヲ貼ル。制令守墓ノ下ニ白紙三字分、末尾ニ一紙ヲ貼ル。

明治十七年ノ青江〔秀〕氏釈文、明治十九年荻原氏雙鈎本釈文ニ、第二面ハ第一至第十三字ヲ一行ズツ左ニ誤リ移ス。同ジ理由ニ拠



碑文〔第I面〕の図



刑 之 買 人 制 令 守 墓 ○ ○ ○ 後	足 之 者 亦 不 得 擅 錯 有 違 方 墓 者	之	致	則	之	国	国	看	国	七
		人	使	復	後	崗	烟		○	
		自	守	取	安	上	那	八	一	利
		今	墓	奮	守	広	旦	場	看	城
		以								
		後								
		不								
		得	差	十	取	好	為	一	山	看
		更								
		相								
後	墓	轉								
		売	崗	奮	所	時	牟	味	家	城
後	墓	唯								
		有								

碑文〔第Ⅳ面〕の図

ル也。(卅三、五、廿九)

(廿六、五、十四朝八時四十分考得) 会余録本二面四、五、六行下部ヲ考ヘテ所得。会余録本五行 37 教ト 38 遣トノ間、甚ダシク隔タルガ如ク感じテ、次行違誓、前行太王ヲ見ルニ皆同様。…

一二五ノ墓本ハ、明治十九年購入、何某ヨリトアリシト記憶。モ一度確カメラレタラバト思フモ、余リ気ノ毒デ、相変ラズ<sup>(272)</sup>。明治十九年購入ノ墓本ヲ、那珂博士が見ラレタモノト解シ得ル。

昭和 25 年・1950 年

11 月 12 日 朝鮮史料展覧会 国会図書館分室東洋文庫 廿五、十一、十二

好太王碑 第一面上大半部／5 稗麗／6 以辛卯年来渡□破百残／7 古須耶羅城莫／3 以道興治／4 振被四海／1 巡幸南下／2 然後造渡  
紙純白、墨純黒佳良ナ拓本ト見エタ。果シテ大正中期拓トセ〔ル〕ガ、漆喰ガ余リ□□モノデアラウカ。

墨ヲ用ヒテ界線ヲ消シ、字ヲ明カニスル工作ハ加ヘラレタルニ相違無キナガラ、字傍ニハ全ク加筆キモノノ如ク、漆喰ハ決シテ全ク加ヘラレテハ無シト思フ(振海等ニ拠ッタ)。肝心ノ履字見ラレズ。第二面、第四面ヲ見ルヲ得ザルハ遺憾。

説明ヲ聞イタニ、前問恭作氏寄贈、文庫蔵品、大正中期拓本トノ事(寄贈ハ古イ事ニアラズト云フ)。黄草嶺碑、粘蟬碑、拓本ハ以上三種ノミ。

【42】昭和 45～46 年・1970～71 年

昭和 45 年・1970 年

1 月 『景德伝灯録』、『陶樹靖節先生集』、『蘇文忠公詩編注集成』<sup>(満)</sup>

昭和 46 年・1971 年

『千葉県文化財総覧』、『煎茶早指南』、『胡蝶夢』、『古代歌謡集』、『中国の八大小説』、『剪灯新話』、『古今奇観』、『青木正児全集』、『世界考古学体系 7 朝鮮文化の成立』<sup>(大)</sup>

## 6. 稿本目次

### 【稿本A】『好太王碑文研究』（二冊本）昭和23年・1948年

1帙2冊、和紙袋綴じ、縦24.5cm×横16.5cm、計487葉・その他  
第一冊『好太王碑文研究序説』、本文156葉、初稿38葉、合194葉

好太王碑文研究序説目録 …1葉

第一章 緒論 …1葉～4葉<sup>(273)</sup>

第二章 好太王碑墨本概説

第一節 雙鈎廓填本（一 国立博物館本～三）

第二節 拓本（一 著録に見えた拓本 二 本稿所拠諸本拓本概説）<sup>(274)</sup>

好太王碑文研究参考文献 …参1葉～参2葉

好太王碑文研究序説目録 …目1葉～目3葉<sup>(275)</sup>

〔無題〕<sup>(276)</sup> …1葉～33葉、106葉、110葉

第二冊『好太王碑研究』、本文304葉、折込1葉、合305葉<sup>(277)</sup>

好太王碑文研究目録 …目1葉～目4葉

第一章 碑字研究 …1葉～211葉

第二章 碑辞研究 …212葉～300葉

好太王碑釈文（四面） …折込1葉

### 【稿本B】『好太王碑考』（三冊本）昭和24年・1949年

第一冊、四百字詰原稿用紙（コクヨ165）、仮綴 縦21cm×横15cm、45枚、通し46枚

第二冊、四百字詰原稿用紙、仮綴 縦25cm×横17.7cm、40枚、通し87枚

第三冊（体裁は第二冊に同じ）47枚、通し136枚<sup>(278)</sup>（総計132枚）

第一冊『好太王碑考』第一冊（計45枚）<sup>(279)</sup>

目次（表紙裏）

〔第一章〕好太王碑文考墨本考

（墨本総記） …1～4枚

一 拓本 …4～12枚

二 雙鈎廓填本 …12～17枚

三 墨本作製の年代 …17～32枚

四 雙鈎廓填本と拓本との比較 …32～40枚（合40枚）<sup>(280)</sup>

註 …註1～註5（合5枚）<sup>(281)</sup>

第二冊『好太王碑考』第二冊（計40枚）<sup>(282)</sup>

碑字攷目次・碑辞攷目次（表紙裏）



図5 稿本B（水谷著『好太王碑考』3冊）

〔第二章〕好太王碑字考 附、碑辞考 ……1～31 枚 (57 字)

好太王碑辞考 ……31～40 枚 (第一章合 40 枚)

天帝／河伯／女郎／造渡／不樂世位…竜首昇天／奴客 (6 項目)<sup>(283)</sup>

第三冊『好太王碑考』第三冊 (計 47 枚)<sup>(284)</sup>

目次 (表紙裏)

第三章 好太王碑文考 ……1～39 枚 (19 項目) (合 39 枚)

2 紀功墓碑の初／3 高句麗王世系／4 鄒牟王説話／5 儒留王の名／6 大朱留王の名／7 好太王  
諡号／8 称元／9 日の干支／10 高句麗文化進展と対慕容燕交渉／11 好太王治世の対慕容燕交  
渉／12 中国の侯王としての礼制創始／13 碑の文辞／14 諡法によらぬ諡号／15 碑の形制／  
16 碑の大きさ／17 碑字の大きさ<sup>(285)</sup>／18 高句麗文化の特性／19 碑字の別体／20 碑字の書体

註 ……註 1～註 8 枚 (合 8 枚)<sup>(286)</sup>

## 7. 末松保和氏関係記事

〔凡例〕 末松保和氏との交流を示す日記 7 件 (4. 日記抄録 (日記帳) からの抜粋), 書簡 5 通, 参考 2 件を掲出する。

### 【日記】

昭和 12 年 (1937)

1 月 21 日 (木) 曇り、後雨。午前九時過発。上野図書館。…史学雑誌四十六卷一号 (昭和十年一月号)、末松保和氏、好太王碑辛卯年ニ就テ。朝鮮金石総覧 (大正八年、三月刊、大正十二年補遺)。帰宅、六時二十分。

4 月 5 日 (月) 朝鮮史のしるべ、計・六〇ヲ買フ。

※巻末のメモ

購書目：朝鮮史のしるべ<sup>(287)</sup>、総督府編、文雅堂。

12 月 6 日 (木) 三日獲タ東洋学報十五ノ二、前問恭作氏、新羅上代ノ王譜ニ新ラシノ説ヲ□読み、序ニ前ニ蔵スル史学雑誌ノ末松保和氏ノ論議ヲ読み。

12 月 7 日 (火) 好太王碑、新羅□錦ノ参考ニ、前問・末松両氏ノ論文ヲ尚見ル。

昭和 34 年 (1959)

4 月 20 日 (月) 春夫、歴史教育 4 月号ヲ示ス。末松保和氏 (学習院大学教授) “好太王碑文” “史料解説” ヲ読み。新シイ見解ト云エバ、漢文ノ読み誤リニ因ルモノダケ (9 時 15 分記)。

4 月 22 日

※巻末のメモ

太王陵塚ノ存在ハ、太王陵即好太王陵ナルコトノ証 (好太王以前ニ太王無シ)。歴史教育 7 卷 4 号、1959 年 4 月、p83 - 91、末松保和、高句麗好太王碑文 (史料解説)。p89 下段末 8 行 “好太王陵に擬定される大墓としては二つある。一は太王陵、その二は…將軍塚である…

それぞれに論拠があって、いまだ決定的断定にいたっていない”。p91 上段末7行、“筆者横井忠直は、陸軍参謀本部の関係者であった”。角礫凝灰岩？（4/22 前 10.09）

#### 昭和36年（1961）

4月4日（火） 常夫、出発。九州旅行ダトイウ。昨年秋、卒業論文ノ取材ニ行キタイト云フテ居テ、果サナカッタ九州行キデアルカ。論文“島原一揆の研究”ヲ読ン□デ、末松保和教授ガ一緒ニ行コウト云ワレ、他ニ2人バカリ誘ッテ、旅行スルコトトナッタ由、10日頃マデ歸ルト。

#### ※参考1

##### 昭和46年（1971）

9月23日 水谷氏、李進熙氏とともに末松先生を学習院大学の研究室に訪問する（出典：末松保和「好太王碑と私」、1978年、末松保和博士古稀記念会編『古代東アジア史論集』吉川弘文館、1978年。のち『高句麗と朝鮮古代史』（末松保和朝鮮史著作集三）吉川弘文館、1996年。オンデマンド版2017年）。

#### 【書簡】

〔書簡1〕 昭和50年（1975）9月12日（水谷氏の末松保和氏宛て手紙、便箋9枚）

謹啓。 九月八日御筆の華翰を十日午前拝読しました。誠に御無沙汰を致して居りまして申し訳ございませんでした。御退職御閑地に悠遊なさって居らるる由大慶至極に存じます。御職務に在られる御忙しい中を閑人が御邪魔致すが気にかかりまして意識的に御疎遠に失礼しました点もありますので、唯今よりは是非御教示を願わねばならぬ事がありますので、殊に御書面で好太王関係に就き多年の〈以上1枚目〉 御研究の御蓄積を御発表の御予定と拝読致して一層是非御願ひ致したい事がございます。

李進熙氏『広開土王陵碑文の謎』（『思想』1972）『広開土王陵碑研究史上の問題点』（『考古学雑誌』五十八の一）から『広開土王陵碑の研究』（四十七年十月）『倭から日本へ』の中の『広開土王陵碑文と歴史の虚構』（一九七三年九月）『好太王碑の謎』（四十八年十一月）と大量の著作を以て日本の歴史学者を圧倒されたのは誠に瞠目に値する事実でした。

佐伯有清氏『研究史広開土王碑』（四十九年八月吉川弘文館）〈以上2枚目〉 朝鮮史研究会編『古代朝鮮と日本』（一九七四年十月龍溪書舎）両書を拝見して第一線の日本学者諸氏が全く李氏に押され放し意気全く挙げず、私老人（昨年十二月廿四日を以て八十一歳生きて参った事になりますように）何とも不思議で、やはり敗戦国民の悲哀さかと明治二十六年生れの人間慨嘆に耐えません次第。但此二三年殊に自覚しますのは頭脳の働きの甚しい鈍化です。李氏に前頁記載の『……研究』まで発刊直後に寄贈を受けまして一読三読しても〈以上3枚目〉 ナカナカ論理がタドレず、自分ながら脳力の弱化？に呆れました次第でして、申し訳にもなりますまいが、李氏に反論する責任を自覚しながら中中筆が取れませんのです。

御読みいただきました由の卑稿『好太王碑考』は素人金石文研究者の冒険的試論でしたが、唯一部見つけた碑の最初拓本を根掘り葉掘り致して書きましたものでしたが、幸運にも今一部の最初拓本が書道の大家の手に入りましたに因り、書道の方の雑誌『書品』に其写真版の〈以上4枚目〉

解説として掲載してもらえたものです。自然の事で書道の限られた目から認められたに過ぎません筈の処を李進熙氏に発掘された訳でして私としましては李氏に感謝せねばならぬではありませんが、反面に於て李氏が「水谷拓本」を見損われ、又或部分曲解された事を遺憾とせねばなりませんでした。処が前記の如く自ら頭脳の働きの自信を失いかけてしまつた此頃でして、果して今私が考えました処が現代の学者方に採り上げていただける価値が有るかドウか〈以上5枚目〉 自ら迷つて居る処でございました。

『書品』百号にクドイ程書きました通り好太王碑丈は真の碑面の脱碑で読まれねばならず、新碑面拓本は私の推論では、出過ました云い方ですが、「水谷拓本」と『書品』百号に通巻影出されてある金子氏蔵拓本との二部だけです。何とか私の蔵本を学者方皆様が熟覧され私のように根掘り葉掘り御研究されましたら従前の研究とは全く別の真の碑文を御諒解出来る筈と考えます。〈以上6枚目〉

最近まで右の如く考え続けてまいつた処、計らずも先生が改めて御執筆いただける事になりました由で誠に此上も無い好機会と歓喜雀躍と云う次第で、若し御希望がございましたら私の蔵本を御熟覧下さる訳には参りませぬかと思ひ附きました。中中サツと見ると云う訳に参りません大部の拓本でして御苦勞の御事ではありましようが、万一、ですが御気が向きますならば、拓本を、多分何日かをかけて下さって研究して見ては下〈以上7枚目〉 さいますまいか。私の個人の蔵品ですから御自由に御利用されたいのです。若し御気が向けばの話で、強いてと申すのではございませんからご遠慮なく御取捨下さいますように。本当は然るべき施設に展覧されるべき必要がありましようとは思ひますが、諸事不案内の老学究（窮の字がホントウですが）の私の考えです。

李氏の考證損ね等を訟えるべきでしようが、芳翰拝読の喜びの餘りフと心境の一端のみ右の如くです。又復〈以上8枚目〉 勝手な事を申し進めましよう、御「閑地」を御毀しする罪禍は幾重にも御容赦々と申上ます。

尚名古屋の吉田と申すは、京都帝大の濱田先生の研究室に数年研究を許されて帰名、長年当地方の新しい考古学の先輩の一人として活動しました吉田富夫氏の家で、縁は私の二女で富夫氏の未亡人という訳です。富夫氏が昭和四十六年十一月逝去後無人の為老人が留守番役を仰せつかつて居ます形です。先生方と同じ東京に住みたいのが本音ですが。当分動きがとれませんらしい。

久し振り遠慮無くかような私事まで書き留めたにて唯今の私の心持を御諒解下され、御無礼の辞もございましようが御許し願ひ上げたい次第でございます。 敬具。

昭和五十年九月十二日」 水谷悌二郎」

末松先生 玉案下〈以上9枚目〉

〔書簡2〕 昭和50年（1975）9月25日（水谷氏の末松保和氏宛て手紙、便箋3枚）

拝啓。 九月十六日の御書十九日午後拝読致しました。早速御返事申上ぐべきでしたが、老人遅い暑気にヨウヤク些か閉口致しました折柄で、且思い立った通りに直に実行出来ません老体の悲哀をかみしめてツイに御返事が遅れました。

先便勝手な御願を致しました処過分の御同情を賜わり拓本御検閲は更なり、或は写真版本をとまで御計画を廻らしていただいて居る由拝読、誠に有りがたい事で感激に耐えません。御実見研究御



済みの上若し御手数に相応〈以上1枚目〉いたす古蹟と御認め下さいましたならば、何卒御教示のような御図り方切望致します。凡べて御実査の上にて如何ようとも御判断を願いたく存じて居ります。

自省しますに老頭愈々老化現象明白に現われて来ましたらしく、自分ながら不甲斐無き昨今です。今少し判断推理の働きの有ると自信して居りましたが、今やスッカリ鈍物になりました頭を唯かかえて居る処です。好太王碑初拓本の立証が唯今の頭で再度組み立て得るや、学者方に御同意を得らるる丈の〈以上2枚目〉論理が展開出来るかドウカ怪しいものです。若し御気が向かれますならば、私一己の為にも、長年間の御思索法を以て古遺蹟の真価をご考證戴きたく、老人重ねて御考察を御願い致す次第です。

此二三日頃に涼気を覚えまして、私も稍身体も、従って頭も回復してきたようです。遅延ながら、月を越しましたら動き出せましょうかと思しますので、暫時御許しを願います。

五十年九月五日<sup>(289)</sup>「朝十時」 水谷悌二郎

末松先生 玉案下〈以上3枚目〉

〈封筒裏〉昭和五十年九月廿五日「名古屋市昭和区」広路町石坂四三「吉田緑方」水谷悌二郎

〔書簡3〕昭和50年（1975）10月26日（水谷氏の末松保和氏宛て手紙、便箋3枚）

謹啓。十月廿三日の御懇書昨日拝読しました。先月になりましたか、度々御懇論を拝読しながら御挨拶を怠りまして申訳なく存じて居ます処で、重ねて恐縮致しました。

御質問（一）の御答え。私儀好太王原石面拓本の入手先は東京都文京区弓町二の二三、文雅堂書店でございました。『書品』百号御覧下さるならば、其171頁の下段左端（広告の末行）に見えます。或は御存じかと拝察しますが、店主の江田勇次氏（治か二か、記憶確かではありません）は随分古くから懇意にしてもらって居ます方で、『書品』百号の拙稿も江田氏が書家の〈以上1枚目〉諸大家に見せて下さって、書家<sup>(290)</sup>の方の蔵に帰した好太王碑（金子氏本）原石拓本の写真版の解説として、長文の拙稿が刊行されました訳で、江田氏は抑々水谷拓本の発見将来者であり、且拙稿の発行事業の推進者の一人であったので、単なる本屋サンとは私には思えない方です。水谷拓本が何処で江田氏に見付けられたかの経緯は、時代が戦争（太平洋戦争）末期に当って居まして私から訊ねて見る気になれず終いでした。時は昭和廿年五月十五日午後でした、と申し添えましょう。〈以上2枚目〉

御質問の（二）の御答え。原石面拓本を入手できましたので、魚を獲る筈蹄とやらの役目を果たしたと考えました貧学究が、惜しみながら戦後の時勢の米塩の資に化しました。今も惜しくてたまらぬような気のする時もあります。売却先は神田神保町の山本書店でした（唯今正確な所番地を記憶しませんが、古い、支那書籍を扱う店）。同店では新しく書帙を作ってくれて店頭に出されてあるのを見てホッとした記憶がありますが、其後の行先は知りませ<sup>(291)</sup>ん。

五十年十月廿六日午前」 水谷悌二郎

末松先生 玉案下

種いろ頭に浮ぶ事を書き陳ねますと限がありませんので失礼な収束、御宥免を願います。又其中に御意を得ましょう。〈以上3枚目〉

〈封筒裏<sup>(292)</sup>〉昭和五十年十月廿七日朝書「名古屋市昭和区」広路町石坂四三「吉田緑方」水谷悌二郎

〔書簡 4〕昭和 51 年（1976）1 月 2 日（水谷氏の末松保和氏宛て年賀はがき）

謹賀新年。 拓本御調査を御願いすべく持参の心積の処方準備（写真新調等）の為ツイ時を費し居り遅延申訳ありません。ナルベク早くと心ヅモリ最中でございます。御許し下さい。

昭和丙辰元旦

名古屋市昭和区広路町石坂四三 吉田緑方

水谷悌二郎 』

〔書簡 5〕昭和 52 年（1977）1 月 29 日（水谷氏の末松保和氏宛てはがき<sup>(293)</sup>）

東京目黒の宅より、一月廿四日態々御電話にて御照会がありました旨、移牒を受け全く恐縮致しました。旧臘以来自分ながらジリジリして、毎日李進熙氏への答案を考えて居りまして筆が執れず、新年にも其ままに怠って居ります始末で老頭困ったもので、何とぞ御憐憫をと御願い致す他ございません。いずれ又詳報をと思つて居ります。〈以上表面〉

取りあえず葉書にて御詫び申上ます。一日年頭御挨拶を拝読致しました。直ちに御礼を申延べるべき処、當時は好太王碑に関して兼ねて気にかかり居りました李進熙氏説の批評を記述せねばと気になり居りました最中にて、其心情御諒解を得るべく旁々、其日には遂に御挨拶を致しかねまして、ズルズル御失礼を重ねてしまいました。老人は気の急ぐものと定つて居りますようですが、此<sup>(294)</sup>八十三？老人は例外と思われまして（若しや老廃現象かも知れませんが）中々テキパキと事を運べません。御コトワリばかり申す事になります。〈以上裏面〉

## ※参考 2

昭和 52 年 12 月 27 日（水谷氏の次男・吉夫氏宛てはがき<sup>(295)</sup>）

昔から口状通り「年内餘日」が無くなりました。御忙しい公私の年末でしょう。御変りが無いのが何よりです。廿四日御<sup>(296)</sup>著書留便を昨廿四日拝受。御手数ありがたく存じました。御方面違いの末松先生を訪うて下さった由、先生から此間拝承、御両所共御話が困難だったのではないかと想像するが如何でしたか。旧朝鮮総督府ではレッキとした高官の御一人だったのだが、其初対面の印象はドウでしたか些か私の興味が無いでもない所ですが。デハ御正月を迎えられるように祈ります<sup>(297)</sup>。

## 註

（1）——水谷悌二郎氏現存の日記帳は、本冊が最初の一冊である。表紙をめくった見開きに、墨筆で力強く「新生活ハ大正七年」と大書する。本文はおおむね同氏独特の鉛筆の小字で記し、その字体や文章の細密な書き方は終生変わらなかった。

（2）——乱読はすでに始まっていたようだ。日本歴史地理学会編『奈良時代史論』仁友社、大正 3 年か。高橋健自「本邦上古の服装」、岡部精一「奈良朝時代の風俗」、黒板勝美「奈良朝時代の文化史的観察」他収載。手帳末尾に「水谷悌二郎 三重県桑名町今片町／東京市麻布区

富士見町十五／京城南来倉町二〇三大藪方」とある。郷土・勉学・職業の三重の生活意識であった。

（3）——本冊の筆記は大部分インクペン。日記によれば 3 月まで京城の朝鮮銀行勤務。

（4）——本冊はみなペン書き。裏表紙に「意志力欠乏者」と墨書す。そこに、むしろ強い意志力への願望が読みとれる。

（5）——肉付き大字。

（6）——この一冊は「大正十年当用日記」であり、一年分の日記帳であるが、手帳小口に当該年次を記して「T

十・十一」とある。中をみると、大正11年は手帳末尾の余白を利用して、1月1日から横書き、逆ページで始まり、2月26日でおわる。つまり、同年3月～12月は現存する手帳群になく、現状では欠落していることになる。全冊、ペン書き大字。

(7)——この年、前半は日曜の遠出に、後半は写真・油絵に凝る。読書内容は実用的となり、乱読はやや姿を潜めた感じ。

(8)——写真に夢中。四月中の日記に東大文学部のことは一言もないが、同学部学籍簿に「東京帝国大学文学部(東洋史学科) 入学」と記録されている。

(9)——手帳にもスケッチあり。

(10)——手帳が小型になって日記の分量が激減し、書き方は鉛筆・小字に戻る。

(11)——今年は油絵で始まり、油絵と写真に夢中。以後は書名の代わりに、絵画作品の画題と覚しきもの多出す。年末に近く、読書感覚やや回復したか。

(12)——手帳の一日相当欄が極端に狭いせいか、鉛筆の極小文字でビッシリ記入。ただし、実質的な日記は巻末付録の無地紙のおよそ50枚(100頁)に、横書きで記入す。

(13)——本日退職。8月27日より日記は空欄。9月5日午後、心斎橋で国訳漢文大成『老子・列子・莊子』を買う(4円)。

(14)——「文学上ノ研究」を志したか。

(15)——妻方の香取に転居する。巻末・同日条に「午前十時頃ニ天王寺前マル東運送店デ、荷物ノ概数量ヲ超シテ、明日運送□□方ヲ□□シタ」とある。新住所は「三重県桑名郡七取村香取188番地 伊東方」(【7】裏表紙)。

(16)——この前後、読書と釣り。年初から読書量は五分の四になり、再読書が目につく。

(17)——購入書籍リストか。「月別・購書」の体裁はとらず、冊数も少ない。

(18)——前年9月より三重県香取の母の家に居たが4月に上京して下宿し、11月に家族と東京府荏原郡碑衾町(大字)衾114に落ち着く。いま東京都目黒区大岡山114。

(19)——この前後の連日、考古学雑誌を読む、古鏡関係。

(20)——これ以後連日「漢字系譜」を読む。

(21)——赤い傍線を引いて強調する。

(22)——池内教授の初出、ただしベケ。以下、なるだけ大学の様子を抜き書きする。本手帳の末尾に時間割りあり。

(23)——昭和2年度・火 原田淑人「唐代文化及其波及」

／水 藤田豊八「漢魏六朝ノ西域史」、池内宏「満鮮上代史」(ノートあり)／木 服部宇之吉「周礼」／金 原田淑人「希臘考古学」／土 宇野哲人「周易」、今井登志喜「史学概論」／竹田「支那語」 昭和3年度・宇野・原田・加藤繁・竹田(池内は受講せず)。昭和4年度・池内宏「満州諸族史」(ノートあり)・宇野「礼記演習」〔尚書註解〕〔宋代哲学史〕・加藤〔繁〕〔支那貨幣史〕・常磐大禪〔支那仏教史〕・塩屋温〔支那文学史〕・和田清〔東洋史概説〕・原田。 昭和5年度・ときたま原田のみ。当時の文学部長は滝精一(昭和2～6年)。

(24)——文求堂の初出。

(25)——琳琅閣の初出。

(26)——五月中旬まで大学・講義の記事は殆ど見えず。

(27)——始めて池内教授を聴講、これ以後毎週水曜日は聴講せしが如し。講義ノート「満鮮上代史(麗済羅史)一冊」は今月から翌年二月まで。なお、このノートには「広開土王ノ時代」がたった一度、それも講義始めごろの序論の中で、ごく短く触れたに過ぎなかった。

(28)——印信の件はしばらくつづく。

(29)——今年最初の広開土王碑文の関係記事、そして恐らく水谷日記における広開土王碑文資料入手の最初の記事か。

(30)——今年第二の広開土王碑文の関係記事。「高麗好太王碑」は上海・有正書局発行の『石印好太王碑』(呉氏本、上海有正書局石印『旧拓好太王碑』)。晚翠堂は港区琴平町1の晚翠軒(港区虎ノ門1-2、虎ノ門交差点角のみずは銀行虎ノ門支店あたり)。四八は48銭也。

(31)——以後しばしば「語石」を見る。この前後、各種拓本を見る。

(32)——「止メル」とは、今年度の受講か、次年度の受講か。4月25日条に「池内・黒板二教授イツレモ休ミ、ドチラカ聴カウト思ッタニ」とある。本年度は結局受講せず、ゆえにノートはない。

(33)——「石印好太王碑」は先年12月2日に獲た「高麗好太王碑」か。

(34)——下欠か。

(35)——これ以後しきりに拓本類を熟覧する。

(36)——今学期もよく宇野(儒教思想)・原田(考古学・人類学)・竹田(支那語)は聴講し、たまに加藤繁(貨幣史)を聴講す。池内聴講は見えず。

(37)——[1]は、頸を擡げた乙字様の尿瓶の如き図を描く。[2]は、上下二条の帯部分に短い斜線の群れが密集し、右下がりに刻されている図を描く。

(38)——日記手帳の末尾に「(九月)廿二日、新羅高麗

古瓦拓本、百三十許種（琳琅閣）。「廿五日、朝鮮古碑拓本、粘蟬碑・北漢山碑・昌寧碑、他数種（琳琅閣）」と見ゆ。

(39)——その後もしばしば嶺・池上方面に出掛ける。

(40)——手帳末尾に詳細な書物購入メモあり。凡そ 101 種。

(41)——今年の聴講科目。日記には纏って記していないが、池内講義を始め、宇野（水・礼記演習）（土・尚書註解）（水・宋代哲学史）、加藤繁（火・支那貨幣史）、常盤大定（火・支那仏教史）、塩谷温（火・支那文学史）、和田清（土・東洋史概説）、原田淑人（金・）等が見える。なお、講義ノート「池内教授講述、『満州種族史』（昭和四年四月至五年二月）」（「十四・三・廿一合装爲一冊」の小字追記あり）。同冊には「粘蟬県碑」が二度登場し、また「好太王碑」と「広開土王碑」が各一度ずつノートされたが、いずれも高句麗の建国に関連して引用され、冒頭の開国伝説をそのまま用いただけである。

(42)——「碑帖」とは前年末購入した石印本好太王碑をいうか。

(43)——巻末の月日別図書購入表に、「（六月廿九日）楊惲吾雙鉤好太王碑、南陽堂」とあり。

(44)——6～9日は前年に続き、鷗の木 of 第二次考古探訪なり。

(45)——日記本文は記さないが、月日別図書購入表によると、この日に、『三国史記』列伝欠、玉英」とある。

(46)——凡そ 97 部。

(47)——以後、6月21日まで毎土曜開く。

(48)——「好太王碑」4字を青で塗る。

(49)——これ以後、本碑について記述続出す（～12月18日）。

(50)——これまで手元にあったのは①「楊氏雙鉤好太王碑」（楊守敬の雙鉤本）、②「石印本」（おそらく石灰拓本、呉氏本か）、③「時代史巻頭ノ縮印」（久米邦武『大日本時代史 日本古代史』所収の1912年撮影の碑面・碑字）の三種。売ると決めたのは①楊氏雙鉤好太王碑。

(51)——手帳末尾に「月日別図書購入表」全 62 部あり。

(52)——この前後、『山海経』を熟読する。

(53)——以後2月10日に粘蟬碑攷の改訂終わる。

(54)——東大は3月31日付けで「除籍」となったが、水谷氏はその間、孝夫君が発熱（3月12日）し、看病に明け暮れたが、ついに薬石効なく死亡した（3月29日1時28分）。4月19日に桑名で納骨、20日に京都の西大谷本願寺に納骨す。水谷氏自身は4月初旬にやや体調を崩したが、その前後の日記には東大「除籍」のこと

は何も記していない。（ただし、「四月購書」には、「二十日法隆寺宝物図絵 京都文華堂」とあり、翌日は拓本を見、その翌日は名古屋で拓本をとり、23日東京に帰宅し、26日には「古鏡銘考釈」に取り掛かっている。

(55)——8月1日・3日粘蟬碑考を見なおす。

(56)——本年はこの前後、多摩川畔の矢口の渡し・羽田近辺で釣りをする。

(57)——全 55 部。その内訳は次のとおり。

(58)——以下、妻・秀の倒るる5月1日まで、書紀・三国史記・久米博士日本時代史・今西高句麗好太王碑論文を読む。

(59)——翌日「未完」、翌々日「終ッタ」とある。

(60)——東京市 35 区となる。帳末に「（昭和七、十、一日大東京編入）東京市目黒区大岡山百十四番地」東京府荏原郡荏原町会百十四番地 水谷悌二郎」とあり、旧住所は線を引いて消す。

(61)——全 59 部。

(62)——広開土王碑最初期研究の一連の4論文リスト。日記では、12月3日に「亜細亜協會會余録第五集」、12月14日に「神集國光（集）」を購入す。三宅米吉の名は欠。

(63)——「今泉氏天□菴」は未詳。「清写高麗好太王碑積注」とは、31日条の「永樂太王墓碑積文」、すなわち青江秀『東夫余永樂太王碑之解』である。なお水谷氏所蔵本の末葉を見るに「明治十九年十二月、以佐藤大人誠実之本筆写す（花押不明）」とあり、筆写依頼人は今泉氏である。次に水谷氏が「昭和八年一月三十一日、新宿三越楼上書物春秋会古書展観朝倉書店出陳ヲ購フ〔以下割注〕廿年□□、日記帳ヲ以テ記ス」と書く。ただしこれは、水谷氏が昭和10年9月10日帝国図書館で小杉相郎旧蔵本を借覧し、小杉の跋文を移録したのち、昭和11年4月20日に氏がみずから跋文を付した。水谷氏の昭和11年跋文は次のとおり、「帝国図書館蔵本〈写本一冊、八三〇・七六〉東夫余永樂太王碑銘之解〈荒山大捷之碑銘記事ト合冊〉ト題ス〈内題モ同ジ〉。巻頭附言ノ尾「撰釈者」識ノ三字ノ上ニ附箋シテ、朱書云フ「青江秀」ト。跋ト同筆ナリ。巻尾跋ニ云フ、〈右古碑注解、郷友青江氏命ヲ奉ジテ試ニ筆録スル所ナリ。注解ノ述意ニ於テ、聊愚見ヲ示ス所アリシヲ以テ、其原稿ノママニ写サシメ、寄贈セラルル者ナリ。明治十八年二月十八日相郎（朱文印）」。

(64)——日記帳末尾に「高麗好太王碑之解 新宿三越書物春秋会」とある。

(65)——「明治十七年解本ノ巻首ノ臨写本」とは青江「高



麗好太王碑銘之解」をさす。ここにおいて、手持ちの全資料を校合する水谷氏の方法の初源形態を見る。ただし、今回は2月3日で終わり。

(66)——これが日本最初の王碑研究「青江秀の碑銘之解」への水谷評である。

(67)——日記帳末尾に「南淵書 三冊 琳浪閣」とある。それへの批判は、次の31日条・6月16日条、および昭和10年9月7日条をみよ。この7日に該本を「偽釈文」と決めつけ、まもなく売却する。

(68)——佐伯有清『研究史広開土王碑』によれば、昭和8年1月、黑板勝美が東大の学生の質問に対して「そのまま信用することは出来ない」と答えてから話題になり、『歴史公論』2-5が特集「問題の南淵書批判」を組んだのは同年5月であった。そこではすでに松岡静雄・竹内栄喜が「南淵書の第三面冒頭の一行無視」を指摘していて、水谷氏日記の本条のと同意見である。ただし、その前後関係はみな「五月」に納まって、甚だ微妙である。水谷氏の日記巻末に「昭和八年二月十二日東京日日新聞」とあり、黑板博士の反論がメモしてあり、同氏がそれに触発されたことは推定できる。さらに、『歴史公論』5月号が「南淵書」問題の特集し、その話題で賑わっていたなかで、水谷氏の日記と雑誌の発行時期が余りに接近しているので、両者の関連性を考えてみたくなる。しかし、日記巻末の『歴史公論』5月号は「昭和八年購書」目録（雑誌をふくむ）になく、購入していない。同誌については所収論文・論者・論旨等をふくめて、関連記事はかれの日記に一切にない。日記になくても、どこかで見て、それに触発されたことは否定できないが、見ていなかった可能性も捨てきれない。それどころか、かれの綿密なメモぶりを知るものにとって、その可能性はかなり高かったと思われる。

(69)——日記帳末尾に「亜細亜協会余録、一集至十五集 白木屋古書展・琳浪閣」とある。

(70)——広開土王碑に関する論攷はこの「高句麗好太王碑字数攷」が最初であろう。

(71)——全127部。

(72)——のち返還か。

(73)——のち返還か。

(74)——帳末「購書」7月11日条に「『高句麗好太王碑』縮印七条版画第四枚白木古書會文行堂」とあり。翌日条によれば、これは水谷悌二郎『好太王碑考』（開明書院、昭和52年）に、「3三井縮尺影印本（1面1枚計4枚）」とするものである。

(75)——以下欠。

(76)——帳末「購書」9月26日条に「『日本古代史』上・下 久米博士（布製本）」と見ゆ。

(77)——この頃、東大諸先生の講義ノートを取り出して見る。

(78)——帳末「購書」10月26日条に「『海東繹史』、総督府『朝鮮図書解題』、高橋亨『朝鮮宗教史に現れたる信仰の特色』」とあり、朝鮮関係の図書を買う。計一〇円五〇銭ナリ。

(79)——全79部。

(80)——「国史ノ研究」とは、昭和七年刊行の黑板勝美博士『更訂国史ノ研究』であり、同書各説上は水谷悌二郎『好太王碑考』の基本資料5に該当し、王碑写真（部分）を掲載していたものであろう。

(81)——帳末の購書リストの本日条に「『高句麗永樂太王墓碑調言』長白榮禧攸峯、光緒廿九年著（謄写版本）白木屋古書・水谷書店」とあり。

(82)——帳末の購書リストの本日条に「『東夫餘永樂太王碑雙鈎本』明治十九年、日本橋三越・一誠堂」とある。

(83)——まだ石灰塗布に気付いていないが、すでに初出の「最初拓」の表現が見られる。

(84)——決定的な「南淵書」釈文への批判。それは「書苑第五号ノ釈文」（羅振玉釈文を指すか）をもって、「偽釈文ノ基礎粉本」（「偽釈文」とは南淵書碑文）と断定す。

(85)——帳末購書の本日条に、売り払いリストが並記され、それには「朝鮮図書解題二・——、南淵書二・——」その他がある。

(86)——全131部。

(87)——巻末購書目に「〔正月〕廿八日、国史の研究各説下、岩波」とあり。「三・五〇」は三円五〇銭。

(88)——巻末售書目に「〔四月〕九日、国史の研究各説下巻、黑板勝美博士著（大岡山中山書店）」とあり。

(89)——かとりはずま、東京美校の美術文庫、東京国立博物館の関係者、鑄金家。この後、度々日記に登場し、戦時中には三重県桑名市多度町香取（妻の実家か）に疎開している。『国史大辞典』「かとりはずま 香取秀真」項（富山秀男氏執筆）によれば、「明治から昭和時代にかけての金工家、歌人。本名秀治郎、六斎・梅花亭などと号した。明治七年（1874）1月1日千葉県印旛郡船穂村（印西市）に生まれる。同30年東京美術学校鑄金本科を卒業、32年同校の研究科に進むと同時に、正岡子規について歌の道を修めた。36年から母校で鑄金史を講ずる一方、創作面で同41年東京鑄金会を、大正14年（1925）工芸済々会を興して活躍。また昭和2年（1927）には帝室第4部（美術工芸）の創設に参画してその委員・



審査員となり、同4年帝国美術院会員ならびに国宝保存会委員、同8年から18年まで東京美術学校教授、翌9年帝室技芸員、12年帝国芸術院会員となる。金工界のみならず広く工芸界の中心的存在として工芸の発展振興に尽力、同28年文化勲章をうけた。翌29年1月31日死去。80歳。作品には香炉・花器・釜・梵鐘など古典的モチーフを引きつぎながら、豊かな技術を生かした品格の高いものが多い。また東洋金工史の研究に大きな業績を上げたことでも知られ、『日本金工史』『金工史談』『続金工史談』その他の学術的著述も多く、さらに随筆集に『輔祭（ふいごまつり）』、歌集に『天之真神』などがある」とある。

(90)——巻末購書目に「〔九月廿一日〕高麗国永楽好太王碑釈文纂攷、鄭文焯（琳琅閣）」とあり。

(91)——上欄に「初拓好太王碑入手」、巻末に「十月七日、初拓好太王碑、拓本剪貼十二冊、銀座松阪屋第一古書展琳琅閣」「好太王碑拓冊／平面一尺×六寸／高二寸七分」と記す。「郵便局デ四〇——受取り」の「四〇——」は、いつもの書き癖で四十円。

本日は記念すべき善き日。水谷氏はこの日、この時、宝物の剪装本「初拓好太王碑」12冊（本人は当日の日記で書名の「初拓」を信じ、これを「原初拓本」「原石本」という。のち「水谷旧蔵精拓本」と命名する）を獲得した。また該本と対比しつつ、他の墨本について「墨ヲ用ヒタ」、あるいは「石灰ヲ用ヒタ後ノモノ」といい、「加墨本」「石灰本」の実在を指摘している。この日の日記は、上段「七日」条の右から、いつもと同じように普通に書き始めたが、その末行は下段「八日」条の左端にそのまま書き下ろし、以後各行は右へと進むという書き方をしている、その記述はコラム七日分から九日分に亘っている。筆跡からみて七日条以下は同筆であり、「九日午後一時半」に三日分を一気に書き上げた模様。宝物獲得後の数日間の興奮が、文面に漲っている。

「書道全集第六巻所載本」の『書道全集』は昭和8年5月8日六四円で購入。

(92)——前日の七日条を参照せよ。

(93)——9日条は、これら六字だけを大書して22日まで続く。

(94)——高句麗墨書墓誌とは、いわゆる「牟頭婁墓誌」である。

(95)——巻末購書目に「十一月廿三日、高句麗好太王碑縮本、大正七年刊、解説・釈文ヲ附ス、発行不明、白木屋文行堂」とあり。朝鮮総督府、1918年発行。

(96)——巻末購書目に「十二月三十一日、朝鮮金石攷、

葛城末治氏著、巖松堂」とあり。

(97)——「好太王碑拓冊」とは、「初拓好太王碑」（剪貼、12冊）をいう。

(98)——巻末購書目に同じ。「二・三〇」は二円三十銭。

(99)——かつてかかる「倭」の釈文を知らず。

(100)——末松保和氏に関する最初の記事。

(101)——香取秀真『日本鑄工史』第1冊、郷土研究社、昭和9年。この前後、香取氏との接触多し。

(102)——「長二郎様」は洗足池の水谷一族。今から名古屋、桑名に旅行する。

(103)——巻末購書目に「朝鮮史のしるべ、総督府編、文雅堂」とあり。同書は「末松保和著」である。

(104)——「広開土王碑拓本」撮影の件は、次条を見よ。参考：同月23日、「本通杉山写真館ニ粘蟬碑拓本撮影ヲ依頼シテ来タ。カビネ、原版及印画二枚デー・五〇」。

(105)——「好太王碑初拓本」の複写を始める。

(106)——この「満洲民族史講義筆記」は、水谷氏が講義に出席して筆記したもので、大学ノート二冊を一冊、全122頁（枚）に作り直し（昭和14年3月22日条参照）、表紙に上段から「満洲諸族史／○漢ノ四郡、○高句麗ノ建国／○魏ノ東方経略、○夫餘／池内教授講述／昭和四年四月一至五年二月／水谷弟生筆記／十四、三、廿一爲一冊」の七段にわたり記し、第一頁に内題「北朝鮮に於ける漢民族の発展」等とあるが、その左上に池内氏の訃報記事（朝日新聞廿七、十一、三朝）を切取って貼っている。以下は講義の筆記であるが、見開き右頁は几帳面なカタカナ混じりの文章、左頁には小見だしや自分の意見等が書き込まれている。そのほかにもう一冊「満鮮上代史、麗済羅史」（昭和2年5月～3年2月）もある。みな池内氏の当時考察中の研究であり、ほぼ講義の終了直後に各々学会誌等に発表されたが、この筆記ノートや論文を比べると、水谷氏のその後の学問遍歴に深い影響を与えたものと推定できる。

(107)——10月4日～11月10日まで、昭和33年日記帳（【32】）の末尾に書き出している。概ね原文と同文。

(108)——日記帳四日分のスペースにかけて、これら八字を大書す。

(109)——オモテ表紙裏に「10/20、好太王碑拓本写真分類」とあり。昭和8年2月1日の5資料による対校法を意識的な第一歩として、本日条の比較対照法はその第二歩の発展であり、後の原石拓本の大発見に繋がった。「拓本写真五種」の内訳は不詳であり、「写真」に限れば不明というほかない。あえておもうに、上海石印本・亜細亜協会本・神州国光集・三井家本のほか、黒板国史の研

究または日本時代史写真を加えたものか。

(110)——葉昌熾『語石』の碑估李雲從のこと初出。

(111)——※は装置を図示した位置。いよいよ、好太王碑拓本の俯瞰撮影を考案し、装置を作り始めた。これが翌日条に見える「プロセス乾板」で、東大文学部に寄贈された「水谷悌二郎氏遺品寄贈目録」中の、「好太王碑原石等拓本ガラス原板48枚」の内の31枚に当る。この枚数は11月24日条にドンビシャ、「三十一枚が正シク初拓好太王碑」とある。武田幸男「〈水谷旧蔵精拓本〉の実像を求めて—その実態解明と類型論—」（『朝鮮文化研究』7, 2000年3月）参照。

(112)——「爲我連／下迎王」は、やはり会心の出来だったと見える。

(113)——「末松保和氏」三度目の登場、翌日も続く。前問恭作「新羅王の世次と其の名につきて」『東洋学報』15ノ2, 大正14年11月, 京都大学文学部国語学国文学研究室編『前問恭著作集』京都大学国文学会, 1974年に再録。

(114)——巻末に「五月八日、高麗好太王碑楊氏雙鉤刻本、六冊、南陽堂。高句麗永樂太王古碑、明治四十二年、大森松四郎氏輯、(横井「忠直」氏、高句麗古碑考。榮禧氏、[高句麗]永樂太王墓碑調言)々」とあり。

(115)——巻末に「六月十四日、考古学研究、三宅米吉博士論文集、渋谷・明世堂」とあり。

(116)——これが水谷悌二郎『好太王碑考』の「7 楊氏本」である。日記5月6日条に秦漢瓦当漢鏡拓本冊二冊を二五円で購入したことを記す。本日差額50銭を入れたので、「寰宇貞石図」は二五円五〇銭であった。巻末に「六月廿四日、寰宇貞石図、六冊、支那板、即好太王碑アリ、文雅堂」とある。

(117)——「寰宇貞石図」五字の周りを□で囲む。

(118)——本月末尾の空欄に記す。「初拓好太王碑」は所謂、水谷旧蔵精拓本（石灰拓本、剪貼本）をいう。

(119)——「帝室博物館ノ好太王碑初拓本」とは、酒匂将来本。

(120)——「寰宇貞石図」五字の周りを□で囲む、以下同じ。

(121)——「雙鉤本」は楊守敬(惺吾)の雙鉤本、「初拓本」は多分「酒匂本」でなく、水谷旧蔵精拓本を指すのであろう。

(122)——巻末に「史学雑誌、昭和十三年一月号、池内教授、広開土王碑。〔「広開土王碑発見の由来と碑石の現状」『史学雑誌』49ノ1〕」とあり。

(123)——巻末に「満州金石志、羅福頤氏編、三冊、京都・

臨川書店。補遺外編校記一冊」とあり。

(124)——池内博士講義ノートをいう。

(125)——巻末に「満州金石志稿、第一冊、満鉄調査部編、悠久堂」とあり。

(126)——水谷論文に、香取秀真先生が博物館本を一瞥し、「雙鉤廓填本」と見抜いたとあるのは、蓋し本日のことであろう。なお「一部」とは、岸田吟香寄贈の臨写本。

(127)——末尾付録に「三月八日、満州金石志別録一冊、琳琅閣」とあり。

(128)——末尾付録に「三月二十日、藩故一冊、臨川書店」とあり。

(129)——一円二十銭。

(130)——この日、向島高女に出講の様子。

(131)——末尾付録に「五月廿三日、海東金石苑補遺、彙文堂」とあり。

(132)——末尾付録に「五月廿四日、朝鮮金石総覧上冊ノミ、白木〔屋〕古書展、窪川書店」とあり。

(133)——末尾付録に「七月六日、高句麗永樂太王碑歌攷、王志修、京都臨川書店」とあり。

(134)——末尾付録に「七月十日、国学論叢一ノ乃至二ノ二、六冊、臨川書店」とあり。

(135)——「狂人ニ正宗」とは、なんとも厳しい劉節評だ。

(136)——「好太王碑初拓本」とは、昭和11年10月取得した所謂「水谷旧蔵精拓本（石灰拓本）」をいう。

(137)——末尾付録に「十月十一日、朝鮮史第一編第一巻朝鮮史料、第三巻支那史料、上野振興会第一古書展悠久堂」とあり。

(138)——本年の日記帳には、上記の正月4日分と同旨の文章が重複して書かれているので、次に記す。「1月4(木)夕、好太王碑研究、第一章墨本の研究、第一節総説、第二節雙鉤廓填本ノ第一帝室博物館論。／5(金)好太王碑研究、続キ。／6(土)好太王碑雙鉤本、潘氏・李氏・呉氏三本論、未完。／7(日)好太王碑、雙鉤廓填本論、終ル。」

(139)——この文、本日条か、翌日条か、あるいは両日条に係るか不明。

(140)——日記末尾に、「遼東文献徴略」の資料抜書メモ2頁あり。この頃、妻の入院・通院。この前後から、「多度寺資財帳註証」を調査執筆始める。

(141)——欄外に「◎好太王碑古本一例」とある。

(142)——「念頭ニ残ル」とは、前年11月22日の熟覧のさいのものか。この前後、国学院大学の乙益氏、本条に乙益・樋口清之教授の名見え、6月5日条に「大物」大庭磐雄氏の来訪あり、翌日は岳翁三鷹の大庭氏を訪問。

みな子息春夫氏の関係。

(143)——羅振玉著『碑別字』。この前後、妻の看病記事続く、10月27日死亡。

(144)——この前後の数年、西夏・女真文字に凝る。

(145)——これが水谷氏と水谷原石拓本の、運命的な出会いの瞬間。同氏はこのあと南陽堂で本を買い、神保町街をみて、また南陽堂に来たのが午後「五時」ということからすると、かの瞬間は同日お昼過ぎ、午後二～三時ころだったか。帰宅は六時半。「蔵本」とは、所謂「水谷旧蔵精拓本」を指す。

(146)——この日記帳は紙質悪く、すでに黄ばみ、破れかけている。

(147)——この頃、上野図書館に通って諸本を読む。

(148)——この前後に見える「好太王碑初拓本」「初拓好太王碑拓本」は、いずれも後にいう「水谷旧蔵精拓本」である。

(149)——本日条の「□」は原文のまま。ここの釈文「□破四海覆□破使迴城」の行格の位置は不詳、後の精密な「水谷釈文」に比べると、なおまだ成熟せず。

(150)——「初拓本」は、古くより水谷氏愛用の「水谷旧蔵精拓本」(石灰拓本)であろう。『国史の研究』は黒板勝美『更訂国史の研究』(岩波書店)。同書所収の碑石写真は、勿論石灰が塗布されて、かつ部分的なものである。

(151)——『朝鮮史』一之三は、朝鮮史編修会編、第一編第三卷「支那史料」。

(152)——壕とは水谷氏が自宅の庭に作った防空壕。

(153)——「満州金石志稿」第1冊・第2冊など、多数の書冊及びその他のメモあり。

(154)——4月13日は、東京下町が米機B29の絨毯爆撃の空襲にあう。

(155)——この日、『好太王碑研究』第二章碑字研究(現存)が完成。

(156)——「目黒東貯」とは目黒の日本貯蓄銀行のことであろう。水谷氏は本日、真砂町文雅堂より「水谷蔵原石拓本」(所謂「水谷拓本」、武田類型説にいう原石拓本、いま佐倉の国立歴史民俗博物館蔵)を入手し、これを「最初拓本」と呼んだ。水谷悌二郎『好太王碑考』(開明書院、昭和52年)に、「8水谷蔵原石拓整本 昭和二十年(一九四五)五月、私が獲蔵した拓本」(3頁)、「昭和二十年五月結論に達し得、漸く仮面絶無の真碑文の形を推理し得た時、其二年程前に見かけた古い拓本の事を想起し、再び書店に請うて検討して、其正しく私の推理した原石拓本の形を具備するを確認した。此古拓本——私

は原石拓本と呼ぶ——は…」(126頁)とある。また末松保和「(水谷悌二郎『好太王碑考』)解説」は、これを敷衍して、「〔水谷〕氏がこの拓本を本郷の古書店(文雅堂)の店頭ではじめて見られたのは、昭和十八年のころであった。二年ののち、二十年五月、再度該書店にいたって詳しく検討し、その時までには氏が追求して「仮面絶無の真碑文の形を推理し得」ていたところと、この拓本との一致を確認されたという。日ならずしてこの拓本は水谷氏のものになった。爾来三十年である。」(140頁)という。「文雅堂」の名を出しえたのは、末松先生の質問にたいして、水谷氏は先生宛て昭和50年10月26日付け書簡(「7. 末松保和氏関係記事」書簡3)で、拓本の「入手先は東京都文京区弓町二の二三、文雅堂書店」である旨、答えられていたからである。なお同書簡には、「江田〔勇二〕氏は抑々水谷拓本の発見将来者」,「水谷拓本が何処で江田氏に見付けられたかの経緯は、時代が戦争(太平洋戦争)末期に当って居まして私から訊ねて見る気になれず終いでした。時は昭和廿年五月十五日午後でした」等ともあって、日記本条と対応する。さらに、江田氏が水谷拓本を入手したのは、『日記』昭和22年3月7日条によれば、場所は北京か瀋陽(はじめ前者、のち後者とときく)、日本に将来したのは昭和17年であるという。

(157)——「古拓」とは「新獲本」、つまり「水谷拓本」(原石拓本)をさし、「精拓」とは従来から手元にあった「初拓」つまり「水谷旧蔵精拓本」(石灰拓本)をいう。のち、末松保和先生が水谷旧蔵精拓本の行方を質問したのにたいし、同上の水谷書簡で、「原石面拓本を入手できましたので、……惜しみながら戦後の時勢の米塩の資に化しました。今も惜しくてたまらぬような気のする時もあります。売却先は神田神保町の山本書店でした」云々と述べておられ、また私、武田幸男「〈水谷旧蔵精拓本〉の実像を求めて——その実態解明と類型論——」(『朝鮮文化研究』7, 2000年3月)が記したように、山本書店でも行方知れずであったが、その後2012年に岡山県浅口市金光図書館現蔵が確認された。

本条の「加工ヲ今カラ窮明セントス」の意気まことに宜しく、後日、水谷氏は論文「好太王碑考」第一・二章でそれを実現することになった。

(158)——「東一」「東二」は、水谷蔵原石拓本第1面(東)の上から第1・2紙をいう(各面みな上中下3枚、合計12枚)。

(159)——後続かず。

(160)——「好太王古拓本」とは、言うまでもなく水谷

原石拓本。この後も連日の如く空襲はなはだし、「壕生活」なる言葉も見ゆ。

(161)——当日条以下、時局についてしばし記すところ多し。

(162)——当時の生活がにじみ出ている。

(163)——5月16日条に「新獲本」＝「古拓」(＝後の「水谷原石整拓本」)と、「精拓」＝「初拓本」(後に売却、いま金光図書館所蔵)と区別して呼んだが、本日条に前者を「原石面拓本」と書く。最後の一句は、例の如く追記。そのとき「直二……デアル」に線をひき、消去したのは、その後調べて、榮禧積文の「碑」たるを確かめたからであろう。榮禧の積文・拓本に対する水谷氏の見方が解って興味深い。

(164)——17日条はまだ「原石面拓本」、本日19日条で始めて「原石拓本」の表記が現れた!!

(165)——末句は追記、その前句も古い追記。

(166)——岳翁からの葉書(一月)に「香取秀真先生御夫妻、邸内へ滞住ト見エ、自炊サレル」とあり。

(167)——これ以後、しきりに文雅堂を始め、古書店に出向き、古書を売買する。

(168)——「原拓本」(「水谷原石拓本」をさす)は、江田文雅堂が昭和17年に奉天(または北京か)で入手、日本に将来されたことがわかる。

(169)——本条は、18日に15日～当日のことをまとめて記したもので、水谷日記によくある追記の一例。

(170)——本条もまたカッコして追記したもの。「原拓本」の文字に注意。

(171)——本条の( )内も追記、以下同じ。

(172)——「原石拓本」の表現は、この手帳日誌ではここが初出(日記帳の初出は昭和21年7月19日条)。

(173)——「疲レルガ、心ハ昂ブ」ったのは、午前見た好太王碑のせい。なお特別観覧の内容は「5. 日記抄録(看聞抄録)」【41】(昭和23年)参照。

(174)——「古形」は現存「稿本A(第一冊)」に今なお存す。以下、「6. 稿本目次」【稿本A】参照のこと。

(175)——草稿の序説・第一章・結論について、修正しながら浄書し終えた、ということであろうか(9月17日条参照)。

(176)——この日、酒匂・博物館本につき考究す、「5. 日記抄録(看聞抄録)」【41】参照せよ。

(177)——これが現存の「稿本A」(『好太王碑文研究序説』第一冊)である。後の補訂を無視して復元すれば、現存『好太王碑文研究序説』の「163葉」は水谷氏の所謂「初稿」の頁数に一致する。つまり、それが現存『好太王碑

文研究序説』一冊の中の本文1～149葉である。なお現存一冊には、なお参1～2、目1～3、(無題)1～20・29～33、雑106・110が付載されているが、その(無題)はもと本文から除き、所謂「再稿」のとき旧態を残そうとした部分であって、同冊目録にいう「緒論」に相当するか。結局、現存する一冊は初稿から削除した部分、その他を併せて綴じたものであり、その後もしばしば手を入れて成冊したものである。

(178)——「序説ヲ書き終り、十三日目次ヲ書き綴ル」というのは、本日のことではなくて、13日までの仕事を指すのである。「稿本A(第二冊)」の水谷メモは、八月「十五日本論を書き始め」たという。

(179)——「210葉ト2行」は、まさしく現存「稿本A(第二冊)」の頁数・行数と一致する。結局、通しナンバーの「第二章」でなく、第二冊の初章として「第一章 碑字研究」と命名した。

(180)——「稿本A(第二冊)」の水谷メモは「九月十五日第二章を終わった」という。この「第二章」とは勿論、日記本条の碑辞研究に当たる。

(181)——字・辞・目(第二冊第一・二章、目録)の浄書が完了。ただし、「第三章」と「積文」はまだ。「積文」が出来たのは翌月10月16日。「第三章」についてはその副本を「写定」した事実を翌昭和24年11月22日条に見るだけであり、不審である。

「第三章碑文研究」の執筆、および名称の出現について考証する。「稿本A(第二冊)」所収「第三章 碑文研究」の初出は、日記昭和24年11月13日、続いて同年同月22日であるが、それは同月13～22日に連続して「第三章(碑文研究)」を「写定」した作業において、初めて出現した表現であって、それ以前にその名は出てこない。また、「稿本A」に付した「水谷メモ」も「昭和廿三年八月一日序説を書き始め、十日終わる。十五日本論を書き始め、九月十五日第二章を終わった。今年〔昭和24年〕五月まで刪改数次。十一月十三日第三章を写し始め、廿二日に終る」とあり、日記と符合する。「第三章」が昭和24年11月13日以前に出てこない事実は、まことに不審である。これに対する考え方は二つ。第一は、「第三章」は昭和24年11月13日に「書き」始め、初めて22日に完成したという説。ただし、これは下線部「写し」を「書き」と解釈したものであるが、水谷氏は前以て「書」いた文章を「写す」という場合に使うので、違和感が少なくない。第二は、「第三章」の名は11月13日前後に初めて付されたが、その実態(狭義の、または後の、「第三章碑文研究」)はそれまでに、すでに「書



き」あげられていたという説。これは第一章・第二章に対して、とくに「第三章を書き始めた」旨の記述は全くなく、すべて「写し始め」た旨の記述だけであることから自然に導かれる推定である。とすれば、その実情は次のように考えられるであろう。即ち、a 昭和23年9月15日、「第二章碑辞研究」が完成した。b 「第二章碑辞研究」には、すでに後の「碑辞研究」と「碑文研究」とに相当する内容が含まれていた。c 昭和24年3月7日、二冊本『好太王碑文研究』（稿本A）の副本作りが始まり、その過程で「碑辞研究」の有り様が問題となった（恐らく二分して、元の章題の第二章「碑辞研究」に属する部分と、新章題の第三章「碑文研究」部分とに整理されていく）。d 幾許かの中間期を置いて、同年11月13日、第三章「碑文研究」の「写定」（副本の作製）が始まり、一部補充しながら、作業は22日に終わった。

(182)——「釈文」が出来あがって、『好太王碑文研究』第二冊が完成し、従ってそれを含む二冊本『好太王碑文研究』、即ち「稿本A」もまた完成した事になる。本日条で「完成シタ」というのは「釈文」だけでなく、「釈文」を貼った「碑文研究」にもかかる記述かと思われる。この「碑文研究」は、第一章「碑字研究」と第二章「碑辞研究」に対応する第三章「碑文研究」とも解釈できようが、実際はそうではなくて（その実態は「第二章」に含まれてはいるが、まだ「第三章」の名はなくて）、先月17日に「修正」した「稿本A」第二冊の『好太王碑文研究』を指すのであろう。ただし、前註で推定したように、「第三章」の名はないが、その実態（狭義の「碑文研究」）は「第二章碑辞研究」に含まれていたであろう。昭和24年11月22日条も参照せよ。

(183)——手帳日誌のここに挟まっていた小紙片の一面に、次のように書かれている。「七十 三傳氏跋は会余録本に従うまゝである。長白彙徴録は殆ど挙ぐべきものは無いと云はねばならぬ。唯一の雙鈎本にみる釈文は□□□□の□□□徴録のみである。／七一 三□本 五本／八三左 四 遼海叢書二遼東文献徴略に釈文として大部分其まゝに載せられ（拓本と□□に□る処は刪られたが、拓本に無い□氏文は多く其まゝ編入されて……）。また他面には「百八 二 戴裕沈氏／左 日惜哉／百十末 通溝上図版三七／左八 通〔溝〕上図□何時撮影されたのであろうか。履字の見ゆるは大正七年のと明かに異なる」、同面の左末に「昭和六年の島田好氏の考證の所拠本とされ、□□□□にも 一一一 三 文献にも（まで）／一一一 四 検覈する必要あるのは…／一一五首 信用（数）」とある。以上の小紙片の断片的な文章は、たぶん

碑字研究に関するメモの一部であろうが、何時書かれたものかわからない。

(184)——「好太王碑文研究三冊」とは、「稿本A」の第一冊・第二冊、及び10月11日に「綴ジテ冊子」とし、25日に「序例ヲ作り書」いた「好太王碑字及證例臨摹」を指すのであろう。

(185)——「鄭孝胥」の名に注意せよ。のち、末松保和氏が「鄭孝胥拓本」に言及したことあり。それは比田井南谷氏蔵の拓本をさしていったもの。「二十年前」は、昭和3～4年（1928～29）だろう。

(186)——一日条に「岳翁御手製ノ帙」といい、二日条に「幀主例ヲ、紙ヲ貼ッテ本文ニ増補スル」ということからすれば、一帙二冊本の現状に符合する。

(187)——「稿本A」水谷メモに「今年五月まで刪改数次」とある。

(188)——この頃、盛んに古書・拓本類を売買する。

(189)——「稿本A」水谷メモに「今年（昭和24年）…十一月十三日第三章を写し始め、廿二日に終る」とある。

(190)——ここで二冊本「稿本A」（現存『好太王碑文研究』）の副本完成。ただし、「正本第三章」の完成はこれ以前の日記に見えず、不審なり。いま現物を見るに、帙あり、朱肉の「悌印」あり、「写記」あり。写記に「昭和廿四年十一月三十日午後此記を添へた」と記す。

(191)——帙は22日に岳翁の恵造になり、本日の記述は現存帙の造りに合致する。

(192)——「概要」とは、短くコンパクトにせよの意。それが現存の三冊本『好太王碑考』（「6. 稿本目次」【稿本B】）執筆の動機になった。

(193)——10日からの「起艸」は、「稿本B（第一冊）」の執筆開始。「十三」以下は追記。「十六（金）40〔葉〕。終ニ註ヲ終ル」は現物に符合。現物の水谷メモによれば、第一冊は12月16日稿、第二冊12月19日稿、第三冊は12月23日稿とある。「稿」は稿了、原稿執筆が完了したの意。

(194)——「稿本B（第二冊）」執筆の開始とその終了。「十八」以下は追記。19日「□考マタ□終ル」の□はエンピツ細字が擦れてみえず、第一字「辞」であれば、現物・内容ともに符合する。

(195)——「39枚」は現存「稿本B」第三章のそれと合致する。ゆえに、「稿本B」の大略が執筆終了を意味するが、なお「註」「目次」「釈文」等には触れず。本日条は全部追記。

(196)——論文「好太王碑字の変相」の出現。

(197)——「撰要」は即ち「稿本B」。



(198)——「稿本B」の目次であろう、四日後に江田氏に渡す。

(199)——江田文雅堂の勇二氏、水谷論文発表の件で西川寧氏に仲介をはかる。

(200)——「旧稿」は未詳。ただし日記の流れから考えて、「稿本A」の可能性が高いようだ。

(201)——香取秀真先生逝去する。

(202)——「四分冊稿本」(分冊第二・第一章碑字研究)末尾メモに「昭和廿九年二月十六日写畢」とあり。符合する。

(203)——「四分冊稿本」(分冊第二・第一章碑字研究)(144～316頁)末尾メモに「廿四日読直シ綴ジタ」とある。日記に見える最後の頁数も、計173枚の枚数も同じ。

(204)——この後、時々日本書紀をみる。

(205)——当日条は日記巻末のメモから移録した。

(206)——当日条は日記巻末のメモから移録した。この昭和29年度日記の記事は精粗の差大にして、かつ好太王碑に関連しない記事は殆どない感じがする程、あたかも「好太王碑日記」の如くである。

(207)——本冊の広開土王に関する記事は、これだけ。

(208)——みな巻末記事。本冊本文に広開土王碑関連の記事なし。

(209)——「三 真碑文拓本研究」はやや大きく太く書す。

(210)——本日「改訂ヲ終ル」という『好太王碑文研究序説』は、本年3～5月に見える「序説」の「第一節」～「第三節」、一～三の構成・命名及び内容が、ほぼ「稿本A」に符合するようである。1948年「稿本A」に第三節なし、第二節に第「三」項ナシ。14日条の「三 真碑文拓本研究」とは、原石拓本研究を特に取り上げて、概説することを意味するか。原石拓本については、「稿本A」は第二節に、「t 根本的な差異」(原石拓本の特徴推測)、「u 原石拓本」において述べるだけである。

(211)——本条は、水谷氏が当時考えるところをあれこれ突き合わせようとして、全体的に甚だ難解になっている。「原石拓本」とは所謂「水谷拓本」をさすかと思われるが、その「原石拓本ノ臨写」が何を指すか不明。それらと「李雲従拓本」との関係、ましてその李本が「古形ト信ジ難イ」という論拠が何かなど、そのころ水谷氏が何を考えていたのか、私にはよく理解できない。水谷氏は「水谷拓本」が原石拓本であることを知っていたが、それが「李雲従拓本」であることは知らなかった。本条の前後に、朝鮮鐘研究者の坪井良平氏の名が多出する。

(212)——現存「四分冊稿本」の第三章(分冊第四)(31

頁裏)に小紙(縦11.0×横13.5cm)が貼付され、「營州考」相当の文章(20行)がある。文章の末尾に「331010後増改」、続いて「p31 左三末と二との間上部に貼る、1114貼ル」とあって、現物に合致する。

(213)——本日条に12～14日分を記す。

(214)——「11/30～12/2」は11月30日から12月2日まで。

(215)——本日条に4～7日分を記す。

(216)——現存「四分冊稿本」第三章碑文研究、分冊第四の272頁にa「卅三、十二、十二写定p.40-52右トp.40右下ニ記ス」、また本冊40頁右下隅にb「(卅三、十二、十二写定／p.40-52右)」との追記あり、さらに本冊52頁4行下に三種の追記、即ちc「p.40-52(此行まで)331112稿」／d「卅三、十二、十二夜十時廿分写ス」／e「右稿更ニ加筆、卅四、二、十九夕、廿移写此一紙」とあって、abdはみな日記各条に符合する。また、本冊40頁追記の左にf「(331112水起稿／331211終了)」とある。前掲のcとは、日記当日条に直接対応する記事はないが、その前後の記事によく合致する。即ち、日記の「好太王碑文研究」とは、間違いなく上記の「四分冊稿本」である。

(217)——「好太王碑文研究分冊第四」とは、現存「四分冊稿本」第三章碑文研究、分冊第四である。

(218)——本冊末尾に、「抄録」が存す。

(219)——本冊末尾に、好太王壺杆に関連してメモあり、また同王に関する事柄を8頁に亘って記載す。

(220)——巻末に「34/1/3。高句麗・新羅・百濟ハ、遼東公、樂浪公、帶方等封爵ヲ賜ルガ、倭ニハ□□□ノ地理志ニ載セラレタ郡県ノ封爵ハナイ。中国ノ封爵ヲウケテ、中国ノ属王タルヲ得ヌ以上、外藩王トシタダケデ、敢エテ中国侯王ヲ自称、天王ノ例ニ倣ツタノハ、高句麗好太王ノ先例ヲ更ニ進メタモノデアル。新羅ガ外藩国□□レテ天子ヲ称シタノハ、更ニ進メタモノデアル。真興王ガ樂浪公カラ天子ヲ称シタノハ、趙公石勒ノ□□□□ノ例ヲ思イ出サセル。561年ノ“寡人”ハ苻秦・蕭梁ニ新羅国王ト認メラレタルニ拠ルノデアロウ」とあり。倭王の封爵に関する解釈は面白い。ただ以下の史実とその解釈は、なお慎重さを要す。

(221)——巻末に「太王の称号が好太王の創制とすれば、諡法を逸脱した広開土境の号も又、中国の古制<sup>〔わざ〕</sup>を慙と逸脱する故意の撰定であるかも知れぬ。永樂の号が既に故事を無視したものである点を考えると、中国文化の研究が充分でなかった所爲であるようにも思われるが、如何に考えるべきであろうか。1/4後0時45」とあり。

(222)——巻末に「半島北半高句麗領ヲ除ク南鮮ノ一隅モ洩ラサズト云ウ意味ヲ、有名無実ノ秦韓・慕韓ノ名ガ示ス。其軍權ヲ握ッタノハ、祖彌征海北？十国ノ意味デ□□アロウ。「辛卯年来渡□破新羅□□百濟以爲臣民」ノ意味デアロウ。1/10, □ 5.20」とあり。「辛卯年」条の解釈、これは面白い。ただし、碑文の「新羅」「百濟」の順を間違え、二韓を有名無実とするなどは再考を要す。「？」前後の宋書原文は「渡平海北九十五国」。

(223)——本条の「好太王碑文研究」は、昨年日記の11～12月条に照らして、現存「四分冊稿本」である。

(224)——日記本日条の欄上に西川氏書翰の写しあり。

(225)——西川氏に預けた「稿」が「書品」百号所載の原稿、そのほか手元に「控エ」があった。朱筆の入った三冊本「稿本B」は、その朱が編集・印刷に関する指示なので「控エ」でなく、「書品」百号刊行後に返された原稿正本そのものであろう。「史論」は碑辞考・碑文考を指すか。

(226)——巻末に「任那加羅、横井氏任□、42年本那、南淵書□。(3.19, 前2.3)」とあり。

(227)——巻末に「倭□、横井氏寇、42年本寇(3.22, 夜11.25)」とあり。

(228)——本日条の欄上に伏見冲敬氏来翰(26日)の写しあり。

(229)——欄上に「好太王碑拓本ヲ伏見氏ニ假ス(30)」とあり。

(230)——欄上に「好太王碑原稿読直シ(3ヨリ)」とあり。巻末に「先日ハ兎ニ角、拓本ヲ御持チ願ッタノデスガ、拓本ノコト、何モ殆ンド御話致サズニ終ッタヨウニ思イ返サレマスノデ、墨本研究ノ稿ノ中ノ原石拓本ノ部分ヲ書き抜キマシタ。ソレニ私、原稿ニ添エタ証例中ノ写真ヲ御尋ネダッタノデ、精拓本ト名ケタ拓本冊ノコトモ抄録シマシタ。御手許ニ行ッテイル鄙考ハ、昭和24年12月～25年1月ニ書キマシタモノデ、今読ンダラ恐ラク不満ナモノト思イマス。然シ、先日御面論ノ如ク書き改メヨウトスルト大変デショウカラ、ナルベク旧ノママニシ、補充スル位ニシタイノデスガ、果シテドウデショウカ。トモカク一度見直シタイト思イマスノデ、御願イシマス訳デス。旧稿ノ後手ヲ入レマシタ尤モ大キナ部分ハ、墨本ノ総説概要デシタ。歴史的ノ考究ハ、分量ハ最も多く、増補シタノデスガ、書道家ノ御目ニカケルニハ、総説ガヨリ適当カト考エマスノデ、出来レバ此方ヲ増補シテ、旧稿ノ歴史ノ方ハ刪略シタイト思イマス。墨本概説唯15枚デスガ、私ノ研究ノ根本ノ趣意、方法ノ大要ヲ述ベタノデ、御覧ヲ願イマス。劉節氏ノ考釈ヲ御読ミノ由、甚ダ詳シイモノデスガ、私不満ノ点ヲ書イテ見マ

シタ。書体論ハ素人ノ盲者蛇ヲ恐レヌ議論デ、御訂正ヲ願エルコトト期待シマス。(4/3, 前11.10)。伏見氏ヘノ案。以上ヲ艸シタ直後、旧原稿五冊ヲ小包デ返送サレタノデ、此艸ハ自然消滅ニナッタ」とあり。「旧原稿五冊」とは、かつて江田氏を介して西川寧氏に預けた5冊、すなわち「変相(一冊)・研究写真証例(一冊)・摂要三冊」(昭和29年1月14日条)に相当する(「春夫謄写釈文」は冊数に含まれない)。

(231)——「24年12月稿」とは、「稿本B」をいう。巻末に「長楽王〔ノ〕長楽紀年ハ、〔好太王ノ〕永楽ノ着想ノ先例ダロウト推想スルガ、之ニハ尺度ハ無く、全ク思イ附キニ過ギヌ」とあり。

(232)——欄上に「好太王碑考等、伏見氏ヘ発送(9)」とあり。「好太王碑の変相」は、はじめ「参考」として預けられた。巻末に「好太王碑考(4/9命名、赤インキデ4冊ノ表紙ニ書ク)」とあり。

(233)——巻末に「墨本考ノ仮面漸増考証ノ証トシタ碑字。完成仮面ト旧拓本トノ差 a 1 臨、2 鯨。旧拓本間ノ差(b～e) 1 我、2 海、3 満境、4 □□。(控ガ取ッテナイノデ、思イ出シテ記シテ置ク、4/10 前4.10)」とあり。

(234)——末松論文、メチャクチャ評。ただし、この点だけは水谷氏に軍配。巻末に「生年月日。大正七年六月十一日、京城。八年四月、大阪支店転勤。十三年、退職。昭和二年四月、東洋史学科入学、東洋史・支那哲学。五年二月マデ聴講。六年三月、七年度分授業料未納ノ為除名。十四年四月・十八年八月、向島高校、歴史ト英語ノ講師。4/20」とあり。水谷氏の略歴。

(235)——巻末に「太王陵埴ノ存在ハ、太王陵即好太王陵ナルコトノ証(好太王以前ニ太王無シ)。歴史教育7巻4号、1959年4月、p83-91、末松保和、高句麗好太王碑文(史料解説)。p89下段末8行“好太王陵に擬定される大墓としては二つある。一は太王陵、その二は…將軍塚である…それぞれに論拠があつて、いまだ決定的断定にいたっていない”。p91上段末7行、“筆者横井忠直は、陸軍参謀本部の関係者であつた”。角礫凝灰岩？4/22 前10.09」とあり。

(236)——欄上に「好太王碑釈文校正刷リ(25〔日〕)」とあり。

(237)——巻末に「我好太王碑文研究ノ先輩ノ研究ト異ナル特徴。(1) 拓本ト写真ヲ集メテ比較シタコト。○先輩ハ概ネ集メズ、比較セズ。(2) 今西博士ノ発見サレタ漆喰仮面ノ存在ヲ拓本選別ノ規準トシタコト。○劉節氏ハ(1)ヲ実行シテ(2)ヲ知ラズ。(3) 雙鉤廓填本ノ研

究ヲシタコト。(4) 雙鈎廓填本ヲ拓本や写真ト比較シタコト。○先輩ハ(3) ヲサレタガ、(4) ヲサレズ。(5) 前4項ノ研究ノ結論ニ合致スル古拓本ヲ得ルコトガ出来タコト(4/28前5.3□記)」とあり。自ら誇る水谷氏の碑文研究方法を整然と列記する。「古拓本」が水谷原石拓本であることは言うまでもない。

(238)——欄上に「好太王碑考校正、10～14〔日〕」とあり。

(239)——MEMO欄に「11日ニ、好太王碑考校正p2-32ガ着ク。包装用紙ノ名宛・日時ヲ見ルト、此方ハ7日午後、東洋書道協会第5種速達デ、伏見氏ヘ行ッタ。伏見氏ヘ8日(武蔵野局8日朝スタンプ)着。伏見氏、少シ鉛筆ヲ入レテ見セテ、其日□□日本橋局ニ書留小包、9日スタンプ発。ソレガ遅レテ11日着イタ(原稿ヲ重視サレテダロウ、書留デ)。恐ラク其ノ後デ、——封筒ヲ裏返シテ、今日費ッテ了ッタノデ、確カメ難イガ——10日朝着イタ。速達便ガ発送サレタノダロウ。□□…」とあり。巻末に「11日午前、好太王碑考“再校”……」とあり。

(240)——欄上に「好太王碑考校正、14 発送」とあり。

(241)——巻末に「好太王碑考(文ハナカッタ)第二章碑字考附碑辞考ヲ校正、……」とあり。

(242)——巻末に「東洋文庫デモ一度見タイ、長白徴存録、輯安県志、劉節氏ノ国学季刊論文(羅氏神州国光集釈文)。○陸氏続」とあり。

(243)——欄上に「好太王碑文研究増稿写定(26日)」とあり。

(244)——巻末に「好太王碑文ノ疑問、後□燕ニ関スル記事ノ絶無ナ事」とあり。

(245)——巻末に「晋書載記。燕王垂時、慕容農……遼東太守ヲシテ、流民〔ノ〕高句麗ニ入ッテ居ルヲ招撫セシム。5/28前11.40」とあり。

(246)——巻末に「營の字、証ヲ求ムベキナラン。5/29前0時51」とあり。

(247)——欄上に「好太王碑墨本研究増稿(8日)」とあり。

(248)——巻末に「〔新撰〕姓氏録好大王(太王カ)。太王ノ伝、失ナワレズ。6/19後11.0。日本ニ伝、失ワレズ。新羅、壺杆伝ワル。……後11.09」とあり。

(249)——『書品』100号の「略履歴」は、このとき提出したか。このとき伏見氏が撮影した写真は二種現存す。欄上に「伏見氏贈好太王碑考校正刷(23日)。原石拓本歸ル(23)」とあり。MEMO欄に「(23日記補記ノ追記)3/30伏見氏来訪ノ時ハ、強風デニ階ニ座レズ。座敷デ話シ、拓本ヲ広ゲタ。23日ハ幸ニ穏カデ、雨ガ□シタ処(階段一部濡レテ居タガ)ニ階ニ上ッテモラッテ、ユツ

クリト御話ヲ聞ク時間ガ無カッタノハ遺憾。書道雑誌ノ編集ノ御苦心、書道ノ話ナドヲキキタカッタノダガ(29夜9.4)。(23)伏見氏ノ話。既ニ今頃出刊ノ予定ダッタガ、遅クナッタ。然シ印刷ニカカッテ居ル、間モ無ク出ルト。印刷ニカカッタガ、重大ナ□正ヲ□スレバ速報シテクレト。返事シテ、一寸見ルニ、第3章ノ写真版「爲我連下迎王」ノ精拓本逆サニ写リ、下段ニ並ベタ“三井氏本”ト“近拓本”トガ、写真入レ替ワッテ居ル。“近拓本”ノ写真、知ラス拓本デアル。或ハ鄭孝胥氏拓本デアロウカト思ウガ。伏見氏ニ訊ネレバ良カッタ。原石拓本写真ハ逆サナノハ、訂正シテ居ル。明日ニモ一読シテ見ル必要ガアル(11時6分)」とあり。

水谷『好太王碑考』6頁の写真と対照すると、「精拓本〔水谷旧蔵精拓本〕」と「三井氏本」はともに問題なし。「近拓本」は水谷氏も知らぬもので、伏見氏が並載したものらしい。水谷氏はこれを「鄭孝胥氏拓本か」と推定するが、その根拠は不明である。「近拓本」なるものを、水谷氏が鄭孝胥本に擬した「比田井南谷本」「大平山濤本」と対照するに、みな「近拓本」とは異なる別本である。下出の「府精拓」は朝鮮総督府拓本。

(250)——欄上に「好太王碑字の変相校正(26、27)」とあり。

(251)——欄上に「好太王碑三井氏本石印本返ル(4)」とあり。

(252)——欄上に「書品100号郵寄(10)、(不完全本故取替ウ)」とあり。『書品』100号、水谷氏論文の発表(昭和34年6月1日発行)。なお「初稿」は「精拓本」(水谷旧蔵精拓本)に拠ったのである。金子鵬亭氏蔵剪貼本の由来について。同本は、やはり江田文雅堂から出たものだ。評価は翌11日条を参照せよ。

(253)——釈文訂正の「三ヲニト誤ル」は重要。自己写真の自己評について、「仙人ジミタ笑顔」の写真1枚とは、『書品』100号所載の水谷氏の写真のことか。

(254)——欄上に「書品100号4冊モラウ(24)」とあり。「天ヶ瀬家」については欄上に「順の婚家」とあり(昭和33年1月18日条参照)。

(255)——「正男様」は高取正男、民俗学、名古屋出身で京都女子大学勤務。「名古屋・香取」は妻方の実家のこと。8月1日条で岳母から到着を伝える葉書が届く。

(256)——欄上に「好太王碑考原稿料(6日)」とあり。

(257)——牟頭妻墓誌、以後しばしば見ゆ。

(258)——これらは前年4月9日に伏見氏の為に抄録して送ったものであり、論文原稿(「稿本B」)ではない。

(259)——水谷氏の原稿料。原稿料の話題は3月までつ

づく。「(8-)」は午前8時か。「1.207」は別稿の源泉徴収税額か。

(260)——水谷氏が昭和初めに東大東洋史に聴講生(学士入学)として来た当時のエピソード。三上先生は何時でも誰からも「若い」といわれた。

(261)——巻末に突然書出す。北燕のことは碑文の紀年記事に対する洞察であろう。(水谷著『好太王碑考』93～94頁)の原拠と思われる。

(262)——末松先生との意外な関係があった! 常夫氏は悌二郎氏の五男で、この二日後、「学習院大学4/5発達達、“入学手続き書類在中”ト朱書サレタル、着。開封シテ見ルト、“大学院入学許可証”」云々とある。

(263)——巻末にみゆ。面白い着想。高句麗もまた所謂「二重神代紀」ではなかろうか。武田幸男「高句麗王系成立の諸段階」(『高句麗史と東アジア』第11章、岩波書店、1989年)に詳しい。

(264)——巻末にみゆ。此の冊が直接触れた「好太王碑」記事はここだけ。

(265)——好太王碑関係記事、一つもなし。

(266)——「書品」発表論文「好太王碑考」の解体、組み換えを考えていたのである。ただし、解体後の再構築の構想プランは不明。末松先生は既発表論文のまま、開明書院から著書として刊行したわけである。

(267)——巻末に「四十、一、廿一。史料世界史上巻ヲ買ッテ、其夜、好太王碑ノ部ヲ読ミ、夜中ニ覚メテ次頁ノ記事ヲ作ッタノデアル。念ノ爲ニ、研究分冊第三冊碑辞研究ニ綴取シタ前考ヲ見ルト、大概ハ書イテアルガ、尚、充分意ヲ尽シテ記シタイト思フ。(前十時廿五分記)ノ鄒牟王者ノ祖ノ神人格ヲ述ベル爲メニ造説ス。東夷ノ一王ノ所在ヲ知ラザルヲ奇禍トシテ、□ッテ高句麗祖王トシタルモノ。飾ルニ王者ノ礼辞ヲ用テ、神異ヲ集メタ造説。近祖朱留ヲ基本ニシテ、之ニ小ヲ加エテ大ニ対セシメタル。朱留ノ雙声疊韻ヲ用ッテ、騶ニ依ッテ鄒牟。繼嗣ノ義ニ依ッテ、儒留ニ王号ヲ造ル。……(四十、一、廿二、前四時十分)」とあり。

(268)——「原石拓本剪装本」とは、翌日条に見える「金子氏蔵好太王碑拓本写真版」のこと。

(269)——日記欄外に、「好太王碑拓本、金子氏本校看、5、6日」とある。水谷氏の初めての金子氏本校勘記。尚「家蔵本〔水谷原石拓本〕ニ拓墨ヲ附ケタ字」とあるが、これは写真が良くないせいであろう。私も最初に写真版を見たときの印象は、水谷原石拓本とはかなり違って加墨したよう見えたが、現物はともに李雲従の手拓になった原石拓本である。

(270)——124は酒匂将来本、125は岸田吟香寄贈本。なお、「看聞抄録」は時期を選ばず、後々追加した記事があるので要注意。

(271)——「一ノ十一ノ冊」は第1面第11行第40字、以下同じ。

(272)——本条の「廿三、五、廿八」は昭和23年5月28日を示す。以下「廿三、八、五朝九時」「廿六、五、十四朝八時」等も同じ。

(273)——水谷メモに「此章廿六、八、念四改訂」(第4葉末尾注)とあり。

(274)——水谷メモに「昭和廿六年八月初九、此一項を増す。旧は著録に見えた拓本の中に容れたのを削った」(第148葉末尾注)、「昭和廿六年七月、東洋文庫で通溝両冊を拝見、八月十二日誌す」(第150葉末尾注)とあり。

(275)——水谷メモに「以下目三葉、本文廿七葉、初稿本なるを再稿に刪る。廿七、三、十九。綴じ込みて旧考を保存す。廿七、三、三十一」(目第一葉頭注)とあり。

(276)——目録にいう「第一章緒論」を指すか。

(277)——水谷メモに「昭和廿三年八月一日序説を書き始め、十日終わる。十五日本論を書き始め、九月十五日第二章を終わった。今年五月まで刪改数次。十一月十三日第三章を写し始め、廿二日に終る。東京都目黒区大岡山百十九番地泰光精舎にて。水谷悌二郎。昭和廿四年十一月卅日午後、此記を添えた。印」(第300葉末尾記①)、「昭和廿六年七月下旬ヨリ八月中旬ニ亘理リ、東洋文庫ニ諸文献ヲ拝見。此ニ増補シ、又刪定ス。八月十八日誌す」(第300葉末尾記②)とあり。

(278)——三冊本『好太王碑考』は、「書品」百号掲載の原稿そのもの。ただし、同誌所載の原稿「附・好太王碑字の変相(要約)」は欠如する。

(279)——表紙中央に青ペンで「好太王碑墨本考」と大書し、その右に赤ペンで「好太王碑考 第一冊」と大書する。書名は赤に従うが、それ以外は青筆による。赤ペンは「書品」百号掲載原稿として整理するためのものであり、また原稿中の赤鉛筆は編集・印刷時の指示とおもわれる。なお、表紙左端にペン書きで2行、「(好太王碑文研究撰要之一)ノ(序説)」と書かれるが、上と同じ赤ペンで線引され抹消される。

(280)——水谷メモに「(昭和廿四年十二月十六日稿)(昭和三十四年五月少数の文字を刪訂す)」とあり。

(281)——水谷メモに「東京都目黒区大岡山百十四ノ水谷悌二郎 原稿」とあり。

(282)——表紙中央に青字で「好太王碑字考」「好太王碑辞考」と大書され、右に赤で「好太王碑考 第二冊」と



大書あり、書名は赤に従うが、本文は青筆による。左に青で「(好太王碑文研究 撰要之二) / (第一章・第二章)」と書かれるが、例の赤ペンで抹消される。全体の赤エンピツは第一冊に同じ。

(283)——水谷メモに「(昭和廿四年十二月十九日稿)(昭和三十四年四月五月僅少字刪訂)」,「東京都目黒区大岡山百十四/水谷悌二郎 原稿」(裏表紙)とあり。

(284)——表紙中央に青字で「好太王碑文考」と大書され、右に赤で「好太王碑考 第三冊」と大書あり、書名は赤に従うが、本文は青筆による。左に青で「(好太王碑文研究 撰要之三) / (第三章)」と書かれるが、例の赤ペンで抹消される。全体の赤エンピツは第一冊に同じ。

(285)——論著と照合して、見出し・順序ともほぼ同じだが、ただ論著はその冒頭に、「第二本『好太王碑文研究』」碑文考の1項「高句麗文化の記念碑」を置いた。水谷メモに「(昭和廿四年十二月廿三日稿)(昭和三十四年四月上瀬□□□□)」とあり。

(286)——水谷メモに「東京都目黒区大岡山百十四/水谷悌二郎 原稿」(裏表紙)とあり。

(287)——『朝鮮史のしるべ』の執筆者は末松保和氏。

(288)——「の脱碑」あたりは衍字か、あるいは脱字があるか。

(289)——「五」の横に、末松先生の筆跡で正しく「廿五」の書込あり。

(290)——書家とは「書品」百号によると、金子鵠亭氏である。

(291)——いわゆる「水谷旧蔵精拓本」についての問い合わせ。「水谷旧蔵精拓本」については、武田幸男「〈水谷旧蔵精拓本〉の実像を求めて—その実態解明と類型論—」(『朝鮮文化研究』7, 2000年3月)。金光図書館(岡山県浅口市)が所蔵する『初拓好太王碑』全12冊がこれに該当することが、2012年の調査で確認された(稲田奈津子「金光図書館所蔵『初拓好太王碑』と『水谷旧蔵精拓本』」〈古瀬奈津子編『広開土王碑拓本の新研究』同成社, 2013年〉参照)。

(292)——封筒裏の上部に末松先生筆跡の横書き三行で、「811-0433(鉛筆書き)/本2-38-1/江田勇二(以上ボールペン書き)」とある。上段は江田氏の電話番号、中段は住所、「本」は文京区本郷の略。

(293)——この年の9月1日、水谷悌二郎著・末松保和解説『好太王碑考』を開明書院より刊行する。

(294)——このときは満83歳。同年12月24日に満84歳になる。

(295)——水谷信子様から、水谷悌二郎(名古屋市昭和区広路町石坂四三 吉田緑方)より水谷吉夫様(東京都目黒区大岡山1-27-1)宛て、昭和52年12月27日付け官製はがきを、平成27年(2015)12月12日にわざわざ郵送して頂いた。

(296)——『好太王碑考』(開明書院, 同年9月1日発行)のことか。

(297)——最後の一文は小字。

〔付記1〕日記を翻刻された武田幸男先生は、2021年8月4日に逝去された。本稿の「序文」が絶筆となってしまった。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

〔付記2〕本稿は、JSPS科学研究費基盤研究(B)19H01301「古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開」(研究代表者・三上喜孝), および(C)16K02993「東アジア儀礼文化の比較史的研究—「物品目録」からの復元的考察—」(研究代表者・稲田奈津子)による成果の一部である。

武田幸男(東京大学名誉教授)

稲田奈津子(東京大学史料編纂所)

三上喜孝(国立歴史民俗博物館研究部)

(2021年3月16日受付, 2021年7月27日審査終了)